卅四 知るべし、我は却てあまりに貪婪に遠ざかれるため、幾千の月この
放縦を罰せるなり
卅七 我若し汝が恰も人の性を憤るごとくさけびて、あゝ黄金の不浄の饑
よ汝人慾を導いていづこにか到らざらんと
いへる處に心をとめ、わが思を正さゞりせば、今は轉ばしつゝ憂き
柢觸を感ずるものを
四十三 かの時我は費やすにあたりて手のあまりにひろく翼を伸ぶるをうる
を知り、これを悔ゆること他の罪の如くなりき
四十六 それ無智のために生くる間も死に臨みてもこの罪を悔ゆるあたはず、
後髪を削りて起き出るにいたる者其數いくばくぞ
四十九 汝また知るべし、一の罪とともに、まさしく之と相反する咎、その
縁をこゝに涸らすを

五十二 是故にわれ罪を淨めんとてかの貪婪のために嘆く民の間にありきと
も、之と反する愆のゆゑにこそ此事我に臨めるなれ。
五十五 牧歌の歌人いひけるは。汝ジョカスタの二重の憂の酷き爭を歌へる
ころは
五十八 クリオがこの詩に汝と關渉ふさまをみるに、善行にかくべからざる
信仰未だ汝を信ある者となさゞりしに似たり
六十一 若し夫れ然らばいかなる日またはいかなる燭ぞや、汝がその後かの
漁者に從ひて帆を揚ぐるにいたれるばかりに汝の闇を破りしは。
六十四 彼曰ふ。汝まづ我をパルナーゾの方にみちびきてその窟に水を掬ぶ
をえしめ、後また我を照して神のみもとに向はしめたり
六十七 汝の爲すところはあたかも夜燈火を己が後に携へてゆき、自ら益を
得ざれどもあとなる人々をさとくする者に似たりき

七十 そは汝のいへる詞に、世改まり義と人の古歸り新しき族天より降るとあればなり

七十三 我は汝によりて詩人となり汝によりて基督徒となれり、されどわが概略に書ける物を尚良く汝に現はさんため我今手を伸て彩色らん

七十六 眞の信仰は永久の國の使者等に播かれてすでにあまねく世に滿ちたりしに

七十九 わが今引ける汝の言、新しき道を傳ふる者とその調を同うせしかば、彼等を訪るゝことわが習となり

八十二 かのドミチアーノが彼等を責めなやませしとき、わが涙彼等の嘆にともなふばかりに我は彼等を聖なる者と思ふにいたれり

八十五 われは世に在る間彼等をたすけぬ、彼等の正しき習俗は我をして他の教をあなどらしめぬ

八十八 かくてわが詩に希臘人を導きてテーベの流に到らざるさきにわれ洗禮をうけしかど、公の基督徒となるをおそれて

九十一 久しく異教の下にかくれぬ、この微温なりき我に四百年餘の間第四の圈をめぐらしめしは

九十四 されば汝、かゝる幸をかくせし蓋をわがためにひらける者よ、若し知らば、我等が倶に登るをうべき道ある間に、我等の年へし

テレンチオ、チエチリオ、プラウト及ヴルロの何處にあるやを我に告げよ、告げよ彼等罪せらるゝや、そは何の地方に於てぞや。

百 わが導者答ふらく。彼等もペルシオも我もその他の多くの者も、かのムーゼより最も多く乳を吸ひし希臘人とゝもに

百〇三 無明の獄の第一の輪の中にあり、我等は我等の乳母等の常にとゞまる山のことをしば〳〵かたる

エウリピデ、アンチフオンテ、シモニーデ、アガートネそのほかそ 百〇六
のかみ桂樹をもて額を飾れる多くの希臘人かしこに我等と俱にあり
汝が歌へる人々の中にては、アンチゴネ、デイヒレ、アルジア及昔
の如く悲しむイズメーネあり 百〇九
ランジアを示せる女あり、チレシアの女とテーチ、デイダーミアと
その姉妹等あり。 百十二
登りをはりて壁を離れしふたりの詩人は、ふたゝびあたりを見るこ
とに心ひかれて今ともに默し 百十五
晝の四人の侍婢ははやあとに殘されて、第五の侍婢轅のもとにその
燃ゆる尖をばたえず上げゐたり 百十八
このとき我導者。思ふに我等は右の肩を緣にむけ、山を廻ること常
の如くにせざるをえざらむ。 百廿一
習慣はかしこにてかく我等の導となれり、またかしてかの貴き魂の肯
へるため我等いよ〳〵疑はずして路に就けり 百廿四
彼等はさきに我ひとり後よりゆけり、我は彼等のかたる言葉に耳を
傾け、詩作についての教をきくをえたりしかど 百廿七
このうるはしき物語たゞちにやみぬ、そは我等路の中央に、香やは
らかくして良き果ある一本の木を見たればなり 百卅
あたかも樅の、枝また枝と高きに從つて細きが如く、かの木は思ふ
に人の登らざるためなるべし、低きに從つて細かりき 百卅三
われらの路の塞がれる方にては、淸き水高き岩より落ちて葉の上に
のみちらばれり 百卅六
ふたりの詩人樹にちかづけるに、一の聲葉の中よりさけびていふ。
汝等はこの食物に事缺かむ。 百卅九

又曰ふ。マリアは己が口（今汝等のために物言ふ）の事よりも、婚 百四十二
筵のたふとくして全からむことをおもへり
昔の羅馬の女等はその飲料に水を用ゐ、またダニエールは食物をい 百四十五
やしみて智識をえたり
古の代は黄金の如く美しかりき、饑ゑて橡を味よくし、渇きて小 百四十八
川を聖酒となす
蜜と蝗蟲とはかの洗禮者を曠野にやしなへる糧なりき、是故に彼榮 百五十一
え、その大なること
聖史の中にあらはるゝごとし。 百五十四

第二十三曲

我はあたかも小鳥を逐ひて空しく日を送る者の爲すごとくかの青葉 一
に目をとめゐたれば
父にまさる者いひけるは。子よ、いざ來れ、我等は定まれる時をわ 四
かちて善く用ゐざるをえざればなり。
われ目と歩を齊しく移して聖達に從ひ、その語ることを聞きつゝ行 七
けども疲をおぼえざりしに
見よ、嘆と歌ときこえぬ、主よわが唇をと唱ふるさま喜とともに憂 十
を生めり
あゝやさしき父よ、我にきこゆるものは何ぞや。我斯くいへるに彼。 十三
こは魂なり、おそらくは行きつゝその負債の綱を解くならむ。

たとへば物思ふ異郷の旅人、路にて知らざる人々に追及き、ふりむ 十六
きて之をみれども、その足をとゞめざるごとく

信心深き魂の一群、もだしつゝ、我等よりもはやく歩みて後方より 十九
來り、過ぎ行かんとして我等を目守れり

彼等はいづれも眼窪みて光なく、顔あをざめ、その皮骨の形をあら 廿二
はすほどに痩せゐたり

思ふに饑を恐るゝこといと大なりしときのエリシトテといふともそ 廿五
のためにかく枯れて皮ばかりとはならざりしならむ

我わが心の中にいふ。マリアその子を啄みしときゼルサレムメを失 廿八
へる民を見よ。

眼窩は珠なき指輪に似たりき、OMOを人の顔に讀む者Mをさだか 卅一
に認めしなるべし

若しその由來を知らずば誰か信ぜん、果實と水の香、劇しき慾を生 卅四
みて、かく力をあらはさんとは

彼等の瘦すると膚いたはしく荒るゝ原因未だ明ならざりしため、そ 卅七
の何故にかく饑ゑしやを我今異しみゐたりしに

見よ、一の魂、頭の深處より目を我にむけてつら〳〵視、かくて高 四十
くさけびて、こはわがためにいかなる恩惠ぞやといふ

我何ぞ顔を見て彼の誰なるを知るをえむ、されどその姿の毀てるも 四十三
のその聲にあらはれき

この火花はかの變れる貌にかゝはるわが凡ての記憶を燃やし、我は 四十六
フオレーゼの顔をみとめぬ

彼請ひていふ。あゝ、乾ける痂わが膚の色を奪ひ、またわが肉乏し 四十九
とも、汝之に心をとめず

我に汝の身の上と汝を導くかしこの二の魂の誰なるやを告げよ、我 五十二
に物言ふを否むなかれ。
我答へて彼に曰ふ。死てさきに我に涙を流さしめし汝の顔は、かく 五十五
變りて見ゆるため、かの時に劣らぬ憂を今我に與へて泣かしむ
然ば告よ、われ神を指て請ふ、汝等をかく枯す物は何ぞや、わが異 五十八
む間我に言しむる勿れ、心に他の思滿ればその人いふ事宜をえず。
彼我に。永遠の思量によりて我等の後方なるかの水の中樹の中に力 六十一
くだる、わがかく痩するもこれがためなり
己が食慾に耽れるため泣きつゝ歌ふこの民はみな饑ゑ渇きてこゝに 六十四
ふたゝび己を清くす
果實より、また青葉にかゝる飛沫よりいづる香氣は飲食の慾を我等 六十七
の中に燃すなり
しかして我等のこの處を廻りて苦を新にすることたゞ一度にとゞま 七十
らず——われ苦といふ、まことは慰といはざるべからず
そは基督の己が血をもて我等を救ひたまへる時、彼をしてよろこび 七十三
てエリといはしめし願我等を樹下に導けばなり。
我彼に。フォレーゼよ、汝世を變へてまさる生命をえしよりこの方 七十六
いまだ五年の月日經ず
若し我等を再び神に嫁がしむる善き憂の時到らざるまに、汝の罪を 七十九
犯す力既に盡きたるならんには
汝いかでかこゝに來れる、我は汝を下なる麓、時の時を補ふところ 八十二
に今も見るならんとおもへるなりき。
是に於てか彼我に。わがネルラそのあふるゝ涙をもて我をみちびき、 八十五
苛責の甘き茵蔯を飲ましむ

彼心をこめし祈禱と嘆息をもて、かの魂の待つ處なる山の腰より我
を引きまた我を他の諸の圓より救へり
わが寡婦わが深く愛せし者はその善行の類少なきによりていよ〳〵
神にめでよろこばる
そは婦人の愼に於ては、サールデニアのバルバジアさへ、わがかの
女を殘して去りしバルバジアよりはるかに上にあればなり
あゝなつかしき兄弟よ、我汝に何を告げんや、今を昔となさゞる未
來すでにわが前にあらはる
この時到らば教壇に立つ人、面皮厚きヒレンツエの女等の、乳房と
胸を露はしつゝ外に出るをいましむべし
いかなる未開の女いかなる「サラチーノ」の女なりとて、靈または
他の懲戒なきため身を被はずして出でし例あらんや
されどかの耻知らぬ女等、若し廻轉早き天が彼等の爲に備ふるもの
をさだかに知らば、今既に口をひらきてをめくなるべし
そはわが先見に誤なくば、今子守歌を聞きてしづかに眠る者の頰に
鬚生ひぬまに彼等悲むべければなり
あゝ兄弟よ、今は汝の身の上を我にかくすことなかれ、見よ我のみ
かは、これらの者皆汝が日を覆ふところを凝視む。
我即彼に。汝若し汝の我と我の汝といかに世をおくれるやをおもひ
いでなば、その記憶は今も汝をくるしめむ
わが前にゆく者我にかゝる生を棄てしむ、こは往日これの――かく
いひて日をさし示せり――姉妹の圓く現はれし時の事なり
彼我を彼に從ひてゆくこの眞の肉とともに導いて闇けし夜を過ぎ、
まことの死者をはなれたり

我彼に勵まされてかしこをいで、汝等世の爲めに歪める者を直くす 百廿四
るこの山を登りつゝまた廻りつゝこゝに來れり
彼はベアトリーチエのあるところにわがいたらん時まで我をともな 百廿七
はむといふ、かしこにいたらば我ひとり殘らざるをえず
かく我にいふはこの者即ヸルジリオなり（我彼を指ざせり）、またこ 百卅
れなるは汝等の王國を去る魂なり、この地今
その隅々までもゆるげるは彼のためなりき。

第二十四曲

言歩を、歩言をおそくせず、我等は語りつゝあたかも順風に追は 一
るゝ船のごとく疾く行けり
再び死し者に似たる魂等はわが生くるを知り、我を見て驚愕を目の 四
坎より吐けり
我續いてかたりていふ。彼若し伴侶のためならずば、おそらくはな 七
ほ速に登らむ
されど知らば我に告げよ、ピッカルダはいづこにありや、また告げ 十
よ、かく我を視る民の中に心をとむべき者ありや。
わが姉妹（その美その善いづれまされりや我知らず）は既に高きオ 十三
リムポによろこびて勝利の冠をうく。

彼まづ斯くいひて後。我等の麥食物のためにかく搾り取らるゝがゆ 十六
ゑに、こゝにては我等誰が名をも告ぐるをう
此は——指ざしつゝ——ボナジユンタ、ルッカのボナジユンタなり、 十九
またその先のさはだちて憔悴し顏は
かつて聖なる寺院を抱けり、彼はトルッの者なりき、いま斷食によ 廿二
りてボルセーナの鰻鱺とヱルナッチヤを淨む。
その他多くの者の名を彼一々我に告ぐるに、彼等皆名をいはるゝを 廿五
厭はじとみえ、その一者だに憂き狀をなすはあらざりき
我はウバルデーノ・ダルラ・ピーラと、杖にて多くの民を牧せしボニ 廿八
ファチオとが、饑の爲に空しくその齒を動すを見たり
我はメッセル、マルケーゼを見たり、此者フオルリにありし頃はか 卅一
く劇しき渴なく且飮むに便宜多かりしかどなほ飽く事を知らざりき

されど恰も見てその中よりひとりを擇ぶ人の如く我はルッカの者を 卅四
えらびぬ、彼我の事を知るを最希ふさまなりければ
彼はさゝやけり、我は彼がかく彼等を瘦せしむる正義の苦痛を知る 卅七
ところにてゼンッッカといふを聞きし如くなりき
我曰ふ。あゝかく深く我と語るを望むに似たる魂よ、請ふ汝のいへ 四十
ることを我にさとらせ、汝の言葉をもて汝と我の願を滿たせよ。
彼曰ふ。女生れていまだ首帕を被かず、この者わが邑を、人いかに 四十三
誹るとも、汝の心に適はせむ
汝この豫言を忘るゝなかれ、もしわが低語汝の誤解を招けるならば、 四十六
この後まことの事汝に之をときあかすべし
されど告げよ、かの新しき詩を起し、戀を知る淑女等とそのはじめ 四十九
にいへる者是即汝なりや。

我彼に。愛我を動かせば我これに意を留めてそのわが衷に口授する　五十二
ごとくうたひいづ。
彼曰ふ。あゝ兄弟よ、我今かの公の證人とグイットネと我とをわが　五十五
聞く麗はしき新しき調のこなたにつなぐ節をみる
我よく汝等の筆が口授者にちかく附隨ひて進むをみる、われらの筆　五十八
にはげにこの事あらざりき
またなほ遠く先を見んとつとむる者も彼と此との調の區別をこの外　六十一
にはみじ。かくいひて心足れるごとく默しぬ
ニーロの邊に冬籠る鳥、空に群り集ひて後、なほも速かに飛ばんた　六十四
め連り行くことあるごとく
その瘦すると願あるによりて身輕きかしこの民は、みな首をめぐら　六十七
しつゝふたゝびその歩履をはやめぬ

また走りて疲れたる人その侶におくれ、ひとり歩みて胸の喘のしづ　七十
まる時を待つごとく
フオレーゼは聖なる群をさきにゆかしめ、我とともにあとより來り　七十三
ていひけるは。我の再び汝に會ふをうるは何時ぞや。
我彼に答ふらく。いつまで生くるや我知らず、されどわが歸ること　七十六
早しとも、我わが願の中に、それよりはやく此岸に到らむ
そはわが鄕土となりたる處は、日に日に自ら善を失ひ、そのいたま　七十九
しく荒るゝことはや定まれりとみゆればなり。
彼曰ふ。いざ行け、我見るに、此禍に關はりて罪の最も大なるもの、　八十二
一の獸の尾の下にて曳かれ、罪赦さるゝ例なき溪にむかふ
獸はたえずはやさを增しつゝ一足每にとくすゝみ、遂に彼を踏み碎　八十五
きてその耻づべき軀を棄つ

これらの輪未だ長く廻らざるまに（かくいひて目を天にむく）、わが　八十八
言のなほよく說明す能はざるもの汝に明なるにいたらむ
いざ汝あとに殘れ、この王國にては時いと尊し、汝と斯く相並びて　九十一
ゆかば、わが失ふところ多きに過ぎむ。
たとへば先登の譽をえんとて、馬上の群の中より一人の騎士、馳せ　九十四
出づることあるごとく
彼足をはやめて我等を離れ、我は世の大なる軍帥なりし二者ととも　九十七
に路に殘れり
彼既に我等の前を去ること遠く、わが目の彼に伴ふさま、わが心の　百
彼の詞にともなふごとくなりしとき
いま一本の樹の、果饒にして盛なる枝我にあらはる、また我此時は　百〇三
じめてかなたにめぐれるなればその處甚遠からざりき

我見しに民その下にて手を伸べつゝ葉にむかひて何事をかよばゝり　百〇六
ゐたり、罪なき嬰兒物を求めて
乞へども乞はるゝ人答へず、かへつて願を增さしめんためその乞ふ
物をかくさずして高く擡ぐるも此類なるべし
かくて彼等はあたかも迷覺めしごとく去り、我等はかく多くの請と　百十二
淚を郤くる巨樹のもとにたゞちにいたれり
汝等過ぎゆきて近づくなかれ、エーヴのくらへる木この上にあり、　百十五
これはもとかの樹よりいづ。
誰ならむ小枝の間よりかくいふ者ありければ、ヸルジリオとスター　百十八
チオと我とは互に近く身を寄せつゝ聳ゆる岸の邊を行けり
かの者またいふ。雲間に生れし詛の子等即ち飽いてその二重の胸を　百廿一
もてテセオと爭へる者を憶へ

百廿四 また貪り飲みしため、マヂアンにむかひて山を下れるゼデオネがその侶となさゞりし希伯來人を憶へ。

百廿七 かく我等は二の縁の一を傳ひて、幸なき報のともなへる多食の罪の事をきゝつゝこゝを過ぎ

百卅 後身を寛にしてさびしき路を行き、いづれも言葉なく思に沈みて祐に千餘の步履をはこべり

百卅三 汝等何ぞただみたり行きつゝかく物を思ふや。ふと斯くいへる聲ありき、是に於てか我は恰もおぢおそるゝ獸の如く顫ひ

百卅六 その誰なるやを見んとて首を擧ぐればひとりの者みゆ、爐の中なる玻璃または金屬といふとも斯く光り

かく赤くみゆるはあらじ、彼曰ふ。汝等登らんことをねがはばこゝより折れよ、往いて平和をえんとする者みなこなたにむかふ。

百四十二 彼の姿わが目の力を奪へるため、我は身をめぐらして、あたかも耳に導かるゝ人の如く、わがふたりの師の後にいたれり

百四十五 曉告ぐる五月の輕風ゆたかに草と花とを含み、動きて佳香を放つごとくに

百四十八 うるはしき風わが額の正中にあたれり、我は神饌の匂を我に知らしめし羽の動くをさだかに志れり

百五十一 また聲ありていふ。大なる恩惠に照され、味の愛飽くなき慾を胸に燃やさず

常に宜に從て饑うる者は福なり。

第二十五曲

時は昇の遲きを許さず、そは子午線を日は金牛に夜は天蠍にはや付 一
したればなり

さればあたかも必要の鞭にむちうたるゝ人、いかなる物あらはるゝ 四
とも止まらずしてその路を行くごとく

我等はひとりづゝ徑に入りて階を登れり（階狹きため昇る者並び行 七
くをえず）

たとへば鸛の雛、飛ぶをねがひて翼をあぐれど、巣を離るゝの勇な 十
くして再び之を收むるごとく

わが問はんと欲する願燃えてまた消え、我はたゞいひいださんと構 十三
ふる者の狀をなすに過ぎざりき

歩速かなりしかどもわがなつかしき父は默さで、汝鏃までひきしぼ 十六
れる言の弓を射よといふ

この時我これにはげまされ、口を啓きていふ。滋養をうくるに及ば 十九
ざるものいかにして痩するを得るや。

彼曰ふ。汝若しメレアグロの身が、火炬の燃え盡くるにつれて盡き 廿二
たるさまを憶ひ出でなば、此事汝にさとりがたきにあらざるべく

また鏡に映る汝等の姿が、汝等の動くにつれて動くを思はゞ、今硬 廿五
くみゆるもの汝に軟かにみゆるにいたらむ

されど汝望むがまゝに心を安んずることをえんため、見よ、こゝに 廿八
スターチオあり、我彼を呼び彼に請ひて汝の傷を癒さしむべし。

スターチオ答ふらく。我この常世の狀態を汝のをる處にて彼に說明 卅一
すとも、こは汝の請をわが否む能はざるが爲なれば咎むるなかれ。

かくてまたいふ。子よ、汝の心わが詞を見てこれを受けなば、これ 卅四
は即ち汝の質す疑を照す光とならむ
それ血の完全にして、渇ける脈に吸はるゝことなく、あたかも食卓 卅七
よりはこびさらるゝ食物のごとく殘るもの
人の諸の肢體を營む力をば心臟の中に得、これ此等の物とならんた 四十
め脈を傳ひて出るにいたるものなればなり
いよ〳〵淸くなるに及びて、此血は人のいふを憚かる處にくだり、 四十三
後又そこより自然の器の中なる異なる血の上にそゝぐ
二の血こゝに相合ふ、その一には堪ふる性あり、また一にはその出 四十六
る處全きがゆゑに行ふ性あり
此彼と結びてはたらき、まづ凝固まらせ、後己が材としてその固め 四十九
整へる物に生命を與ふ

活動の力恰も草木の魂の如きものとなりて（但し一は道程にあり一 五十二
は彼岸に達す、異なるところたゞこれのみ）後
なほその作用をとゞめず、この物動きかつ感ずること海の菌の如き 五十五
にいたれば、さらに己を種として諸の力を組立てはじむ
子よ、生む者の心臟卽ち自然が諸の肢體に意を用ゐる處よりいづる 五十八
力は今や既に弘がりて延ぶ
されど汝は未だ生物のいかにして人間となるやを聞かず、こは汝よ 六十一
りさとかりし者の嘗て誤れる一の點なり
そは彼靜智に當つべき何の機官をも見ざるによりて、その敎の中に 六十四
之を魂より離れしめたればなり
汝わが陳ぶる眞にむかひて胸をひらき、而して知るべし、胎兒に於 六十七
ける腦の組織全く成り終るや否や

第一の發動者、自然のかく大なる技(わざ)をめでゝこれにむかひ、力滿ち 七十
たる新しき靈を噓入(ふきい)れたまひ

靈はかしこにはたらきゐたるものを己が實體の中にひきいれ、たゞ 七十三
一の魂となりて、且生き且感じ且自ら己をめぐる

汝この言(ことば)をふかくあやしむなからんため、思ひみよ、太陽の熱葡萄 七十六
の樹より走たゝる汁と相混(あひまじ)りて酒となるを

ラケージの絲盡くる時は、この魂、肉の繋(つなぎ)を離れ、人と神とに屬す 七十九
るものをその實質において携ふ

他(ほか)の能力(ちから)はみな默(もだ)せども、記憶、了知及び意志の作用(はたらき)は却てはるか 八十二
に前よりも强し

かくて止まらずしてあやしくも自ら岸の一に落ち、こゝにはじめて 八十五
己が行くべき路を知る

處一たび定まれば、構成(かたち)の力たゞちにあたりを輝かし、その狀(さま)もそ 八十八
の程(ほど)も、生くる肢體に於けるに同じ

ゑかしてたとへば空氣雨を含むとき、日の光これに映(うつ)るによりて多 九十一
くの色に飾らるゝごとく

あたりの空氣はそこにとゞまれる魂が己の力によりてその上に捺(お)す 九十四
形をうく

かくてあたかも火の動くところ焰これにともなふごとく、新しき形 九十七
靈にともなふ

此物此後之によりてその姿を現すがゆゑに影(オムブラ)と呼ばれ、また之によ 百
りて凡ての官能をとゝのひ、見ることをさへ得るにいたる

我等之によりて物言ひ、之によりて笑ふ、また之によりて我等に淚 百〇三
あり嘆息(なげき)あり（汝これを此山の上に聞けるなるべし）

諸の願またはその他の情の我等に作用を及ぼすにしたがひ、影も亦 百〇六
姿を異にす、是ぞ汝のあやしとする事の原因なる。
我等はこの時はや最後の曲路にいたりて右にむかひ、心を他にとめ 百〇九
ゐたり
こゝにては岸焔の矢を射、縁は風を上におくりて之を追返さしめ、 百十二
そこに一の路を空く
されば我等は開きたる處を傳ひてひとり／＼に行かざるをえざりき、 百十五
我はこなたに火を恐れかなたに下に落るをおそれぬ
わが導者曰ふ。かたく目の手綱を緊めてこゝを過ぎよ、たゞ些の事 百十八
のために足を誤るべければなり。
此時こよなき憐憫の神と猛火の懷にうたふ聲我にきこえてわが心を 百廿一
ばまたかなたにもむかはしむ

かくて我見しに焔の中をゆく多くの靈ありければ、我は彼等を見ま 百廿四
たわが足元をみてたえずわが視力をわかてり
聖歌終れば、彼等は高くわれ夫を知らずとさけび、後低く再び此聖 百廿七
歌をうたひ
これを終ふればまた叫びて、ヂアーナ森にとゞまりて、かのヱーネ 百卅
レの毒を嘗めしエリーチエを逐へりといふ
かくて彼等歌に歸り、後またさけびて、徳と縁の命ずる如く貞操を 百卅三
守れる妻と夫の事を擧ぐ
おもふに火に燒かるゝ間は、彼等たえずかく爲すなるべし、かゝる 百卅六
藥かゝる食物によりてこそ
その傷つひにふさがるなれ 百卅九

第二十六曲

我等かく縁を傳ひ一列となりて歩める間に、善き師しば〳〵いふ。 一
心せよ、わが誡を空しうするなかれ。
はや光をもて西をあまねく蒼より白に變ふる日は、わが右の肩にあ 四
たれり
我は影によりて焔をいよ〳〵赤く見えしめ、また多くの魂のかゝる 七
表徴にのみ心をとめつゝ行くを見たり
彼等のわが事を語るにいたれるも之が爲なりき、かれらまづ、彼は 十
虛しき身のごとくならずといふ
かくていくたりか、燒かれざる處に出でじとたえず心を用ゐつゝ、 十三
その進むをうるかぎりわが方に來れる者ありき

あゝ汝おそき歩履のためならずして恐くは敬のために侶のあとより 十六
行く者よ、渇と火に燃ゆる我に答へよ
汝の答を求むる者我獨に非ず、此等の者皆之に渴く、そのはげしき 十九
に比ぶれば印度人又はエチオピア人の冷き水にかわくも及ばじ
請ふ我等に告げよ、汝未だ死の網の中に入らざるごとく、身を壁と 廿二
して日を遮ぎるはいかにぞや。
その一斯く我にいへり、また若し此時新しき物現はれて心をひくこ 廿五
となかりせば、我は既に我身の上をあかせしなるべし
されど此時顔をこの民にむけ燃ゆる路の正中をあゆみて來る民あり 廿八
ければ、我は彼等をみんとて詞をとゞめぬ
我見るにかなたこなたの魂みないそぎ、たがひに接吻すれども短か 卅一
き會釋をもて足れりとして止まらず

あたかも蟻がその黑める群の中にてたがひに口を觸れしむる（こは 卅四
その路と幸とを探るためなるべし）に似たり

またしみの會釋をはれば、未だ一歩も進まざるまに、いづれも競ふ 卅七
てその聲を高くし

新しき群は、ソツドマ、ゴモルラといひ、殘の群は、牡牛をさそひ 四十
て己の慾を遂げんためパシフヱ牝牛の中に入るといふ

かくてたとへば群鶴の、一部はリフヱの連山にむかひ、また一部は 四十三
砂地にむかひ、此氷を彼日を厭ひて飛ぶごとく

民の一群かなたにゆき、一群こなたに來り、みな泣きつゝ、さきに 四十六
うたへる歌と、彼等にいとふさはしき叫に歸れり

また我に請へるかの魂等は、聽くの願をその姿にあらはしつゝ前の 四十九
如く我に近づきぬ

我斯く再び彼等の望を見ていひけるは。あゝいつか必ず平安を享く 五十二
る魂等よ

熟めるも熟まざるも我身かの世に殘るにあらず、その血その骨節み 五十五
な我とゝもにこゝにあり

我こゝより登りてわが盲を癒さんとす、我等の爲に恩惠を求むる淑 五十八
女天に在り、是故にわれ肉體を伴ひて汝等の世を過ぐ

ねがはくは汝等の大望速かに遂げ、愛の滿ち〳〵且いと廣く弘がる 六十一
天汝等を住はしむるにいたらんことを

請ふ我に告げてこの後紙にまるすをえしめよ、汝等は誰なりや、ま 六十四
た汝等の背の方にゆく群は何ぞや。

粗野なる山人都に上れば、心奪はれ思亂れて、あたりをみつゝ言葉 六十七
なし

かの魂等またみなかくのごとく見えき、されど驚愕（貴き心の中に
てはその鎭まること早し）の重荷おろされしとき
さきに我に問へる者またいひけるは。福なる哉汝生を善くせんとて
此地の經驗を船に載す
我等と共に來らざる民の犯せる罪は、そのかみ勝誇れるチエーザレ
をして王妃といへる罵詈の叫を聞くにいたらしめしものなりき
是故に汝等の聞けるごとく彼等自ら責めてソッドマとさけびて去り、
その恥をもて焔をたすく
我等の罪は異性によれり、されど獸の如く慾に從ひ、人の律法を守
らざりしがゆゑに
我等彼等とわかるゝ時は、かの獸となれる板の內にて獸となれる女
の名を讀み、自ら己をはづかしむ

汝既に我等の行爲と我等の犯せる罪を知る、恐くはさらに我等の名
を知るを望むべけれど告ぐるに時なく又我然するをえざるなるべし
たゞ我身に就ては我汝の願を滿さむ、我はグイード・グイニッエル
リなり、未だ最後とならざる先に悔いしため今既に罪を淨む。
我及び我にまさりて愛のうるはしきけだかき調を奏でしことある人
々の父かく己が名をいふを聞きしとき
我はさながらリクルゴの憂のうちに再び母をみしときの二人の男の
子の如くなりき、されど彼等のごとく激せず
たゞ物を思ひつゝ長く彼を見てあゆみ、聞かず語らず、また火をお
それてかなたに近づくことをせざりき
かくてわが目飽くにおよび、われかたく誓をたてゝ彼のために能く
わが力を盡さんと告ぐれば

彼我に。わが汝より聞ける事の我心にとゞむる痕跡いとあざやかな 百〇六
るをもてレーテも之を消しまたは朦朧ならしむるあたはず
されど今の汝の詞我に眞を誓へるならば、請ふ告げよ、汝の我を愛 百〇九
すること目にも言にもかくあらはるゝは何故ぞや。
我彼に。汝のうるはしき歌ぞそれなる、近世の習つゞくかぎりは、 百十二
その文字常に愛せらるべし。
彼曰ふ。あゝ兄弟よ、わが汝にさし示す者は（前なる一の靈を指 百十五
ざし）我よりもよくその國語を鍛へし者なり
戀の詩散文の物語にては彼衆にぬきんず、レモゼスの人をもて之に 百十八
まさるとなすは愚者なり、彼等をそのいふにまかせよ
彼等は眞よりも評をかへりみ、技と理を問はざるさきにはやくも己 百廿一
が說を立つ

多くの舊人のグイットネに於るも亦斯の如し、さらに多くの人を得 百廿四
て眞の勝つにいたれるまでは彼等たゞ響を傳へて彼のみを讃めぬ
さて汝ゆたかなる恩惠をうけて、僧侶の首に基督を戴くかの僧院に 百廿七
行くことをえば
わが爲に彼に向ひて一遍の主の祈を唱へよ、但し此世界にて我等の 百卅
求むる事にて足る、こゝにては我等また罪を犯すをえざれば。
かくいひて後、後方に近くゐたる者を己に代らしむるためなるべし、 百卅三
恰も水底深く沈みゆく魚の如く火に入りて見えざりき
我は指示されし者の方に少しく進みて、わが願彼の名のためにゆか 百卅六
しき處を備へしことを告ぐれば
彼こゝろよく語りて曰ふ。汝の問のねんごろなるにめでゝ、我は己 百卅九
を汝にかくすこと能はず、またかくすをねがはざるなり

百四十二 我はアルナルドなり、泣きまた歌ひてゆく、われ過去(こしかた)をみてわが痴(おろか)
なりしを悲み、行末(ゆくすゑ)をみてわが望む日の來るを喜ぶ
百四十五 この階(きざはし)の頂まで汝を導く權能(ちから)をさして今我汝に請ふ、時到らばわが
苦患(なやみ)を憶(おも)へ。
百四十八 かくいひ終りて彼等を淨むる火の中にかくれぬ

第二十七曲

一 今や日はその造主(つくりぬし)血を流したまへるところに最初(はじめ)の光をそゝぐ時
（エブロは高き天秤(はかり)の下にあり
ガンジエの浪は亭午(まひる)に燒かる）とその位置を同うし、晝既に去らん
とす、此時喜べる神の使者(つかひ)我等の前に現はれぬ
七 彼焔の外(そと)岸の上に立ちて、心の淸き者は福なりとうたふ、その聲爽(さわや)
かにしてはるかにこの世のものにまされり
十 我等近づけるとき彼曰ひけるは。聖なる魂等よ、まづ火に嚙まれざ
ればこゝよりさきに行くをえず
汝等この中に入りまたかなたにうたふ歌に耳を傾けよ。かくいふを
聞きしとき我はあたかも穴に埋(いけ)らるゝ人の如くになりき

手を組合せつゝ身をその上より前に伸べて火をながむれば、わが嘗 十六
て見し、人の體の燒かるゝありさま、あざやかに心に浮びぬ
善き導者等わが方にむかへり、かくてヸルジリオ我に曰ふ。我子よ、 十九
こゝにては苛責はあらむ死はあらじ
憶へ、憶へ……ジエリオネに乘れる時さへ我汝を安らかに導けるに、 廿二
神にいよ／＼近き今、まかするをえざることあらんや
汝かたく信ずべし、たとひ此焰の腹の中に千年の長き間立つとも汝 廿五
は一筋の髮をも失はじ
若しわが言の僞なるを疑はゞ、焰にちかづき、己が手に己が衣の裾 廿八
をとりてみづからこれを試みよ
いざ棄てよ、一切の恐を棄てよ、かなたにむかひて心安く進みゆく 卅一
べし。かくいへるも我なほ動かずわが良心に從はざりき
わがなほ頑にして動かざるをみて彼少しく心をなやまし、子よ、ベ 卅四
アトリーチエと汝の間にこの壁あるを見よといふ
桑眞紅となりしとき、死に臨めるピラーモがチスベの名を聞き目を 卅七
開きてつら／＼彼を見しごとく
わが思の中にたえず湧き出る名を聞くや、わが固き心やはらぎ、我 四十
は智き導者にむかへり
是に於てか彼首を振りて、我等此方に止まるべきや如何といひ、恰 四十三
も一の果實に負くる稚兒にむかふ人の如くにほゝゑみぬ
かくて彼我よりさきに火の中に入り、また此時にいたるまでながく 四十六
我等の間をわかてるスターチオに請ひて我等の後より來らしむ
我火の中に入りしとき、その燃ゆることかぎりなく劇しければ、煮 四十九
え立つ玻璃の中になりとも身を投入れて冷さんとおもへり

わがやさしき父は我をはげまさんとて、ベアトリーチエの事をのみ　五十二
語りてすゝみ、我既に彼の目を見るごとくおぼゆといふ
かなたにうたへる一の聲我等を導けり、我等はこれにのみ心をとめ　五十五
つゝ登るべきところにいでぬ
我父に惠まるゝ者よ來れ。かしこにありてわが目をまばゆうし我に　五十八
見るをえざらしめたる一の光の中にかくいふ聲す
またいふ。日は入り夕は來る、とゞまるなかれ、西の暗くならざる　六十一
間に足をはやめよ。
路直く岩を穿ちて東の方に上るがゆゑに、すでに低き日の光を我は　六十四
わが前より奪へり
しかしてわが影消ゆるを見て我もわが聖等も我等の後方に日の沈む　六十七
をしりたる時は、我等の試みし段なほ未だ多からざりき

はてしなく濶き天涯未だ擧りて一の色とならず、夜その闇をことご　七十
とく頒ち與へざるまに
我等各一の段を床となしぬ、そはこの山の性、登るの願よりもその　七十三
力を我等より奪へばなり
食物をえざるさきには峰の上に馳せ狂へる山羊も、日のいと熱き間　七十六
蔭にやすみて聲をもいださず
その牧者（彼杖にもたれ、もたれつゝその群を牧ふ）にまもられて
おとなしく倒嚼むことあり
また外に宿る牧人、そのしづかなる群のあたりに夜を過して、野の　八十二
獸のこれを散らすを防ぐことあり
我等みたりもまたみな斯の如くなりき、我は山羊に彼等は牧者に似　八十五
たり、しかして高き岩左右より我等をかこめり

外はたゞ少しく見ゆるのみなりしかど、我はこの少許の處に、常よ　八十八
りも燦かにしてかつ大なる星を見き
我かく倒嚼み、かく星をながめつゝ睡に襲はる、即ち事をそのいま　九十一
だ出來ぬさきに屢告知らす睡なり
たえず愛の火に燃ゆとみゆるチテレアがはじめて其光を東の方より　九十四
此山にそゝぐ頃かとおもはる
我は夢に、若き美しきひとりの淑女の、花を摘みつゝ野を分けゆく　九十七
を見しごとくなりき、かの者うたひていふ
わが名を問ふ者あらば知るべし、我はリーアなり、我わがために一　百
の花圏を編まんとて美しき手を動かして行く
鏡にむかひて自ら喜ぶことをえんため我こゝに我身を飾り、わが妹　百〇三
ラケーレは終日坐してその鏡を離れず

われ手をもて我身を飾るをねがふごとくに彼その美しき目を見るを　百〇六
ねがふ、見ること彼の、行ふこと我の心を足はす。
異郷の旅より歸る人の、わが家にちかく宿るにしたがひ、いよ〳〵　百〇九
愛づる曉の光
はや四方より闇を逐ひ、闇とともにわが睡を逐へり、我即ち身を起　百十二
せば、ふたりの大なる師此時既に起きゐたり
げに多くの枝によりて人のしきりに尋ね求むる甘き果は今日汝の饑　百十五
をしづめむ。
ヸルジリオかく我にいへり、またこれらの語のごとく心に適ふ賜は　百十八
あらじ
わが登るの願願に加はり、我はこの後一足毎に羽生えいでゝ我に飛　百廿一
ばしむるをおぼえき

百廿四 我等階をこと〴〵く渡り終りて最高き段の上に立ちしとき、ギルジ
リオ我にその目をそゝぎて
百廿七 いふ。子よ、汝既に一時の火と永久の火とを見て、わが自から知ら
ざるところに來れるなり
百卅 われ智と術をもて汝をこゝにみちびけり、今より汝は好む所を導者
となすべし、汝嶮しき路を出で狹き路をはなる
百卅三 汝の額を照す日を見よ、地のおのづからこゝに生ずる若草と花と木
とを見よ
百卅六 涙を流して汝の許に我を遣はせし美しき目のよろこびて來るまで、
汝坐するもよし、これらの間を行くもよし
百卅九 わが言をも表示をもこの後望み待つことなかれ、汝の意思は自由に
して直く健全なればそのむかふがまゝに行はざれば誤らむ
百四十二 是故にわれ冠と帽を汝に戴かせ、汝を己が主たらしむ。

第二十八曲

あらたに出し日の光を目にやはらかならしむる茂れる生ける神の林
の内部をも周邊をも探らんとて
我ためらはず岸を去り、しづかに〱野を分けゆけば、地はいたる
ところ佳香を放てり
うるはしき空氣變化なく動きてわが額を撃ち、そのさまさながら軟
かき風の觸るゝに異ならず
諸の枝これに靡きてふるひつゝ、みな聖なる山がその最初の影を投
ぐる方にかゞめり
されどはなはだしく撓むにあらねば、梢の小鳥その一切の技を棄つ
るにいたらず

いたくよろこびて歌ひつゝ、そよふく朝風を葉の間にうけ、葉はエ
オロがシロッコを解き放つとき
キアッシの岸の上なる松の林の枝より枝に集まるごとき音をもてそ
の調にあはせぬ
しづかなる歩履我を運びて年へし林の中深く入らしめ、我既にわが
いづこより入來れるやを見るあたはざりしとき
見よわが行手を遮れる一の流あり、その細波をもて、縁に生え出し
草を左に曲げぬ
日にも月にもかしこを照すをゆるさゞる永劫の蔭に蔽はれ、黒み黒
みて流るれども
一物として隱るゝはなきかの水にくらぶれば、世のいと清き水とい
ふともみな雜ありとみゆべし

わが足とどまり、わが目は咲ける木々の花の類甚だ多きを見んとて　卅四
小川のかなたに進めるに
このときあたかも物不意にあらはれて人を驚かし、他の思をすべて　卅七
棄てしむることあるごとくかしこにあらはれし
ただひとりの淑女あり、歌をうたひて歩みつゝ、その行道をことご　四十
とくいろどれる花また花を摘みゐたり
我彼に曰ふ。あゝ美しき淑女よ、心の證となる習なる姿に信を置く　四十三
をうべくば愛の光にあたゝまる者よ
ねがはくは汝の歌の我に聞ゆるにいたるまで、この流のかたにすゝ
みきたれ
汝は我にプロセルピーナが、その母彼を彼春を失へるとき、いづこ　四十九
にゐしやいかなるさまにありしやを思ひ出でしむ。

たとへば舞をまふ女の、その二の蹠を地にまた互に寄せてすゝみ、　五十二
ほとんど一足を一足の先に置かざるごとく
彼は紅と黄の花を踏みてこなたにすゝみ、そのさま目をしとやかに　五十五
たるゝ處女に異ならず
かくて麗はしき聲その詞とゝもに我に聞ゆるまで近づきてわが願を　五十八
滿たせり
まさしく草がかの美しき流の波に洗はるゝところに來るやいなや、　六十一
彼わがためにその目を擧げぬ
思ふにヹーネレのあやまちて我子に刺されし時といふとも、その眉　六十四
の下に輝ける光かく大ならざりしなるべし
彼は種なきにかの高き邱に生ずる色をなほも己が手をもて摘みつゝ、　六十七
右の岸に微笑みゐたり

流は三歩我等を隔てき、されどセルゼの渡れる（このこと今も人の　七十
すべての誇を誡しむ）エルレスポンドが
セストとアビードの間の荒浪のためにレアンドロよりうけし怨も、　七十三
かの流が、かの時開かざりしために我よりうけし怨にはまさらじ
彼曰ふ。汝等は今初めて來れる者なれば、人たる者の巣に擇ばれし　七十六
この處に我のほゝゑむをみて
驚きかつ異しむならむ、されど汝我を樂ませ給へりといへる聖歌は　七十九
光を與へて汝等の了知の霧を拂ふに足るべし
また汝先に立つ者我に請へる者よ、聞くべきことあらばいへ、我は　八十二
いかなる汝の問にも足はぬ事なく答へんと心構して來れるなれば。
我曰ふ。水と林の響とはあらたに起せるわが信を攻む、そはわが聞　八十五
けるところ今見るところと異なればなり。

是に於てか彼。我は汝のあやしむものにそのいで來る原因あるを陳　八十八
べて汝を蔽ふ霧をきよめむ
それ己のみ己が心に適ふ至上の善は人を善にまた善行の爲に造り、　九十一
この處を之に與へて限なき平和の契約となせり
人己が越度によりてたゞ少時こゝにとゞまり、己が越度によりて正　九十四
しき笑と麗はしき悦を涙と勤勞に變らせぬ
水より地よりたちのぼりてその力の及ぶかぎり熱に從ひゆくもの、　九十七
この下に起す亂が
人と戰ふなからんため、此山かく高く天に聳えき、ゑかしてその鎖　百
さるゝところより上はみなこれを免かる
さて空氣は、若しその廻ることいづこにか妨げられずば、こと〳〵　百三
く第一の回轉とともに圓を成してめぐるがゆゑに

かゝる動、純なる空氣の中にありて全く絆なきこの高嶺を撃ち、林 百〇六
に聲を生ぜしむ、これその繁きによりてなり
また撃たれし草木にはその性を風に滿たすの力あり、この風その後 百〇九
吹きめぐりて之をあたりに散らし
かなたの地は己が特質と天の利にしたがひて孕み、性異なる諸の木 百十二
を生む
かゝればわがこの言を聞く者、たとひ見ゆべき種なきにかしこに萠 百十五
えいづる草木を見るとも、世の不思議とみなすに足らず
汝知るべし、この聖なる廣野には一切の種滿ち、かの世に摘むをえ 百十八
ざる果のあることを
また汝の今見る水は、漲り涸るゝ河のごとくに、冷えて凝れる水氣 百廿一
の補ふ脈より流れいづるにあらず

變らず盡きざる泉よりいづ、而して泉は神の聖旨によりて、その二 百廿四
方の口よりそゝぐものをば再び得
こなたには罪の記憶を奪ふ力をもちてくだりゆき、かなたには諸の 百廿七
善行を憶ひ起さしむ
こなたなるはレーテと呼ばれ、かなたなるをエウノエといふ、この 百卅
二の水まづ味はれざればその功德なし
こは他の凡ての味にまさる、我またさらに汝に敎ふることをせずと 百卅三
も、汝の渴はや全くやみたるならむ、されど
己が好にまかせてなほ一の事を加へむ、思ふにわが言たとひ約束の 百卅六
外にいづとも汝の喜に變はあらじ
いにしへ黃金の代とその幸多きさまを詩となせる人々、恐らくはパ 百卅九
ルナーゾにて夢にこの處を見しならむ

こゝに罪なくして人住みぬ、こゝにとこしへの春とすべての實あり、
彼等の所謂ネッタレは是なり。
我は此時身を後方にめぐらしてわがふたりの詩人にむかひ、彼等が
笑を含みつゝこの終の言をきけるを見
後ふたゝび目をかの美しき淑女にむけたり

第二十九曲

彼かたりをはれるとき、戀する女のごとく歌ひて、罪をおほはるゝ
ものは福なりといひ
かくてたとへばひとりは日を見ひとりは之を避けんとて林の蔭をあ
ゆみゆきしさびしきニンファの群のごとくに
岸をつたひ流にさかのぼりて進み、また我はわが歩を細にしてその
こまかなる歩にあはせ、これと相並びて行けり
ふたりの足數合せて百とならざるさきに、岸兩つながら等しくその
方向を變へたれば、我は再び東にむかへり
またかくしてゆくことなほ未だ遠からざりしに、淑女全くわが方に
むかひて、わが兄弟よ、視よ、耳を傾けよといふ

このとき忽ち一の光かの大なる林の四方に流れ、我をして電光(いなづま)なる 十六
かと疑はしめき
されど電光はその現はるゝごとく消ゆれど、この光は長くつゞきて 十九
いよ〳〵輝きわたりたれば、我わが心の中に是何物ぞやといふ
また一のうるはしき聲あかるき空をわけて流れぬ、是に於てか我は 廿二
正しき憤よりエーヴの膽の大(ふと)きを責めたり
彼は造られていまだ程なきたゞひとりの女なるに、天地神(あめつち)に遵(したが)へる 廿五
ころ、被物(おほひ)の下に、ゑのびてとゞまることをせざりき
彼その下に信心深くとゞまりたりせば、我は早くまた永くこのいひ 廿八
がたき樂を味へるなるべし
かぎりなき樂(たのしみ)の初穂かく豐かなるに心奪はれ、たゞいよ〳〵大なる 卅一
喜をうるをねがひつゝ、我その間を歩みゐたるに

我等の前にて綠の枝の下なる空氣燃ゆる火のごとくかゞやき、かの 卅四
うるはしき音(おと)今は歌となりて聞えぬ
あゝげに聖なる處女(をとめ)等よ、我汝等のために饑(うゑ)、寒(さむさ)、または眠(ねむり)をゑの 卅七
びしことあらば、今その報(むくい)を請はざるをえず
いざエリコナよわがためにそゝげ、ウラーニアよ、歌の侶とともに 四十
我をたすけて、おもふだに難き事をば詩となさしめよ
さてその少しく先にあたりてあらはれし物あり、我等と是とはなほ 四十三
離るゝこと遠かりければ、誤りて七の黃金(こがね)の木と見えぬ
されど相似て官能を欺く物その特性の一をも距離(へだゝり)のために失はざる 四十六
まで我これに近づけるとき
理性に物を判(わか)たしむる力は、これの燭臺なるとうたへる歌のオザン 四十九
ナなるをさとりたり

この美しき一組の燭臺、上より焔を放ちてその燦かなること澄みわ 五十二
たれる夜半の空の望月よりもはるかにまされり
我はいたくおどろきて身をめぐらし、善きギルジリオにむかへるに、 五十五
我に劣らざる怪訝を顔にあらはせる外答なかりき
我即ちふたゝび目をかのたふとき物にむくれば、新婦にさへ負くる 五十八
ならんとおもはるゝほどいとゆるやかにこなたにすゝめり
淑女我を責めていふ。汝いかなればかくたゞ生くる光のさまに心を 六十一
燃やし、その後方より來るものを見ざるや。
このとき我見しに、白き衣を着（かくばかり白き色世にありし例な 六十四
し）、己が導者に從ふごとく後方より來る民ありき
水はわが左にかゞやき、我之を視れば、あたかも鏡のごとくわが身 六十七
の左の方を映せり

われ岸のこなた、たゞ流のみ我をへだつるところにいたれるとき、 七十
なほよくみんと、わが歩をとゞめて
視しに、焔はそのうしろに彩色れる空氣を殘してさきだちすゝみ、 七十三
さながら流るゝ小旗のごとく
空氣は七の線にわかたれ、これに日の弓、デリアの帶のすべての色 七十六
あり
これらの旌後の方に長く流れてわが目及ばず、またわがはかるとこ 七十九
ろによれば左右の端にあるものゝ相離るゝこと十歩なりき
かく美しき空におほはれ、廿四人の長老、百合の花の冠をつけてふ 八十二
たりづゝならび來れり
みなうたひていふ。アダモの女子のうちにて汝は福なる者なり、ね 八十五
がはくは汝の美にとこしへの福あれ。

かの選ばれし民、わが對面なるかなたの岸の花と新しき草をはなれ 八十八
しとき

あたかも天にて光光に從ふごとく、そのうしろより四の生物各頭に 九十一
綠の葉をいたゞきて來れり

皆六の翼をもち、目その羽に滿つ、アルゴの目若し生命あらばかく 九十四
のごとくなるべし

讀者よ、彼等の形を錄さんとて我またさらに韻語を散らさじ、そは 九十七
他の費に支へられて此費を惜まざること能はざればなり

エゼキエレを讀め、彼は彼等が風、雲、火とともに寒き處より來る 百
を見てこれを描けり

わがこゝにみし彼等の狀もまたかれの書にいづるものに似たり、但 百〇三
し羽についてはジョヴンニ彼と異りて我と同じ

これらの四の生物の間を二の輪ある一の凱旋車占む、一頭のグリフ 百〇六
オネその頸にてこれを曳けり

この者二の翼を、中央の一と左右の三の線の間に伸べたれば、その 百〇九
一をも斷たず損はず

翼は尖の見えざるばかり高く上れり、その身の中の鳥なるところは 百十二
すべて黃金にて他はみな紅まじれる白なりき

アフリカーノもアウグストもかく美しき車をもて羅馬を喜ばせしこ 百十五
となきはいふに及ばず、日の車さへ之に比ぶれば映なからむ

（即ち路をあやまれるため、信心深きテルラの祈によりてジオヴェの 百十八
奇しき罰をうけ、燒盡されし日の車なり）

右の輪のほとりには、舞ひめぐりつゝ進み來れるみたりの淑女あり、 百廿一
そのひとりは、火の中にては見分け難しと思はるゝばかりに赤く

百廿四 次なるは、肉も骨も緑の玉にて造られしごとく、第三なるは、新たに降れる雪に似たり

廿七 或時は白或時は赤他のふたりをみちびくと見ゆ、しかしてその歌にあはせて、侶のゆくこと或はおそく或ははやし

百卅 左の輪のほとりには、紫の衣を着てたのしく踊れるよたりの淑女あり、そのひとり頭に三の目ある者ほかのみたりをみちびきぬ

百卅三 かく擧げ來れる凡ての群の後に、我はふたりの翁を見たり、その衣は異なれどもおごそかにしておちつきたる姿は同じ

百卅六 ひとりは己がかのいと大なるイッポクラテ（即自然がその最愛の生物のために造れる）の流を汲むものなるをあらはし

百卅九 またひとりは、川のこなたなる我にさへ恐をいだかしめしほど光りて鋭き一の劍を持ちて、これと反する思をあらはせり

百四十二 我は次に外見の劣れるよたりの者と、凡ての者の後よりたゞひとりにて眠りて來れる氣色鋭き翁を見たり

百四十五 この七者は衣第一の組と同じ、されど頭を卷ける花圈百合にあらずして

百四十八 薔薇とその他の紅の花なりき、少しく離れしところにてもすべての者の眉の上にまさしく火ありと見えしなるべし

百五十一 輦わが對面にいたれるとき雷きこえぬ、是に於てかかのたふとき民はまた進むをえざるごとく

百五十四 最初の旌とともにかしこにとゞまれり

第三十曲

第一天の七星（出沒を知らず、罪よりほかの雲にかくれしこともな
し　一
ましてかしこにをる者に各その任務をしらしめしこと恰も低き七
星の、港をさして舵取るものに於けるに似たりき）　四
とゞまれるとき、是とグリフォネの間に立ちて先に進める眞の民、
己が平和にむかふごとく、身をめぐらして車にむかへば　七
そのひとりは、天より遣はされしもの丶如く、新婦よリバーノより
來れと三度うたひてよばゝり、ほかの者みなこれに倣へり　十
最後の喇叭の響とともに、すべて惠まるゝ者、再び衣を着たる聲をも
てアレルイアをうたひつゝその墓より起出るごとく　十三
かの大なる翁の聲をきゝて神の車の上にたちあがれる永遠の生命の
僕と使者百ありき　十六
みないふ。來る者よ汝は福なり。また花を上とあたりに散らしつゝ。
百合を手に滿たして撒け。　十九
我かつて見ぬ、晝の始、東の方こと〴〵く赤く、殘の空すみてうる
はしきに　廿二
日の面暈りて出で、目のながく之に堪ふるをうるばかり光水氣に和
らげらるゝを　廿五
かくのごとく、天使の手より立昇りてふたゝび內外に降れる花の雲
の中に　廿八
白き面帕の上には橄欖を卷き、綠の表衣の下には燃ゆる焰の色の衣
を着たるひとりの淑女あらはれぬ　卅一

わが霊は（はやかく久しく彼の前にて驚異のために震ひつゝ挫かる 卅四
ることなかりしに）
目の能く之に教ふるをまたず、たゞ彼よりいづる奇しき力によりて、 卅七
昔の愛がその大なる作用を起すを覺えき
わが童の時過ぎざるさきに我を刺し貫ぬけるたふとき力わが目を射 四十
るや
我はあたかも物に恐れまたは苦めらるゝとき、走りてその母にすが 四十三
る稚兒の如き心をもて、たゞちに左にむかひ
一滴だに震ひ動かずして我身に殘る血はあらじ、昔の焔の名殘をば 四十六
我今知るとギルジリオにいはんとせしに
ギルジリオ、いとなつかしき父のギルジリオ、わが救のために我身 四十九
を委ねしギルジリオははや我等を棄去れり

昔の母の失へるすべてのものも、露に淨められし頰をして、涙にふ 五十二
たゝび汚れしめざるあたはざりき
ダンテよ、ギルジリオ去れりとて今泣くなかれ今泣くなかれ、それ 五十五
よりほかの劍に刺されて汝泣かざるをえざればなり。
己が名（我已むをえずしてこゝに記せり）の呼ばるゝを聞きてわれ 五十八
身をめぐらせしとき、我はさきに天使の撒華におほはれて
我にあらはれしかの淑女が、さながら水軍の大將の、艫に立ち艫に
立ちつゝあまたの船に役はるゝ人々を見てこれをはげまし
よくその業をなさしむるごとく、車の左の縁にゐて、流のこなたな
る我に目をそゝぐを見たり
ミネルヴの木葉に卷かれし面帕その首より垂るゝがゆゑに、我さだ 六十七
かに彼を見るをえざりしかど

凛々しく、氣色なほもおごそかに、あたかも語りつゝいと熱き言を　七十
ばきばし控ふる人の如く、彼續いていひけるは
よく我を視よ、げに我は我はげにベアトリーチエなり、汝如何して　七十三
此山に近づくことをえしや汝は人が福をこゝに受るを知らざりしや。
わが目は澄める泉に垂れぬ、されどそこに己が姿のうつれるをみて　七十六
我之を草に移しぬ、耻いと重く額を壓せしによりてなり
母たる者の子に嚴しとみゆる如く彼我にいかめしとみゆ、きびしき　七十九
憐憫の味は苦味を帶ぶるものなればなり
彼は默せり、また天使等は忽ちうたひて、主よわが望は汝にありと　八十二
いへり、されどわが足をの先をいはざりき
スキアヴーニアの風に吹寄せられて伊太利の背なる生くる梁木の間　八十五
にかたまれる雪も

陰を失ふ國氣を吐くときは、火にあへる蠟かとばかり、溶け滴りて　八十八
己の内に入るごとく
つねにとこしへの球の調にあはせてきらぶる天使等いまだうたはざ　九十一
りしさきには、我に涙も嘆息もあらざりしかど
かのうるはしき歌をきゝて、彼等の我を憐むことを、淑女よ何ぞか　九十四
く彼を叱責むやと彼等のいふをきかんよりもなほ明かに知りし時
わが心のまはりに張れる氷は、息と水に變りて胸をいて、苦みて口　九十七
と目を過ぎぬ
彼なほ輦の左の緣に立ちてうごかず、やがてかの慈悲深き群にむか　百
ひていひけるは
汝等とこしへの光の中に目を醒しをるをもて、夜も睡も、世がその　百〇三
道に踏みいだす一足をだに汝等にかくさじ

是故にわが答の求むるところは、むしろかしこに泣く者をしてわが 百〇六
言をさとらせ、罪と憂の量を等しからしむるにあり
すべて生るゝ者をみちびきその侶なる星にしたがひて一の目的にむ 百〇九
かはしむる諸天のはたらきによるのみならず
また神の恩恵（その雨のもとなる水氣はいと高くして我等の目近づ 百十二
くあたはず）のゆたかなるによりて
彼は生命の新たなるころ實の力すぐれたれば、そのすべての良き傾 百十五
向は、げにめざましき證となるをえたりしものを
種を擇ばず耕やさゞる地は、土の力のいよ／\さかんなるに從ひ、 百十八
いよ／\惡くいよ／\荒る
しばらくは我わが顔をもて彼を支へき、わが若き目を彼に見せつゝ 百廿一
彼をみちびいて正しき方にむかはせき

我わが第二の齡の閾にいたりて生を變ふるにおよび、彼たゞちに我 百廿四
をはなれ、身を他人にゆだねぬ
われ肉より靈に登りて美も德も我に增し加はれるとき、彼却て我を 百廿七
愛せず、かへつて我をよろこばず
いかなる約束をもはたすことなき空しき幸の象を追ひつゝその步を 百卅
眞ならざる路にむけたり
我また乞ひて默示をえ、夢幻の中にこれをもて彼を呼戻さんとせ 百卅三
しも益なかりき、彼之に心をとめざりければなり
彼いと深く墜ち、今はかの滅亡の民を彼に示すことを措きてはその 百卅六
救の手段みな盡きぬ
是故にわれ死者の門を訪ひ、彼をこゝに導ける者にむかひて、泣き 百卅九
つゝわが乞ふところを陳べぬ

若し夫れ涙をそゝぐ悔の負債を償はざるものレーテを渡りまたその 百四十二
水を味ふをうべくば
神のたふとき定は破れむ。

第三十一曲

あゝ汝聖なる流のかなたに立つ者よ、いへ、この事眞なりや否や、 四
いへ、かくきびしきわが責に汝の懺悔のともなはでやは
彼は刃さへ利しとみえしその言の鋒を我にむけつゝ、たゞちに續
いてまた斯くいひぬ
わが能力の作用いたく亂れしがゆゑに、聲は動けどその官を離れて 七
外にいでざるさきに消えたり
彼しばらく待ちて後いふ。何を思ふや、我に答へよ、汝の心の中の 十
悲しき記憶を水いまだ損はざれば。
惑と怖あひまじりて、目を借らざれば聞分けがたき一のシをわが口 十三
より逐へり

たとへば弩を放つとき、之を彎くことつよきに過ぐれば、弦切れ弓
折れて、矢の的に中る力の減るごとく
とめどなき涙大息とゝもにわれかの重荷の下にひしがれ、聲はいま
だ路にあるまに衰へぬ
是に於てか彼我に。われらの望の終極なるかの幸を愛せんため汝を
導きしわが願の中に
いかなる堀またはいかなる鏈を見て、汝はさきにすゝむの望をかく
失ふにいたれるや
また他の幸の額にいかなる慰または益のあらはれて汝その前をはな
れがたきにいたれるや。
一のくるしき大息の後、我にほとんど答ふる聲なく、唇からうじて
これをつくれり

我泣て曰ふ。汝の顔のかくるゝや、眼前に在る物その僞の快樂をも
てわが歩履を曲げしなり。
彼。汝たとひ默しまたは今の汝の懺悔をいなみきとすとも汝の愆何
ぞかくれ易からん、かのごとき士師知りたまふ
されど罪を責むる言犯せる者の口よりいづれば、我等の法廷にて、
輪はさかさまに刃にむかひてめぐる
しかはあれ汝今己が過を恥ぢ、この後シレーネの聲を聞くとも心を
固うするをえんため
涙の種を棄てゝ耳をかたむけ、葬られたるわが肉の汝を異なる方に
むかしむべかりし次第を聞くべし
さきに我を包みいま地にちらばる美しき身のごとく汝を喜ばせしも
のは、自然も技も嘗て汝にあらはせることあらざりき

わが死によりてこのこよなき喜汝に缺けしならんには、そも／＼世　五十二
のいかなる物ぞその後汝の心を牽きて之を求むるにいたらしめしは
げに汝は假初の物の第一の矢のため、はやかゝる物ならざりし我に　五十五
從ひて立昇るべく
稚き女そのほか空しきはかなきものゝ矢を待ちて翼をひくゝ地に低　五十八
るべきにあらざりき
それ二の矢三の矢を待つは若き小鳥の事ぞかし、羽あるものゝ目の　六十一
まへにて網を張り弓を彎くは徒爾なり。
我はあたかもはぢて言なく、目を地にそゝぎ耳を傾けて立ち、己が　六十四
過をさとりて悔ゆる童のごとく
立ちゐたり、彼曰ふ。汝聞きて憂ふるか、鬚を上げよ、さらば見て　六十七
いよ／＼憂へむ。

たくましき樫の木の、本土の風またはヤルバの國より吹く風に拔き　七十
倒さるゝ時といふとも、そのこれにさからふこと
わが彼の命をきゝて頤をあげしときに及ばじ、彼顔といはずして鬚　七十三
といへるとき、我よくその詞の毒を認めぬ
我わが顔をあげしとき、わが目は、かのはじめて造られし者等が、　七十六
ふりかくることをやめしをさとり
また（わが目なほ定かならざりしかど）ベアトリーチェが、身たゞ　七十九
一にて性二ある獸のかたにむかふを見たり
面帕におほはれ、流のかなたにありてさへ、彼はその未だ世にあり　八十二
し頃世の女等に優れるよりもさらに己が昔の姿にまされりとみゆ
悔の刺草いたく我を刺しゝかば、すべてのものゝ中にて最も深く我　八十五
を迷はしわが愛を惹けるもののわが最も忌嫌ふものとはなりぬ

我かく己が非をさとる心の痛に堪へかねて倒れき、此時我のいかな 八十八
るさまにてありしやは我をこゝにいたらしめし者ぞ知るなる
かくて我心その能力を外部に還せし時、我は先に唯獨にて我に現れ 九十一
し淑女をば我上の方に見たり、彼曰ふ。我を捉へよ我をとらへよ。
彼は流の中に旣に我を喉まで引入れ、今己が後より我を曳きつゝ、 九十四
杼のごとく輕く水の上を歩めるなりき
われ福の岸に近づけるとき、汝我に注ぎ給へといふ聲聞えぬ、その 九十七
麗しさ類なければ思出ることだに能はず何ぞ記すをうべけんや
かの美しき淑女腕をひらきてわが首を抱き、なほも我を沈めて水を 百
飲まざるをえざらしめ
その後我をひきいだして、よたりの美しき者の踊れるなかに、かく 百〇三
洗はれし我身をおき、彼等は各その腕をもて我を蔽へり

こゝには我等ニンフアなり、天には我等星ぞかし、ベアトリーチエ 百〇六
のまだ世に降らざるさきに、我等は定まりきその侍女と
我等汝を導いて彼の目の邊に到らむ、されどその中なる悅の光を見 百〇九
んため、物を見ること尙深き彼處の三者汝の目をば強くせむ。
かくうたひて後、彼等は我をグリフオネの胸のほとり、ベアトリー 百十二
チエの我等にむかひて立ちゐたるところに連行き
いひけるは。汝見ることを惜むなかれ、我等は汝を綠の珠の前にお 百十五
けり、愛かつて汝を射んとて其矢をこれより拔きたるなりき。
火よりも熱き千々の願わが目をしてかのたえずグリフオネの上にと 百十八
まれる光ある目にそゝがしむれば
二樣の獸は忽彼忽此の姿態をうつしてその中にかゞやき、そのさま 百廿一
日輪の鏡に於けるに異なるなかりき

讀者よ、物みづから動かざるにその映れる象變るを視しとき我のあ 百廿四
やしまざりしや否やを思へ
いたくおどろき且また喜びてわが魂この食物（飽くに從ていよ〳〵 百廿七
慾を起さしむ）を味へる間に
かのみたりの女、姿に際のさらにすぐれて貴きをあらはし、その天 百卅
使の如き舞の調につれてをどりつゝ進みいでたり
むけよベアトリーチエ、汝に忠實なるものに汝の聖なる目をむけよ、 百卅三
彼は汝にあはんとてかく多くの歩履をはこべり
ねがはくは我等のために汝の口を彼にあらはし、彼をして汝のかく
す第二の美を辨へしめよ。是彼等の歌なりき
あゝ生くるとこしへの光の輝よ、パルナーゾの蔭に色あをざめまた 百卅九
はその泉の水をいかに飲みたる者といふとも
汝が潤き空氣の中に汝の面帕を脱ぎて天のその調をあはせつゝ汝の 百四十二
上を覆ふ處に現はれし時の姿をば寫し出さんとするにあたり
豈その心を亂さゞらんや

第三十二曲

十年の渴をしづめんため、心をこめてわが目をとむれば、他の官能 一
はすべて眠れり
またこの目には左右に等閑の壁ありき、聖なる微笑昔の網をもてか 四
くこれを己の許に引きたればなり
このときかの女神等、汝あまりに凝視るよといひてしひてわが目を 七
左の方にむかはしむ
日の光に射られし目にてたゞちに物を見る時のごとく、我やゝ久し 十
くみることあたはざりしかど
視力舊に復りて小さき輝に堪ふるに及び（わがこれを小さしといへ 十三
るはしひて我目を離すにいたれる大なる輝に比ぶればなり）

我は榮光の戰士等が身をめぐらして右にむかひ、日と七の焰の光を 十六
顏にうけつゝ歸るを見たり
たとへば一の隊伍の、己を護らんとて盾にかくれ、その擧りて方向 十九
を變ふるをえざるまに、旗を持ちつゝめぐるがごとく
かの先に進める天の王國の軍人等は、車がいまだその轅を枉げざる 廿二
まに、皆我等の前を過ぐ
是に於てか淑女等は輪のほとりに歸り、グリフオネはその羽の一を 廿五
も搖がさずしてたふとき荷をうごかし
我をひきて水を涉れる美しき淑女とスターチオと我とは、轍に殘せ 廿八
し弓の形の小さき方なる輪に從ひ
かくしてかの高き林、蛇を信ぜし女の罪に空しくなりたる地をわけ 卅一
ゆけば、天使のうたふ一の歌我等の步履を齊へり

彎き放たれし矢の飛ぶことと三度にして屆くとみゆるところまで我等 卅四
進めるとき、ベアトリーチエはおりたちぬ
衆皆聲をひそめてアダモといひ、やがて枝に花も葉もなき一本の木 卅七
のまはりを卷けり
その髪は森の中なる印度人をも驚かすばかりに高く、かつ高きに從 四十
ひていよ／＼伸び弘がれり
福なるかなグリフォネよ、この木口に甘しといへどもいたく腹をな 四十三
やますがゆゑに汝これを啄まず。
たくましき木のまはりにて衆かくよばゝれば、かの二樣の獸は、す 四十六
べての義の種かくのごとくにして保たるといひ
曳き來れる轅にむかひつゝこれを裸なる幹の下にひきよせ、その小 四十九
枝をもてこれにつなげり

大なる光天上の魚の後にかゞやく光にまじりて降るとき、我世の草 五十二
木
膨れいで、日がその駿馬を他の星の下に裝はざるまに、各その色を 五十五
もて姿を新たにするごとく
さきに枝のさびれし此木、薔薇より淡く菫より濃き色をいだして新 五十八
たになりぬ
このときかの民うたへるも我その歌の意を解せず――世にうたはる 六十一
ることあらじ――またよく終まで聞くをえざりき
我若しかの非情の目、その守きびしきために高き價を拂へる目が、 六十四
シリンガの事を聞きつゝ眠れる狀を寫すをうべくば
我自らの眠れるさまを、恰も樣式を見てゑがく畫家の如くに錄さんも
のを、巧に睡を現はす者にあらざれば此事架み難きがゆゑに

わがめさめし時にたゞちにうつりて語るらく、とある光の煌と起き
よ汝何を爲すやとよばゝる聲とはわが睡の幕を裂きたり
林檎（諸の天使をしてその果をあきりに求めしめ無窮の婚筵を天に
いとなむ）の小さき花を見んため
ピエートロとジョヴンニとヤーコボと導かれて氣を失ひ、さらに大
なる睡を破れる言葉をきゝて我にかへりて
その侶の減りたる——モイゼもエリアもあらざれば——とその師の
衣の變りたるとをみしごとく
我もまた我にかへりてかの慈悲深き淑女、さきに流に沿ひてわが歩
履をみちびけるものゝわがほとりに立てるを見
いたくあやしみていひけるは。ベアトリーチエはいづこにありや。
彼。新らしき木葉の下にてその根の上に座するを見よ

彼をかこめる組をみよ、他はみないよ／＼うるはしき奥深き歌をう
たひつゝグリフォネの後より昇る。
我は彼のなほかたれるや否やをあらず、そはわが心を塞ぎてほかに
むかはしめざりし女旣にわが目に入りたればなり
彼はかの二様の獸の繫げる輦をまもらんとてかしこに殘るものゝご
とくひとり眞の地の上に坐し
七のニンフエは北風も南風も消すあたはざる光を手にし、彼のまは
りに身をもてまろき圍をつくれり
汝はこゝに少時林の人となり、その後かぎりなく我と倶にかの羅馬
即基督を羅馬人の中にかぞふる都の民のひとりとなるべし
さればもとれる世を益せんため、目を今輦にとめよ、あかして汝の
見ることをかなたに歸るにおよびて記せ。

ベアトリーチェ斯く、また我はつゝしみてその命に従はんとのみ思 百〇六
ひゐたれば、心をも目をもその求むるところにむけたり
いと遠きところより雨の落つるとき、濃き雲の中より火の降るはや 百〇九
しといへども
わが見しジオヹの鳥に及ばじ、この鳥木をわけ舞ひくだりて花と新 百十二
しき葉と皮とをくだき
またその力を極めて輦を打てば、輦はゆらぎてさながら嵐の中なる 百十五
船の、浪にゆすられ、忽右舷忽左舷に傾くに似たりき
我また見しにすべての良き食物に饑うとみゆる一匹の牝狐かの凱旋 百十八
車の車内にかけいりぬ
されどわが淑女はその穢はしき罪を責めてこれを逐ひ、肉なき骨の 百廿一
これに許すかぎりわしらしむ

我また見しにかの鷲はじめのごとく舞下りて車の匣の内に入り己が 百廿四
羽をかしこに散して飛去りぬ
この時なやめる心よりいづるごとき聲天よりいでゝいひけるは。あ 百廿七
あわが小舟よ、汝の積める荷はいかにあしきかな。
次にはわれ輪と輪の間の地ひらくがごときをおぼえ、またその中よ 百卅
り一の龍のいで來るをみたり、この者尾をあげて輦を刺し
やがて螫を收むる蜂のごとくその魔性の尾を引縮め車底の一部を引 百卅三
出して紆曲りつゝ去りゆけり
殘れる物は肥えたる土の草におけるがごとく羽（おそらくは健全に 百卅六
して厚き志よりさゝげられたる）に
おほはれ、左右の輪及び轅もまたたゞちに——その早きこと一の歎 百卅九
息の口を開く間にまされり——これにおほはる

さてかく變りて後この聖なる建物その處々より頭を出せり、即ち轅
よりは三、稜よりはみな一を出せり

前の三には牡牛のごとき角あれども後の四には額に一の角あるのみ、
げにかく奇しき物かつてあらはれし例なし

その上には高山の上の城のごとく安らかに坐し、しきりにあたりを
みまはしゐたるひとりのしまりなき遊女ありき

我また見しにあたかもかの女の奪ひ去らるゝを防ぐがごとく、ひと
りの巨人その傍に立ちてしば／＼これと接吻したり

されど女がその定まらずみだりなる目を我にむくるや、かの心猛き
馴染頭より足にいたるまでこれを策ち

かくて嫉と怒にたへかね、異形の物を釋き放ちて林の奥に曳入れ
ば、たゞ此林楯となりて

遊女も奇しき獸も見えざりき

第三十三曲

神よ異邦人は來れり、淑女等涙を流しつゝ、忽ちみたり忽ちよたり、一
かはる〴〵詞を次ぎてうるはしき歌をうたひいづれば
ベアトリーチェは憐み嘆きて、さながら十字架のほとりのマリアの四
ごとく變りつゝ、彼等に耳をかたむけぬ
されどかの處女等彼にそのものいふ機を與へしとき、色あたかも火七
のごとく、たちあがりて
わが愛する姉妹等よ、少時せば汝等我を見ず、またしばらくせば我十
を見るべしと答へ
後七者をこと〴〵くその前におき、我と淑女と殘れる聖とをたゞ表十三
示によりてその後におくれり

彼かくして進み、その第十歩の足いまだ地につかじとおもはるゝこ十六
ろ、己が目をもてわが目を射
容を和らげて我に曰ふ。とく來れ、さらば我汝とかたるに、汝我に十九
近くしてよくわが言を聽くをえむ。
我その命にしたがひて彼の許にいたれるとき、彼たゞちにいふ。兄廿二
弟よ、汝今我と俱にゆきて何ぞ敢て我に問はざるや。
たとへば長者のまへに、敬ひはゞかりてものいふ人の、その聲を齊廿五
ふるをえざるごとく
我もまた言葉を亂していひけるは。わが淑女よ、汝はわが求むるも廿八
のとこれに適はしきものとを知る。
彼我に。汝今より後怖と恥の縺をはなれよ、さらば再び夢見る人の卅一
ごとくものいふなからむ

知るべし蛇の破れる器はさきにありしもいまあらず、されど罪ある　卅四
者をして、神の復讐がスッペを恐れざるを信ぜしめよ
羽を輦に殘して之を異形の物とならしめその後獲物とならしめし鷲　卅七
は常に世繼なきことあらじ
そは一切の妨碍障礙を離れし星の、一の時を來らせんとてはや近づ　四十
くを我あきらかに見ればなり（此故に我これを告ぐ）
この時來らば神より遣はされし一の五百と十と五とは、かの盜人を　四十三
ばこれと共に罪を犯す巨人とゝもに殺すべし
おそらくはわが告ぐることテミーデ、スヒンゼの如くおぼろにて、　四十六
その智を暗ます狀また彼等と等しければ汝さとるをえじ
されど此事速かに起りてナイアーデとなり、羊、穀物の損害なくし　四十九
てこのむづかしき謎を解かむ

心にとめよ、おかして死までの一走なる生をうけて生くる者等にこ　五十二
れらの語をわがいへるごとく傳へよ
またこれを錄すとき、こゝにて既に二度までも掠められたる樹につ　五十五
いてすべて汝の見しことを隱すべからざるを忘るゝなかれ
凡そ之を掠め又は之を折る者は行爲の誹讟をもて神に逆らふ、そは　五十八
神はたゞ己のためにとて之を聖なる者に造りたまひたればなり
これを嚙めるがゆゑに第一の魂は、嚙める罪の罰を自ら受けしもの　六十一
を待ちつゝ、苦と願の中に五千年餘の時を經たりき
若しことさらなる理によりて此樹かく秀でその頂かくうらがへるを　六十四
思はずば汝の才は眠れるなり
また若し諸の空しき想汝の心の周邊にてエルザの水とならず、この　六十七
想より起る樂楽を染めしピラーモとならざりせば

たゞかく多くの事柄によりて、汝は此樹の禁制のうちに神の正義の 七十
眞の意義を認めしものを
我見るに汝の智石に變り、石となりてかつ黑きがゆゑに、わが言の 七十三
光汝の目をしてまばゆからしむ、されどわがなほ汝に望むところは
汝がこの言を心に畫きて（たとひ書さゞるも）こゝより携へ歸るに
あり、かくするは巡禮が棕櫚にて卷ける杖を持つと其理相同じ。
我。あたかも印の形をとゞめてこれを變へざる蠟のごとく、わが腦 七十九
は今汝の捺せし象をうく
されどなつかしき汝の言の高く飛びてわが目およばず、いよ〳〵み 八十二
んとつとむればいよ〳〵みえざるは何故ぞや。
彼曰ふ。こは汝が汝の學べるところのものをかへりみて、その敎の 八十五
わが語にともなふをうるや否やを見

しかして汝等の道の神の道に遠ざかることかのいと高き疾き天の地 八十八
を離るゝごとくなるをさとるをえんためぞかし。
是に於てか我答て彼に曰ふ。我は一度も汝を離れしことあるを覺え 九十一
ず、良心我を責めざるなり。
彼笑みつゝ答へて曰ふ。汝覺ゆるあたはずば、いざ思ひいでよ今日 九十四
この日汝がレーテの水を飮めるを
夫れ烟をみて火あるを知る、かく忘るゝといふことは他に移りし汝 九十七
の思に罪あることをさだかに證す
げにこの後はわが詞いとあらはになりて、汝の粗き目にもみゆるに 百
ふさはしかるべし。
光いよ〳〵はげしくして歩いよ〳〵遲き日は、見る處の異なるにつ 百〇三
れてこゝかしこにあらはるゝ亭午の圈を占めゐたり

此時あたかも導者となりて群よりさきにゆく人が、みなれぬものを 百〇六
その路に見てとゞまるごとく
七人の淑女は、とある仄闇き蔭（緑の葉黒き枝の下なる冷やかなる 百〇九
流の上にアルペの投ぐる陰に似たる）果る處にとゞまれり
我は彼等の前にエウフラーテとチーグリと一の泉より出で、わかれ 百十二
てゆくの、おそきこと友のごときを見しとおぼえぬ
あゝ光よ、すべて人たる者の尊榮よ、かく一の源よりあふれいでゝ 百十五
わかれ流るゝ水は何ぞや。
わがこの問に答へて曰ふ。マテルダに請ひ彼をしてこれを汝に告げ 百十八
しめよ。此時かの美しき淑女、罪を辯解く人のごとく
答ふらく。さきに我この事をもほかの事をも彼に告げたり、またレ
ーテの水いかでかこれを忘れしめんや。

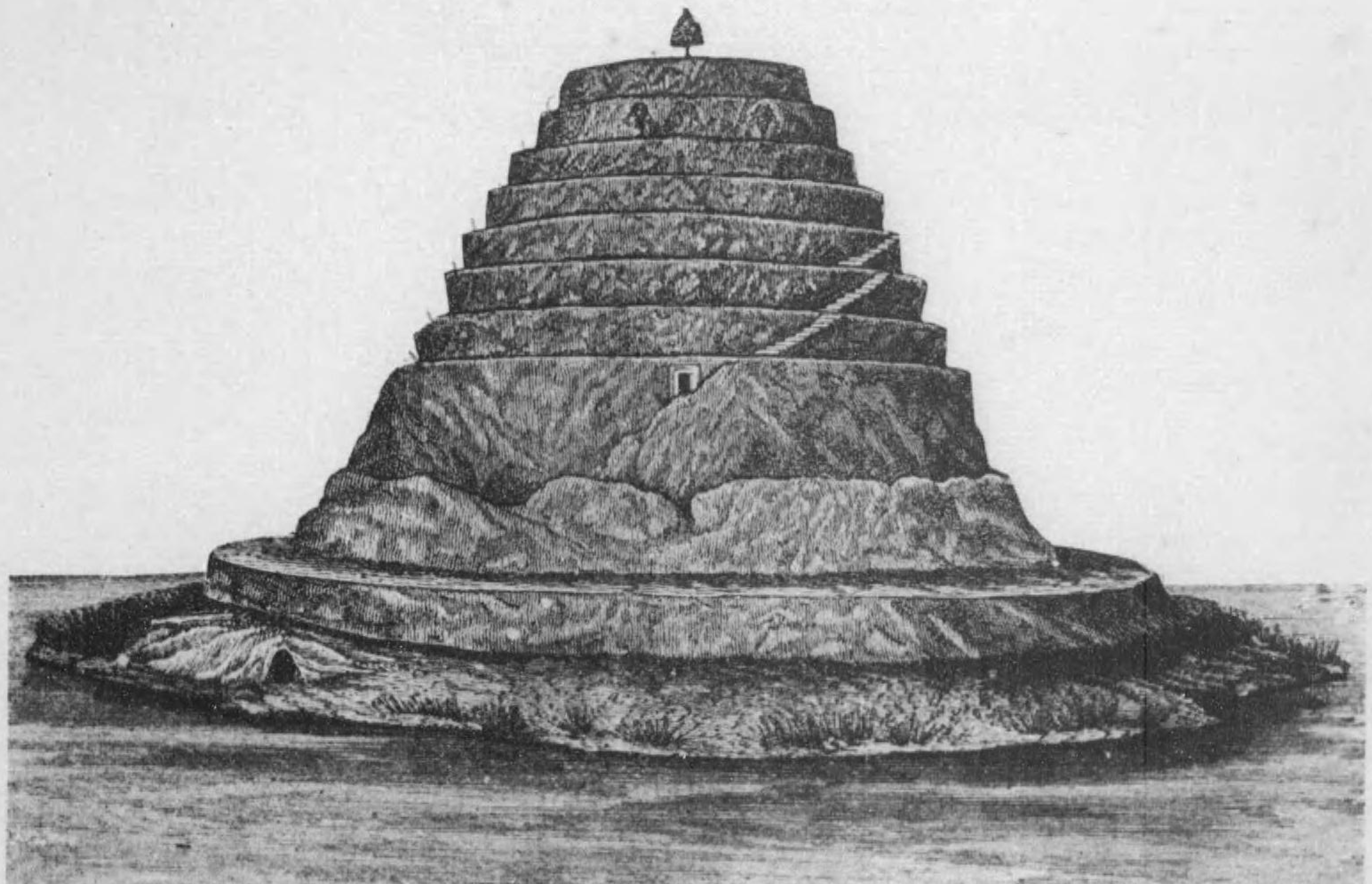
ベアトリーチエ。さらにつよく心を惹きてしば〳〵記憶を奪ふも 百廿四
の、彼の智の目を昧ませしなるべし
されど見よかしこに流るゝエウノエを、汝かなたに彼をみちびき、 百廿七
汝の常に爲す如く、その萎えたる力をふたゝび生かせ。
たとへば他人の願表示となりて外部にあらはるゝとき、尊き魂遁 百卅
るゝことをせず、たゞちに之を己が願となすごとく
美しき淑女我を拉きてすゝみ、またスターチオにむかひてしとやか 百卅三
に、彼と倶に來よといふ
讀者よ、我に餘白の滿すべきあらば、飮めども飽かざる水の甘さを 百卅六
いさゝかなりともうたはんものを
第二の歌に充てし紙はやみなこゝに盡きたるがゆゑに、技巧の手綱 百卅九
にとゞめられて我またさきにゆきがたし

さていと聖なる浪より歸れば、我はあたかも若葉のいでゝ新たになれる若木のごとく、すべてあらたまり
清くして、諸の星にいたるにふさはしかりき

浄火の山は南半球の海中、聖都ゼルサレムメの反對面にあたりて突出する一圓錐狀の高嶺なり、此山三大部に分る、一は海濱より浄火の門に亘る山麓の急坂にして瀕死の際まで悔改めざりしものゝとゞまる處（さらに細別して四となす(一)寺院の破門をうけし者(二)怠惰なりし者(三)横死せし者(四)國事に沒頭して救の事を省みざりし者）一は浄火の門より嶺の附近に亘る山腹にして之を圍繞する七個の地帶より成り浄火の最主要部たり、寺院の教義に基づきて分類せる七大罪（傲慢、嫉妬、忿怒、怠惰、貪欲、貪食、邪淫）の浄めらるゝところ、一は山上の平地にして樂園の在る處なり。

ヸルジリオはダンテを導いて海濱より登り、たえず右に道をとりつゝ門外の各地及門内の諸圏を歴程して遂に樂園に達し、ベアトリーチエ顯はるゝに及びて去る。

兩詩人が此南海の孤島に星を仰ぎてよりダンテがエウノエの水を樂園に飲むにいたるまでに經過せる時間は三晝夜と約七時間なり。



淨火註

第一曲

ダンテ井ルジリオと淨火の海濱に立ち、こゝに島守カトネにあふ、カトネ詩人等のこゝに來れる次第をきゝてその登山を許し且井ルジリオに命じまづ岸邊の藺をダンテの腰に束ねまた彼の顏を洗ひて地獄の穢を除かしむ

一—三【酷き海を】 地獄の刑罰の如き恐ろしき詩材をはなれ

【優れる水を】 淨火の歌をうたはんとて

四—六【第二の王國】 淨火即救はれし魂天堂にいたるの前まづその罪を淨むる處。當時寺院の敎ふるところによれば淨火は地獄に接してこれと同じく地下にあり、之をかく南半球の孤島に聳ゆる美くしき山となせるは ダンテの創意なり

七—十二【ムーゼ】 詩音樂等を司どる女神(二曲の七—九註參照)

【汝等のもの】 汝等を尊崇するもの

【死せる詩】滅亡の民を歌へる詩。之を再起せしむるは望絕えざる淨火の民をうたはんためなり

【カルリオペ】 ムーゼの一にして史詩を司どる

【ピーケ】 テッサリア王ピエリオの九人の女。ムーゼを侮どりこれと歌を競べんことを求む、カルリオペ即ムーゼの代表者となり之に應じて勝ち彼等のなほ罵るを惡み變じて鵲となす(オ井ヂオの「メタモルフォシ」五の三百〇二以下)

【赦】 彼等の僭上に對する

十三—五【碧玉】 ブーチの註に曰。碧玉に二種あり、一を東の碧玉といふ、東の方メヂアの產なればなり、此珠他の一種のものにまさりて光を透さず云々

【第一の圓】地平線。即地平線にいたるまで一天蒼碧となれるをいふ

ムーア本には「淸き中空（なかぞら）より第一の圓にいたるまでのどけき姿にあつまりて」とあり

十六―八【死せる空氣】暗き地獄の空氣

十九―廿一【戀にいざなふ】其光によりて（天、八の一以下參照）

【美くしき星】金星即こゝにては明（あけ）の明星

【雙魚】金星の光强くしてこれとともにめぐる雙魚宮の星の光を消せるなり

以上四月十日早朝の景を叙せるなり、金星此時雙魚宮にありとすれば時は日出前一時と二時の間即午前四時と五時の間の頃なるべし（地、十一の百十二―四註參照）

廿二―四【第一の民】アダモとエーヴ。彼等樂園を逐はれし後は南半球に人の住めることなし

【四の星】想像の四星。註釋者曰、四星は四大德即思慮、公義、剛氣及節制を表はすと

廿五―七【北の地】人の住む處なる北半球。星を見ざるは德の光を失へるなり

卅一―三【翁】マルコ・ポルチオ・カトネ・ウチチエンセ（前九五―四六年）。自由を唱道してポムペオに與（くみ）せしがポムペオ チエーザレに敗らるゝに及びウチカに退き自刃して死す

カトネは自由の保護者として淨火の島の島守となり、罪の羈絆を脫却して靈の自由を求むる魂等を勵ますなり、ダンテは他の著作に於ても屢カトネを激賞せり（「デ・モナルキア」二、五の百卅二以下。「コンヸヸオ」四、廿八の百廿一以下等）

又カトネは自殺者として地獄の第七圈に罰せらるべきものなれども古來俗衆の間にてもまた寺院内にても彼の尊重せらるゝこと深く且ヸルジリオ自身その「エーネアの歌」の中に彼を敬虔なる者の首長となして彼等に法を與へしめたれば（八の六百七十）ダンテも彼にかゝる大切なる地位を保たしめしなり

四十―四十二　カト子は兩詩人を地獄より逃來れる魂なりとおもへるなり

【失明の川】闇を流るゝ地下の小川（地、卅四の百卅七以下）

四十六―八【淵の律法】地獄の律法即地獄に罰せらるゝものその刑場を離るゝをえざるをいふ

四十九―五十一【目】原文、眉。ヸルジリオはダンテをして跪づき且目を垂れしめしなり

五十二―四【淑女】ベアトリーチエ（地、二の五十二以下參照）

五十八―六十【最後の夕をみず】死せるにあらず。神恩全く絶えて靈的生命を失へるにあらざる意を寓せり

【たゞいと短き】或は、今少時（しばらく）せばその踵をめぐらしがたし

六十一―三【路ほかに】地、一の九十一以下及百十二以下參照

六十七―九【言】敎（九十四行以下）

七十―七十二【自由】罪を離れて靈の自由を得ること

七十三―五【そがために】カト子は自由を失ひて世に生きんより自由の身として世を去らんとて死せるなり（「デ・モナルキア」二、五の百卅六以下參照）、その求めし自由は政治上の自由なれども靈の自由と基づくところ相同じ

【衣】肉體

【大なる日】最後の審判の日

七十六―八十一【ミノス】地獄の法官（地、五の四以下）

【マルチア】カト子の妻（「コンヸヸオ」四、廿八の九十七以下參照）。リムボにあり（地、四の百廿八）

八十二―四【七の國】淨火の七圈

八十五―七【世に】原文、かなたに。以下此例多し、一々註せず

八十八―九十【禍の川】アケロンテ（地、三の七十以下參照）

【かしこを出し】リムボを出し

スカルタッチニ曰。カト子の死は基督の死より早きこと約八十年なり、而して基督の地獄を訪はざりしさきには人の魂救はれしことなし（地、四の六十三）されば カト子もまた多くの魂とと

もにリムボにありて救の日即權威ある者の地獄に來る日を待てるなるべし

【律法】救はれし者は地獄に罰をうくるもの〻ためにその心を動かすをえず（路加傳、十六の廿六參照）

九十四—六【藺】罪を淨むるにあたりて最も主要の德なる謙遜のしるし

【汚穢】地獄の空氣よりうけし

九十七—九【霧】地獄の

【最初の使者】淨火の門を守る天使（淨、九の七十六以下）

百〇三—五【打たれて】浪に。藺はよく屈折して打つ浪に逆らはざるが故に水際に生を保てども他の草木は然らず

謙遜の人は心を屈して神に從ふがゆゑによく刑罰に耐へてその罪を淨むるをうれども此德を有せざる人はしからず

百十二—四【端】水際

【後に】詩人等北極の方に向ひてカト子をみ、後うしろにむかひて海濱にいたる、知るべし彼等のはじめ島の南方にあらはれしを

百十五—七【朝の時】l'ora mattutina 曉の前、明方近き夜の時をいふ。殘の闇曉に追はれて逃げゆき、海のさゞ波みゆるなり

或曰。ora は微風なり、日出前の微風黎明に追はれて海原遠く小波をたゝふるをいふと

百廿一—三【日と戰ひ】長く日の光に耐ふるをいふ

百廿七—九【涙】地獄にて流せる

【色】本來の色。ヰルジリオは地獄の惡氣のために汚れしダンテの顏を露にて洗ひ、再びもとの色にかへせり

百卅—卅二【歸りしことなき】地、廿六の百卅九—四十一並註參照

百卅三—六【かの翁】原文、他の者(altrui)

【再び】德は頌つによりて減ずることなし

第二曲

詩人等なほ汀に立てるに、ひとりの天使船をあやつりて岸に着き一群の魂を置きて去る、ダンテの友カセルラ此魂の中にあり、請はれて戀歌をうたふ、衆その聲のうるはしきにめで、とゞまりて之に耳を傾け、つひにカトネの戒を受く

一—三　四月十日午前六時に近き頃即淨火の朝ゼルサレムメの夕西班牙の晝印度の夜なり

【天涯】ゼルサレムメは北半球の子午線のいと高き處にあり（地、卅四の百十二—七註參照）、しかして淨火はゼルサレムメの反對面にあるが故にその地平線は即聖都の地平線と同じ

四—六【夜】夜（即夜半）は日と反對の天にあり（地、廿四の一—三註參照）而して日は此時白羊宮にあるがゆゑに夜はその反對面の天宮即天秤宮にあり、日の登るに從て夜は印度なるガンジェの河口を去り、次第に西に向ふ

【其手より落つ】秋分にいたれば日天秤宮に入る、此故に天秤夜の手を離るといへり、秋分以降夜は次第に晝より長し

七—九【アウローラ】明方の空色を朝の女神と見做せるなり。此色始め白く後赤く日出るに及びて橙黃色となる、恰も女神の老ゆるにつれてその頰の色變るに似たり

十—十二【路のことをおもひて】路定かならざるため

十三—五【濃き霧】火星の赤色に濃淡あるは之を蔽ふ水氣の厚薄によるといふこと「コンヰヾオ」二、十四の百六十一以下に見ゆ

十六—八【光】天使

【願くは】死後救はるゝもの〻群に入りて再び此光を見るをえんことを

廿二—四【白きもの】光の左右の白きものは天使の翼下方の白きものはその衣なり

卅一—三【隔たれる】テーヴェレの河口（百—百〇二行並註參照）と淨火の島の間の如く遠くへだたれる

卅四—六【朽つべき毛】鳥の羽等

卅七—九【神の鳥】天使。翼あるによりて鳥といふ

四十三―五【福その】parea beato per iscritto 消えざる福その姿にあらはる

異本。faria beato pur descritto　その姿振舞いと尊ければ彼を見ずともたゞそのありさまを聞くのみにて人福をえんとの意

四十六―八【イズラエレ】詩篇第百十四の始にあり、イズラエレの族埃及を出で奴隷の境界を脱して神の自由民となれりとの聖經の歴史には魂罪の絆を離れ榮光かぎりなき自由を得るの意合まるゝがゆゑに（「コンギマオ」三、一の五十二以下及びダンテがカン・グランデ・デルラ・スカーラに與ふる書百四十九行以下參照）新たに來れる魂等特に此聖歌をうたへるなり

五十五―七【磨羯】白羊宮地平線上にある時磨羯宮は中天にあり、白羊宮の太陽次第に登るに從ひ磨羯宮は中天より次第に西方に傾きはじむ

六十七―九【呼吸】地、廿三の八十八參照

七十―七十二【橄欖】橄欖の枝は古へ平和のしるしとして用ゐしものなりしがダンテの時代にては平和勝利等おしなべて吉報を齎らす使者之を手にする例なりきといふ

七十三―五【美しくする】罪を淨むる

七十六―八【ひとり】カセルラ。ダンテの親友にして歌を善くす、傳不詳

七十九―八十一【三度】「エーネアの歌」（六の七百以下）にエーネア冥府にくだりて父アンキーゼの魂にあひ三度これを抱かんとせることをいづ、その一節に曰く

抱けどかひなし父の姿はたゞ輕き風かりそめの夢にひとしく三度（みたび）その手をはなれたり

八十八―九十【紲】肉體の

九十一―三【再び】此旅路の教訓に基づきて德の生涯を送り、死後救を得て魂再この處に歸らんため

【かく多く時を】汝の死せるは久しき以前のことなるに今漸くこゝに來れるは何故ぞや

異本、「かく大なる國」（卽淨火）とあり、意の歸する所同じ

九十四―六【もの】載すべき時を定め載すべき魂をえらびて之を船に載せ淨火の島に送る天使

九十七―九【正しき意】天意

【三月の間】法王ボニフアチオ第八世の令旨の中なる大赦の初の日卽千二百九十九年の基督降誕祭より（地、十八の廿八―廿註參照）千三百年四月十日まで三ケ月餘の間をいふ。大赦の恩惠に浴するもの悉く天使の船に乘るをうるなり

テーヹレの河口に集まる魂皆船に乘るをうれども生前の德不德によりてその乘るに先後あり、さればカセルラも屢天使に拒まれて空しく時をすごせるうちジウビレオの年いたりて特に渡海を許されしなり

百―百〇二【テーヹレ】羅馬を過ぐる著名の川なれば羅馬の寺院を代表す、地獄に下らざるもの萬國よりこの河口にあつまるといへるは寺院が救はるゝ魂を神と結びて淨めの途につかしむるを示せるなり

百〇三―五【アケロンテ】地獄の川（地、三の七十以下）

百〇六―八【律法】境遇の變化にともなひて新たなる天の律法のもとにおかれ、そのため昔の技能をあらはす能はざるにあらずば

百十二―四【わが心の中に】Amor che nella mente mi ragiona ダンテの歌集にある歌の始の一行なり、「コンギマオ」第三篇にこの歌の解釋いづ、古註にはカセルラこれが譜を作れりといへり

百十八―廿【翁】カトネ

百廿一―三【穢】scoglio　蛇の皮魚の鱗等のごとく魂をつゝむ罪の汚れ

百廿七―九【まさる願】危きを避くるの願食を求むるの願に勝ちて

第三曲

詩人等やがて山の麓にいたれるに岩石高くして登るをえざればかたたより歩み來れる一群の靈を迎へてこれに路を問ひその數をきく、

彼等の一なるマンフレヂ己が身の上をダンテにあかし且寺院に背きて死せるものゝ刑罰をうくるさまを述ぶ

一—三【理性】理性の辟人をはげまして淨めの道に就かしむ

或曰。ragion は神の正義なり fruga は懲すなり、神の正義淨火の山に人を懲すをいふと

四—六【伴侶】ギルジリオ

七—九【みづから】船より下れる魂等はカトネの戒をきゝて悔い、ギルジリオは自ら省みて悔ゆ

十—十二【狭まれる】カセルラの事及カトネの戒にのみその思の集中せるをいふ

十三—五【求むる】こゝにては處のさまを知るを願ふこと

十九—廿一【棄てられし】ギルジリオに。ダンテはギルジリオの靈にして影なきを思はず、己獨を殘して去れるにあらずやと疑へるなり

廿五—七【夕】淨火の午前六時過はゼルサレムの午後六時過にあたる、伊太利は聖都と西班牙の中央にあれば此時既に夕(午後三時過)なり(淨十五の一—六註參照)

【ブリンデシ】伊太利の南アドリアチコ海濱の町

紀元前十九年ギルジリオブリンヂシに死す、皇帝オッタギアーノ・アウグスト命を下してその遺骸を奈甫里に移し厚くこゝに之を葬る

廿八—卅【光を堰かざる】諸天は透明なれば一天より出る光他の天のためにせかるゝことなし

卅一—三【威力】神の

【かゝる】わが體の如く影もなき

【されど】神の大能のいかなるさまにはたらくやは人知らず

卅四—六 若し人智をもて神のきはみなきみわざを知り盡しうべしとおもふ者あらば

卅七—九【事を事として】al quia(=chè)たゞ事物の事物たるを知りて何故に然るやを究めんとせざるをいふ

【マリアは子を】基督の出現によりて人はじめて天啓をうくるに及ばざりしなるべし

四十—四十二 リムボにとゞまる聖賢の如く一切を知るの願を果すに最も適せる人々すら世にその願を成就するにいたらず、今や却て望なき願のために(地、四の四十二)永遠の憂をいだく

四十三—五【アリストーテレ、プラトネ】倶にリムボにあり(地、四の百卅一—二及百卅四)

【思ひなやみて】ギルジリオも彼等と境遇を同うすればなり(地、四の卅七—九參照)

四十九—五十一【レリーチとツルビア】レリーチはスペチア灣(ゼーノヴァの東南)に臨める古城、ツルビアは佛領ニッツア(ニース)に近き町。此兩地の間はほゞリグーリアの海濱といふに同じく、東西リギエーラに分たれ、連山高くゼーノヴァ灣上に突出す

五十八—六十【一群の魂】悔い改めて世を去れるも寺院と和することをせざりし者

【おそく】救に入るのおそきを表示す

六十四—六【望】路を聞くをうるの望

七十—七十二【岸】山側

【動かず】道行く人、物におそれてその足をとゞむる如く魂等は詩人等が彼等に路を問はんとて左に進みいづるを見、その淨火の通則に反するをあやしみてとゞまれるなり

滅亡の路は常に左にむかひ(地、九の百卅一—二註參照)救の路は常に右にむかふ

七十三—五【福に終れる】神と和して死せる

【選ばれし】えらばれて救の路にある

七十六—八【知ること】路を知らずして歩めば時を失ふ、ゐかして人はその智進むに從ていよ〳〵時の重んずべきを知る

八十八—九十【右に】詩人等路を問はんとて左にむかへるがゆゑに山右に、日左にあり

九十七—九【壁】山の嶮なるをいへり

百〇三—五【ひとり】マンフレヂ。皇帝フェデリーゴ第二世の庶子、千二百三十一年の頃

シチーリアに生れ千二百五十八年より同六十六年までナーポリ及シチーリアに王たり、羅馬の寺院その放逸を惡み之と相敵視すること久し、法王クレメンテ第四世、佛王聖路易の弟なるカルロ・ダンジオを招きて之にマンフレヂの領地を與ふることを約す、千二百六十六年一月カルロ奈甫里王國を攻む、マンフレヂ敗れ、同年二月ベネヹントの戰に死す（地、廿八の十三—八註參照）

百十二—四【コスタンツア】皇帝アルリーゴ第六世の妃にしてフエデリーゴ第二世の母なり（天、三の百十八—廿並註參照）。マンフレヂは庶子なればこゝに父の名をいはずして祖母の名をいへるなり

百十五—七【名譽の母】王位に登れる者の母【女】マンフレヂの女にして曾祖母と同じく名をコスタンツアといふ、アラーゴナ（西班牙）王ピエートロ第三世の妃となりアルフォンソ、ジヤーコモ、フエデリーゴの三子を生めり、千二百九十一年アルフォンソ死して後ジヤーコモはアラーゴナにフエデリーゴはシチーリアに王たり（淨、七の百十五以下並註參照）

【眞】寺院の破門をうけしをもて世の人我を地獄に罰せらると思はゞ、汝コスタンツアに我の淨火にあるを告げよ

百十八—廿　身は戰場に殪れ、魂神のもとに歸れり

百廿一—三【されど】神は喜びてすべてそのもとにかへるものをうけいれ給ふ

百廿四—六【コセンツアの牧者】コセンツアは伊太利の南カラブリア州にある町の名なり、牧者（コセンツアの大僧正）の誰なりしやはあきらかならず

法王クレメンテ第四世の命によりてかの大僧正、マンフレヂの遺骸をベネヹント附近なるその墓より堀出し之をヹルデの川邊に棄てたりとの說あるによれるなり

【この數】原文、此頁。註釋者多くは約翰傳六の卅七を引照す。かの大僧正その頃もしよく此聖語をさとりたらんには敢てわが遺骨に侮辱を加ふることなかりしなるべし

百廿七—九【堆石】カルロ・ダンジオの兵士等がその遺骸の上に積める小石

百卅—卅二【王土】ナーポリ王國【ヹルデ】ナーポリ王國國境の一部を洗ふガリリアーノ川のことなるべしといふ、異說多し【消せる燈火】普通の葬儀の時と異なり蠟燭に火を點ぜざるをいふ

百卅三—五【綠の一點】植物の全く枯れ果てずして綠なるところあるごとく人未だ死せずして悔いて神に歸るをうべき一縷の望ある間は【彼等】牧者等【永遠の愛】神の恩愛再び其人に臨む能はざるにいたることなし

百卅六—四十一　寺院に破門せられしものはたとひ悔いて後死すともその破門の中にへし年月の三十倍の間は淨火門外の山麓にとゞまるのみにて罪の淨めをうくるをえず

【善き祈】世に住む善人彼等のために神に祈れば彼等は三十倍の時過ぎざる先に淨火門內に入ることをう

百四十二—四【コスタンツア】卽マンフレヂの女【禁制】世人の祈によらざれば、定まれる時過ぐるまで淨火の門內に入るあたはざること【悅ばす】わがために善人の祈を求めて

百四十五【こゝ】淨火全體を指す、善人新によりて淨火の靈をたすくるをうとは當時寺院の敎へしところなり、この事以下處々にいづ（淨、四の百卅以下、六の廿五以下、十一の卅一以下等）

第四曲

詩人等狹き岩間の路をのぼりてとある高臺にいたりその上にいこふ、導者こゝに日の左よりいづる所以をダンテに說きあかし、後共に一巨岩に近づきて多くの魂をそのうしろに見る、卽怠惰のため死に臨みてはじめて悔改め

し魂なり、彼等の一ベラックワ、ダンテとかたり之に已が境遇を告ぐ

一―六　喜又は悲等の强き刺激をうけて魂心の能力の一（即ち喜又は悲を感ずる）に集まれば他の能力のはたらきすべて止むに似たり、されぱプラトネ學派の唱ふる如く人に多くの魂ありとなすは誤なり、そをいかにといふにもし魂多からば一の魂一方に集まるとも他の魂よく他方を顧みるをうればなり

十―十二　單なる視聽の能力は强き刺激をうけて魂を獨占する能力と異なる、後者にありてはその能力刺激を與ふるものに固定し（繫がる）て活動の自由を失へども前者にありてはしからず

十三―八【かの靈】マンフレヂの

【五十度】日の登ること一時間に十五度なれば今は日出後三時廿分即午前九時過なり

十九―廿四【たゞ一束】原文、たゞ一熊手

葡萄熟する頃農夫垣根の孔を塞ぎて盜人の入るを防ぐなり

廿五―七【サンレオ】ウルビーノ市（中部伊太利）附近の小き町にて險しき山の上にあり

【ノーリ】西リギエーラ（淨、三の四十九―五十一註參照）の中サーヴナとアルベンガの間にある小き町にて絕壁の下にあり

【ビスマントヷ】エミリア州レッジオ地方の險山の名

廿八―卅【わが光となりし】理性の光によりてわが行路を照らせる

こゝを登らんとするものはわがなせる如く信賴すべき導者に從ひ德に進まむとの深き願をその羽翼として飛ばざるべからず

卅一―三【崖】原文、端。即左右の岩の緣（ふち）

卅四―六【高き陵】山の下方を指す

【上緣】岩間の狹路盡くるところ

卅七―九【枉ぐる】步を左右に轉ずる

四十―四十二【象限の中央の線】原文、半象限より中心（圓の）にいたる線。即四十五度の角度

四十六―八【バルツオ】balzo 岩石の山腹より突出せる處。詩人等の目の及ぶかぎり一帶をなして山を圍繞せり

四十九―五十一【圓】即バルツオ

五十五―七【あやしめり】我世界にては東に向ふ人日が右の方（即南の方）にかたよるを見る例なればなり

五十八―六十【光の車】太陽

【アクイロネ】北の風。こゝにては北を指す

六十一―三【若し】もし太陽雙兒宮にありて【カストレとポルルーチエ】ジオヱ神とレーダの間の二子。化して宿星（雙兒宮の）となれりといふ

【鏡】太陽。光を南北兩半球におくる

六十四―六【舊き道】黃道。太陽もし地球の周圍を回轉するにあたりて其年每の軌道を誤ることなくば

【赤き】太陽その中にあるがゆゑに太陽もし雙兒宮にあらばそのめぐるところは今よりもなほ北にあたる、これ雙兒宮の星は白羊宮（太陽現にこゝにあり）の星よりさらに北にあるによりてなり

六十七―七十五【シオネ】ゼルサレムメ

ゼルサレムメと淨火の山とは地球の正反對面にあり、而して前者は夏至線以北に後者は冬至線以南にあるがゆゑに東に向ふ人前者にては日を右に後者にては日を左に見るなり

【天涯を同うし】淨、二の一―三註參照

【フエトンテ】地、十七の百〇六以下並註參照

【路】黃道

【此、彼】此は淨火の山、彼は聖都

七十九―八十一【さる學術】天文學

【日と冬の間】冬期北半球にては太陽冬至線若しくはその附近にあるが故に赤道は冬の世界と太陽の間にあり、南半球冬期に入れば太陽夏至線若しくはその附近にあるが故に赤道は冬の淨火と太陽の間にあるなり

【中帶】逆行する諸天の中の最も高きもの即第九天の中帶

八十二—四　淨火の島とその北なる赤道の間の距離は 聖都とその南なる赤道の間の距離に等し

【希伯來人】古希伯來人がゼルサレムメを中心としてパレスチーナにのみ 居住せる頃をいへるなるべし

八十八—九十　德の路は入り難しといへども進むに從て易し

九十七—九【それよりさき】山の頂卽疲を休むるところに達せざるさき

百〇三—五【群】怠惰のため死に臨むまで悔改めざりし人の魂

百十二—四【目を】不精のため目のみを動かして額をあげざるなり

【汝は】汝はわがごとく 不精の兄弟にあらざれば

百廿一—六【ベラックワ】ヒレンツエの樂器製造者、ダンテと 相識の間柄なりしこと本文によりて知らる

【憂へず】救の道にあれば

【習慣】生前の怠惰なる慣習

百廿七—九【神の島】淨火の 門を 守る 天使（淨、九の七十六以下）

【苛責】門内にてうくる淨めの苛責

百卅—卅二【善き嘆息】罪を悔ゆる

【天はまづ】淨火の門内に入るの前、我は まづその門外にて 我の世に享けし齢と同じ年月を過さゞるをえず

百卅三—五　若し世に住む善人わがために神に祈らば それよりさきに門内に入りて罪を淨むることをうれども（淨、三の百卅六以下參照）

百卅六—九【日】時正午なれば太陽中天にあり

【岸邊】ガンジエの（淨、二の四以下參照）

【摩羅哥】亞非利加の 西北端の國。西班牙のシギリアと同じく北半球の西端を指すに用ふ

淨火の正午は聖都の夜半、摩羅哥の夕にあたる

第五曲

詩人等なほ少しく登り進みて他の一群の魂にあふ、こは皆橫死し、ふかして死に臨むまでその罪を悔いざりし者なり、彼等のうちみたりヤーコポ・デルカッセロ、ブオンコンテ・ダ・モンテフエルトロ及ピーア、ダンテとかたる

四—六【左】東を背にして登るがゆゑに今は日右にあり（淨、四の五十二以下參照）影左に落つ

七—九【碎けし】影のため（淨、三の八十八以下參照）

十—十二【心ひかれ】原文、魂とらはれ。怠惰者の言に心ひかるゝなり

十六—八　思多ければ專なる能はず、ダンテかの魂の言にその心をとむる時は 登山の念さまたげられて時空しく過ぐるの恐あり

廿二—四【橫方より】兩詩人は山を登り魂等はその腰をめぐるがゆゑに

【憐みたまへ】Miserere　詩篇第五十一篇をうたへるなり

【かはるがはる】a verso a verso　群集二部にわかれてその一部最初の一節をうたひ終れば他の一部第二節をうたひかくして漸次にうたひつぎ歌ひ終るなり

廿五—七【あゝ】驚とあやしみをあらはす

卅四—六【益を】ダンテ世に歸りて彼善人に請ひて彼等のために祈らしむれば

卅七—九【光】原文、燃ゆる氣體。初更の頃の流星または夏の夕の電光

五十二—四【橫死】戰（ブオンコンテ）、私怨（ヤーコポ）、家庭の悲劇（ピーア）等

【天の光】神恩の光

五十五—七【赦しつゝ】人を（馬太傳六の十四）

六十一—三【平和】天堂の幸福

六十四—六【一者】ヤーコポ・デル・カッセロ。

ファーノ（地、廿八の七十六—八十一註參照）の名族、千二百九十六年より翌七年までボローニアの「ポデスタ」たり此間フエルラーラの侯爵「エスチ」家のアッツオ八世の怨を買ふ、千二百九十八年ミラーノの「ポデスタ」となり「エスチ」家の領地を過ぐるなからんためまづ海路を取りてヱネーチアにいたる、ふかしてこゝよりパードヷ人の地を過ぎてその任地に赴むかんとしオリアーゴの附近に達するに及びアッツオの命を受けし者の要擊するところとなりて死す

【助】原文、恩惠。ダンテが彼等の親戚知己に乞ひて彼等のために祈らしむること

【もし力】若し已むを得ざる理由ありて汝の好意も果す能はざるにいたらずば

六十七—九【間の國】マルカ・ダンコナ。ローマニアと奈甫里王國の間にあり、後者は當時カルロ・ダンジオ第二世の治めしところ

七十—七十二【ファーノ】マルカ・ダンコナにある町

【淨むる】はやく淨火の門内に入りて

七十三—五【我の宿れる血】我ヤーコポの魂のやどれる血、わが肉體を生かしめし血

利未記十七の十一に曰。肉の生命は血にあり

【アンテノリ】パードヷ人。トロイア人アンテノレの子孫なりとの傳說あるによれり、アンテノリの懐といふはパードヷ人の領地內といふに同じ

七十六—八【安全】敵地を距ること遠ければ（六十四—六行註參照）

【エスチの者】「エスチ」家のアッツオ八世

七十九—八十一【オリアーゴ】パードヷとヱネーチアの間にある村

【ラ・ミーラ】オリアーゴの附近にてブレンタ川に通ずる運河の一の岸にある村

【我は】我は今も世に生きながらふることをえたりしなるべし

八十五—七【汝の願】平安を得るの望（六十一—三行註參照）

【わが願】門内にて罪を淨むるの願

八十八—九十【ブオンコンテ】地、廿七に見えしグイード・ダ・モンテフエルトロの子。アレッツオの「ギベルリニ」黨の爲に屢戰場に臨み千二百八十九年六月カムパルヂーノの戰に死す

【モンテフエルトロ】地、廿七の廿八—卅並註參照

【ジョヷンナ】ブオンコンテの妻。世に殘れるわが妻もその他の親戚も一人としてわが事を思ふものなし

九十一—三【カムパルヂーノ】カセンチーノ（地、卅の六十四—六註參照）なるアルノの溪の一部ビビエーナ附近の平原。千二百八十九年六月アレッツオの「ギベルリニ」黨とフイレンツエの「グエルヒ」黨とこゝに戰ひて敗る

ダンテは當時フイレンツエ騎兵の中にありて此戰に與かれりとの說あり（地、廿二の四—九註參照）、若此說にして信ずべくんば彼はブオンコンテの討死せしこと及其遺骸の戰場に見出されざりしことと等を共頃委しく知りえたるなるべし

九十四—六【隱家】カマルドリの僧院をいふ、こは十一世紀の始の頃聖ロムアルドの開基にかゝる

【アルキアーノ】僧院の上なる二水相合して下りビビエーナの北なる丘の麓にいたりてアルノに注ぐ、之をアルキアーノといふ、溪を横ぎりてアルノに入るが故によこさまにといへるなり

九十七—九【名消ゆる處】アルキアーノとアルノの落合。アルキアーノこゝにいたりてその名を失ふ、こゝより海に赴くまでたゞアルノと稱へらるればなり

カムパルヂーノよりこの落合まで約二哩半ありといふ

百—百〇二【マリア】臨終に聖母の名を呼べるなり

百〇三—八【地獄の使者】鬼。地、廿七の百十二以下にブオンコンテの父につきて聖フランチエスコと鬼と爭へることいづ、すべて此種類

の物語中古の傳説に多かりきといふ、ミケーレと鬼とモーゼの屍を爭へりとの記事すでに聖書の中(猶太書第九節)にあるをおもへ

【天に屬する】異本。天より來れる

【不朽の物】魂

百十二―四　以下鬼がブオンコンテの遺骸を虐待せるさまを叙す、但此一聯、文の組立につきて異説多し

【性より】靈體として風雲を左右するの力を有す

百十三―七【プラートマーニオ】カセンチーノの西の境にある高山

【連山】アペンニノ山脈。プラートマーニオと相對して東にあり

百廿一―三【流】カセンチーノの諸川。アルキアーノも其一なり

【たふとき川】fiume real　直接に海に注ぐ川にてこゝにてはアルノを指す

百廿四―九【苦に】悔恨の

【身をもて造れる】腕を胸の上に組みて十字架の形をつくれるなり

【獲物】大水に押流さるゝ草木砂泥の類

百卅三―六【ピーア】シエーナなる「トロメエイ」家の者にてマレムマなるピエートラの城主ネルロ・デ・パンノツキエスキに嫁せしが後これに殺されたりといふ、殺害の原因、年月及其他の事につきては諸説ありて定かなること知り難し

【シエーナ我を造り】我はシエーナに生れてマレムマ(地、十三の七―九註參照)に死せり

【緣の】指輪を與へて後、妻に迎ふること正しき結婚の慣例なればピーアはその私にネルロに嫁せるにあらざるを示せるなりとの說採るべきに似たり、異本異説俱に多し

【與へしもの】即夫ネルロ

第六曲

横死の際にはじめて悔改めし他の多くの魂を見て後、詩人等神の審判と生者の祈禱についてかたり遂にソルデルロのたゞひとり坐しゐたる處にいたる、ダンテは彼が同鄕の好をもてヰルジリオをよろこび迎ふるを見己が鄕國を思ふの念に堪へず、悲歌慷慨す

一―三【ヅアーラ】zara　中古最も流行せる遊戯の一、三個の骰(さい)子を用ゐて勝敗を決す

【くりかへし】悲みつゝも屢骰子を投じて練習を積み次の勝負に勝たんとするなり

四―六　懷ゆたかなる勝者に從ひ行きて各多少の恩澤にあづからんとす

十―十二【約束】彼等のために善人の祈を請ふの約束

十三―五【死せる者】ベニンカーサ・ダ・ラテリーナ。アレッツオの法官にて十三世紀の人なり、シエーナの貴族ギーノ・デ・タッコ(ギーノと同じく奪掠を事とせるもの)に死刑を宣せしことありしかばギーノ之を含みベニンカーサが羅馬の法官となりて彼地に赴ける後己もまた羅馬にいたり法廷に於て之を殺し其首級を提げて去れり

【溺れし者】名をグッチョといひアレッツオなる「ギベルリニ」黨の首領なりし「タルラーチ」家の者なり、嘗て「グエルヒ」黨と戰ひて之を追へるとき其馬アルノの川に入れりといふ

【追ひて】或は、追はれて(敵に)

十六―八【フエデリーゴ・ノヱルロ】カセンチーノの伯爵グイード・ノヱルロの子。千二百八十九年(或曰九十一年)ビビエーナの附近にてアレッツオなる「ボストリ」家の者に殺さる

【ピサの者】古註に曰。こはフアリナータとてピサなる「スコルニジアーニ」家のマルヅッコの子なり、彼ピサの市民に殺されしとき、その頃故ありてフランチエスコ派の僧となりゐたりし父マルヅッコ、他の僧侶と共にいでゝその葬儀を營みかつ神の旨に從はんため殺害者の罪を容せりと

【強きを】我子を殺せる者を赦せるをいふ
一說に曰。フアリナータはウゴリーノ伯爵がピザを治めし頃罪を得て斬首せられし者なり、其遺骸久しく市に放棄せられしかばマルヅッコ姿を變へて伯爵の許にゆき埋葬の事を乞ふ、ウゴリーノその何人なるやを知り、汝の堅忍よくわが固陋と拗執に勝てり行きて汝の欲するところを爲せといひ．その請を容れたるなりと

十九―廿一【オルソ】オルソ・デーリ・アルベルチ。ナポレオネ伯（地、卅二の五十五―七註參照）の子なり、千二百八十六年その從弟即ちアレッサンドロの子アルベルトの殺すところとなる、アルベルトは之によりて其父の怨を報いしなり

廿二―四【ピエートロ・デ・ラ・ブロッセ】元下賤の生なりしが佛王ヒリッポ第三世の信任を得て高官に陞る、後君寵次第に衰へ遂に反逆の罪をうけて絞罪に處せらる
【ブラバンテの淑女】ブラバンテの公爵アルリーゴ六世の女にしてマリアといひ、ヒリッポ第三世の後妻なりし者。當時の人ピエートロの死をもて王妃の怨にもとづくと信ぜしなり
一說に曰。千二百七十六年ヒリッポの長子路易死せる時ピエートロ其死因をマリアの毒殺（卽己の子を位に即かしめんための）に歸し、かくして王妃の怨を買ひ從てヒリッポの信任を失ふにいたれり、ヒリッポカスチーリア王アルフオンソ第十世と戰を開くに及び、ピエートロを嫉む者彼が敵と內通して機密を之に漏せりとの事を王に具申し王妃一味の者と力を合せ、遂に彼を陷れきと
【此より惡き群】地獄に罰せらるゝ者。人を讒せる罪によりて死後地獄（第八獄第十濠）の刑罰をうくるなからんため未だ世にある間に其罪を悔ゆべし
マリアは千三百廿一年に死せり

廿八―卅【詩の中にて】「エーネアの歌」の中にて（四十一―四十二行註參照）

卅四―六【わが筆】わがまるせるところと彼等の求むるところと矛盾せず

卅七―九　神たとひ世人の祈を聽きたまふとも神の正義は依然として變ることなし
【愛の火】たとひ世にある人あたゝかき愛の心より淨火門外の魂のために祈りこの祈によりてはやく天意を滿たし（若し此祈なくばかの魂等天の定むる時至るに及びてはじめて神慮を和ぐべきに）彼等をはやく門內に入らしむるとも
【審判の頂】神の審判のきびしくおごそかなるはかはらじ

四十―四十二【陳べし處】エーネア冥府に入りてスチーゼの川に近づけるときパリヌロの魂之に己をも倶に渡らしめむことを乞ふ、エーネアの導者シビルラこれを許さず、且曰く
　神々の定めたまふこと、祈のために變りうべしと思ふなかれ
と（「エーネアの歌」六の三百卅七以下）
【神より】パリヌロの如きは神の恩寵をうくる者にあらざるがゆゑにその咎赦されずその願聽かれざりしなり（淨、四の百卅三―五註參照）

四十三―五【眞と智】靈界の奧義は人智のみを以て覺り難し、大智と雖なほ天啓の光によりてはじめて眞を見るをうるなり

四十九―五十一【主よ】異本、善き導者よ

五十二―四【逆ふ】登るべき路は汝の思ふよりも遠く且難し

五十五―七　汝未だ山の巓に達せざるうち、日は入り日は出でむ

六十一―三【ロムバルヂア】地、一の六十七―九註參照

七十―七十二【マントヷ】同上

七十三―五【ソルデルロ】マントヷの出なるトロヷトレ派の詩人（十三世紀）
一說に曰。ソルデルロはマントヷの領域內なるゴイートの人、十三世紀の始に生る、後本國を去りてプロヹンツア（佛）に赴きカルロ・ダンジオ第一世に擢用せられ武人として

又詩人として之に事ふ、カルロ伊太利に進軍せしときソルデルロ之に從ひて本國に歸り千二百六十九年の頃死すと（異說多し、委しくはロングフエルローの註を見よ）

「デ・ウルガリ・エロクエンチア」一、十五の十一以下にダンテがソルデルロの才藻を賞讚せし詞見ゆ

七十六—八【屈辱の】國に一統の君主なく政權侯伯の恣にするところとなるをいふ

【水夫】皇帝に當る

七十九—八十一【魂】ソルデルロ

八十五—七　チルレーノ、アドリアチコ兩海沿岸の諸州より內地にいたるまであまねく伊太利をたづねみよ

八十八—九十　皇帝ジユスチニアーノ第一世（天、六の十一—十二註參照）汝伊太利の爲めに多くの法をたてたりしかどその法に從つて國を治むべき君主なくば何の益あらむ、法ありて行はれざるは法なきに若かず

九十一—三【人々】法王僧侶等、即專ら靈界の事にたづさはりて國政を皇帝（チエーザレ）に委ぬべき人々

【神の言】チエーザレの物はチエーザレに復し神の物は神に復すべし（馬太傳廿二の廿一）

九十四—六　汝等國政に干與せるよりこの方帝王の統御を缺ける伊太利（馬）がいかに亂れて秩序なきにいたれるやを見よ

九十七—九【アルベルト】「アブスブルグ」王家のアルベルト第一世。皇帝ロドルフオの子、千二百九十八年選ばれて羅馬皇帝となりしも伊太利に赴かず、千三百〇八年五月共甥ジヨヴンニの弑するところとなる

百—百〇二【奇しく】かの弑逆は即奇しく著しき天罰なり

【後を承くる者】ルツセムブルゴのアルリーゴ第七世（天、卅の百卅六—八註參照）

百〇三—五【父】ロドルフオ（淨、七の九十一以下參照）

【かの地に】獨逸諸州の中にとゞまり

百〇六—八【モンテツキ】ロメオとジユリエツタの悲劇にて名高きヹロナ市の「モンテツキ」「カペルレツチ」兩家（共に「ギベルリニ」）、及オルギエート市の「モナルヂ」（「グエルヒ」）「ヒリツペスキ」（「ギベルリニ」）兩家。處を同うして而して相爭へる者の例をあげしなり、但異說あり

【彼等】前の兩家は既に禍をうけて悲み、後の兩家も亦今不安の狀態にあり

百〇九—十一【サンタヒオラ】シエーナ市の領域內なる「アルドブランデスキ」（「ギベルリニ」）家の所有地。此一族一時勢旺盛なりしもシエーナの「グエルヒ」と爭ひてその勢を失ひ、サンタヒオラには當時盜賊橫行せりといふ

百十五—七【相愛する】軋轢爭鬪の甚しきを嘲けれるなり

【己が名に】汝皇帝に對する伊太利人の侮蔑の目を見んために

百十八—廿【ジオヹ】神（地、十四の五十一—二註參照）

【他の處に】伊太利をその罪惡のために棄てたまふか

百廿一—三　或は後の禍のために今此禍を下したまふか

百廿四—六【マルチエルロ】チエーザレの勁敵マルコ・クラウヂオ・マルチエルロを指せるなるべしといふ。匹夫も政爭を利用してよく帝國の大敵となるをいへるなり

百廿七—九　爭亂の中心にして無主義無秩序なるヒレンツエを嘲ける反語

【汝をこゝに】汝にわが非難をも安んじて聞くをえせしむる

百卅—卅二　他の伊太利の市民の中には心に正義の念を宿せども言責を重んじて漫に口にせざる者多し、然るにヒレンツエの市民は心にもなき正義を口にす

百卅三—五【公共の荷】公職。ヒレンツエの市民が私慾の爲めに公職を貪るを罵れるなり

百卅九—四十四【ラチエデーモネ】スパルタ

【十月に紡ぐ】ヒレンツエの法令の常に變じて定まらざるをいふ

百四十五—七【汝のおぼゆる】未だ幾年も經ざる間に

【民】一黨勢を得れば他黨逐はれ、市に住する者屢變ず

百四十八—五十一【光を見なば】物を見るの明あらば

第七曲

ギルジリオ、ソルデルロに己が身の上をあかせし後ダンテとともにこれに導かれて山腹の美くしき一小溪にいたりこゝに著名の君主侯伯の靈を見る

四—六【登りて】善人の魂すべてリムボにくだり、未だ淨火の山にゆかざりしさき、即ち基督の未だ世を去りたまはざりしさき

【オツタギアーノ】オツタギアーノ・アウグスト（淨、三の廿五—七註參照）

七—九【他の罪】地、四の卅七以下參照

十三—五【抱くところ】膝より下

十六—八【我等の言葉】羅典語

十九—廿一【功德】ソルデルロ自身の

【恩惠】神の

廿五—七【圈の內】chiostra（地、廿九の四十—四十二註參照）地獄の第何圈

【我は罪を行へるにあらざれども信仰なく神をあがむるの道を盡さゞりしため神（即ち汝がその許にいたらんことを待望み我わが死後にいたりてはじめて知れる神）を見るをえざるなり

廿八—卅【處】リムボ（地、四の卅五以下參照）

卅一—三【人の罪】始祖アダモ罪を犯してより人類一般に相傳し普及せる罪惡的傾向

【釋かれ】洗禮を受けて

卅四—六【聖なる德】信と望と愛（哥林多前書十三の十三）。リムボの聖賢は多くの德を有すれども宗教數理の三德を缺く

四十六—八【魂】八十二—四行註參照

五十二—四【日】日の光は神より出る光なり、人神恩に浴せざれば一歩と雖救の途に進むあたはず（約翰傳十一の九—十、十二の卅五參照）

五十八—六十【間】夜間。神恩なくば人たゞ罪に歸るかさなくも淨めの道に進むをえずして徒に時を費やすのみ

七十—七十二【忽ち嶮】Tra erto e piano 或は、嶮しきにもあらず坦なるにもあらざる

【坎】溪

【緣半より】溪の緣の一部の他の部分に比ぶれば低くしてその半にもあたらざるところ。溪に下るに極めて容易なるところ

七十三—五【光りてあざやかなる印度の木】Indico legno lucido e sereno 或は此一行を二分して「藍、光りて鮮かなる木」と讀み後者は磨ける樫の木などの色淡黑なるを指せりと解する人あり、また然らずして印度の木と讀む人の中にも或は之を以て藍を指せりとし、或は烏木（こくたん）を指せりとし註釋者の說一ならず

八十二—四【魂】國事に沒頭せるため死に臨むまで罪を悔いざりし帝王侯伯の靈。溪の美しきは世の榮華をあらはせるなるべし

【サルエ・レーギーナ】*Salve Regina*（あゝ女王よ）、日沒後の禮拜のをり寺院內にうたふ祈の歌

こは涙の溪（うき世）より聖母を呼び御子耶蘇を我等に現はしたまへと請ふ歌なればダンテ其意を寓し靈の事を顧みざりし君主等をしてその悲境を訴へしめしなり。此歌全部英譯とともにノルトンの註にいづ

八十五—七【去ばしの日】殘り少なき日暮れはつるまでは

九十一—三【いと高き】世の地位最高ければなり、此曲の終に侯爵グリエルモがいと低き處にあるも理同じ

【責務】羅馬皇帝として伊太利に赴き親しく統御の任に當ること（淨、六の百〇三—五參照）

九十四―六【ロドルフオ】「アブスブルグ」家のロドルフオ。千二百十八年に生れ、同七十三年十月アクイスグラーナ（獨）にて皇帝の位に登り、同九十一年九月死す

【傷】閥族黨與の爭

【人再び】アルリーゴ第七世（淨、六の百―百〇二註參照）が伊太利の統一を圖りて事成らざりしに いひ及べるならんといふ、アルリーゴの伊太利に いたれるは千三百十一年なり

されど神曲の此部分をアルリーゴの死（千三百十三年八月）以前の作となす人は九十六行の tardi をおそきに過ぐる意に あらずして容易ならざる意に解すべきか（淨、卅三の四十三―五註參照）

九十七―九【慰むる】昔の仇敵も今の友となりて

【地】ボエーミア。モルダーヴ川の 水源此國にあり、此川エルバと合し北流して海に注ぐ

百―百〇二【オットカーロ】ロドルフオの勁敵オットカーロ第二世、千二百五十三年 ボエーミアの王となり屢ロドルフオと戰ひ 千二百七十八年ボエンナ附近に戰死す

【襁褓に】弱年の オットカーロも今壯年のヱンチエスラーオよりはなほ はるかにまされる君主なりき

【ヱンチエスラーオ】ヱンチエスラーオ第四世。千二百七十年に生れ、同七十八年 父の後を承けてボエーミア王となり千三百〇五年に死す（天、十九の百廿四―六參照）

百〇三―五【貴き者】ナヷルラ王テバルド第二世（地、廿二の五十二―四）の兄弟 エンリーコ。千二百七十年ナヷルラの王位を繼ぎ 同七十四年に死す、其女ジヨヷンナは父の死後ヒリツポ 第四世の妃となれり

【鼻の小さき者】佛王ヒリツポ第三世。路易第九世の次子、千二百四十五年に生れ、同七十年父につぎて佛王となり同八十五年に死す

【百合の花】アラーゴナ（西班牙にあり）王ピエートロ第三世との戰に 佛の艦隊利を失ひ、カタローニアに攻入りし ヒリツポはその退却中ペルピニアーノ（佛の南端）にて 死せり（千二百八十五年）。佛蘭西王家の旗は青地に三の金の百合なれば 退きて軍旗を辱しめしを花を萎れしむといへるなり

百〇六―八　ヒリツポ第三世 の已が胸を打ち、エンリーコの已が手に顔を支へて 嘆くは前者の子後者の女婿なるヒリツポ第四世の 罪惡を耻づるなり

百〇九―十一【佛蘭西の禍】佛王ヒリツポ第四世（一二六八―一三一四年）。ヒリツポ第三世の子なり、神曲中ダンテ 處々に その 非を擧ぐ（地、十九の八十五―七。淨、廿の九十一―三。天、十九の百十八―廿等）

百十二―四【身かの如く】アラーゴナ王ピエートロ第三世。千二百卅六年に生れ、同七十六年アラーゴナの王位を繼承し、同八十二年「シチーリアの虐殺」ありし後 彼地の王となり、同八十五年に死す、其妻は マンフレヂの女コスタンツアなり（淨、三の百十五―七參照）

【鼻の雄々しき】カルロ・ダンジオ 第一世（一二二〇―一二八五年）。佛王聖路易（路易九世）の弟にして プーリア及シチーリアに王たり

百十五―七【若き者】ピエートロ第三世の長子アルフオンソ三世。千二百八十五年 父の後を承けてアラーゴナの王となり 千二百九十一年に死す

【器より器に】父より子に

百十八―廿【ジャーコモとフエデリーゴ】ジャーコモは ピエートロ第三世の次子、始めシチーリアに王たりしが兄アルフオンソの死後 アラーゴナの讓を受け、千三百廿七年に死す。 フエデリーゴはジャーコモ の弟、ジャーコモアラーゴナの王となるに及びて シチーリアを治め千三百三十七年に死す

【善きもの】父の德

百廿一―三【それ人の】父の美德子に傳へらるゝこと稀なり

【與ふるもの】神。神は德の神より 出るものに

して遺傳によりて人の有するものにあらざることを世に知らしめたまはんとて

百廿四―六　ジャーコモとフェデリーゴがその父の德を嗣がざるごとくカルロ第二世もまたその父カルロ第一世（鼻の大なる者）の德を有せず

【プーリア、プロヱンツア】カルロ・ダンジオに次ぎてプーリアとプロヱンツアを治めし者はその子カルロ第二世（一二四三―一三〇九年）なり、このカルロは父に及ばずして統御の道その宜しきをえず、民悲嘆にくるゝなり

プロヱンツアはカルロ第一世がベアトリーチヱを娶れる時その所領となりしところ

百廿七―九　カルロ第二世（樹）のその父カルロ・ダンジオ（種）に及ばざることあたかもカルロ・ダンジオ自身のピエートロ第三世に及ばざるに似たり

【コスタンツア】ピエートロ第三世の妻（一三〇二年死）

【ベアトリーチヱ】プロヱンツアの伯爵ライモンドの女にしてカルロ第一世の初の妻

【マルゲリータ】ボルゴニアの公爵ヱウデの女。千二百六十八年即ベアトリーチヱの死せし翌年カルロの後妻となれり

百卅―卅二【アルリーゴ】英王ヘンリー第三世（一二〇六―一二七二年）

【枝には】その子エドアルド第一世（一二四〇―一三〇七年）の明君なりしをいふ

【まされる】カルロ、ピエートロ等の子に比して

百卅三―五【グリエルモ】モンフエルラートの侯爵グリエルモ七世。北部伊太利に多くの地を領し「ギベルリニ」黨の首領となりて大に「グエルヒ」と戰へり、千二百九十年アスチ（ピエモンテの中）の人々アレッサンドリアを唆かしてグリエルモに叛かしむるやグリエルモその亂を鎭めんとてかの地に赴むき却てアレッサンドリア人の捕ふるところとなり（同年九月）鐵籠の中に幽せられて死す（九十二年二月）

百卅六【モンフエルラート】北伊太利の中なるポー川の南の地にて今のピエモンテの一部にあたる

【カナヴェーゼ】北伊太利の西部ポーの北の地。モンフエルラートと共にグリエルモの侯爵領地たり

グリエルモの子ジョヴァンニ父の仇を報いんとてアレッサンドリア人と戰ひしも利あらず、侯爵領地の民久しくその禍亂になやめり

第八曲

ヸルジリオ及ソルデルロとともにダンテなほ君王の溪にありてニーノ・ヸスコンチの靈とかたる、溪を襲へる一匹の蛇ふたりの天使に逐はれし後、彼またコルラード・マラスピーナと語りかつ其豫言を開く

一―六【思歸りて】思鄕に歸りて

【時】夕暮

七―九【きかず】ソルデルロ語らず、君王の魂その歌をうたひ終りてまた聞ゆるものなければ

十―十二【東】往時祈禱を捧ぐる人東に向ふを例とせり

十三―五【テー・ルーキス・アンテ】*Te lucis ante* (terminum)（光消えざるさきに）一日中最終の禮拜の時（compieta）寺院内にうたふ祈の歌にて夜の間の加護をねぎもとむるもの

十九―廿一【被物は】難解の譬喩にあらざれば容易にその眞義をさとりうべきをいへり

蛇は誘惑なり、天使は冥助なり、救の道にあるものといへどもその初にあたりては誘惑にあふを免かれず、されどその信仰により天の冥助をえて罪を犯すにいたることなし

廿二―四【蒼ざめ】誘惑を恐れ神前に謙りてその祐助を待つ

廿五―七【焰の劍】（創世記三の廿四參照）註釋者曰。劍に

切尖なきはたゞ敵を防ぐためにて殺すためにあらざればなりと

廿八―卅【綠】綠色は希望の象徵なり

卅七―九【マリアの懷】聖母マリアの座所即エムピレオの天（天、卅一の百十八以下）

四十―四十二【背】ギルジリオの

四十九―五十一【はじめかくれ】未だ眞の闇にあらねば、さきにはあはひ遠くして見えざりし互の姿も、今は近くして見ゆるなり

五十二―四【ニーノ】ニーノ・ヸスコンチ。ピサ市「グエルヒ」黨の首領なるジョヷンニ・ヸスコンチとウゴリーノ伯の女との間の子（地、卅三の十三―五註參照）、千二百七十五年サールデニア島の一州ガルルーラの知事となり（地、廿二の七十九―八十四註參照）後また祖父ウゴリーノと共にピサの市政に與かれるも幾何もなく之と相爭ひ、千二百八十八年ピサを去り千二百九十六年サールデニアに死す

五十五―七【水を渡りて】テーヱレの河口より天使の船に乘りて。ニーノはダンテの境遇を知らざれば斯くいへり

五十八―六十【今朝】四月十日の朝（淨、一の十九―廿一註參照）

【第二の生】原文、他の生。永遠の生命

六十一―三【まざりぬ】驚き惑ひて。ダンテにあふ者或はその呼吸により（淨、二の六十七以下等）或はその影により（淨、三の九十一以下等）てその生者なるを知れり、されどソルデルロはギルジリオの事に心奪はれて深くダンテに注意するの暇なく、且この頃日既に山の後にかくれゐたれば（淨、六の五十六―七）影をみるをえざりしなり

六十四―六【其一】ソルデルロ

【また一】ニーノ

【コルラード】コルラード・マラスピーナ（百〇九―十一行註參照）

【事】人に生きながら冥界をめぐるをえさせたまひしこと

六十七―九　水の深きがごとく奥深くして人智も之を知る能はざるまでにみ業（わざ）の源をかくしたまふ神より汝のうくる特殊の惠を指して

七十―七十二【ジョヷンナ】ニーノの女、千三百年には九歳ばかりなりきといふ

【罪なき者の】わがために祈を天にさゝげしめよ

七十三―五【母】ベアトリーチェ。オビッツォ・ダ・エスチ（地、十二の百十二）の女、千二百九十六年夫ニーノ死して後己が郷里フェルラーラに歸り、千三百年ミラーノの君なるマッテオ・ヸスコンチの子ガレアッツォに嫁す

【白き首帕】中古寡婦の服裝は黑衣に白の首帕なりき、ベアトリーチェが之を棄てゝ再嫁しミラーノに赴きしは千三百年の半の頃なりしかど神曲示現の當時婚約既に成立ちゐたりしなるべしといふ

【あはれ】再嫁を悔いて寡婦の昔を慕ふなり。註釋者曰、千三百〇二年ガレアッツォミラーノを逐はれしよりこの方その一家久しく悲境に沈淪せりと

七十九―八十一　再嫁の紀念を世に殘すは貞操の紀念を世に殘すごとく名譽の事にあらざるべし

蝮蛇はミラーノの「ヸスコンチ」家の紋所、鷄はピサの「ヸスコンチ」家の紋所なり、家紋を墓所にあらはすこと日本に於てもその例多し

【ガルルーラ】地、廿二の七十九―八十四註參照

八十五―七【處】こゝにては南極の天を指す、極の星は赤道に近き星よりもその運行おそければなり

八十八―九十【三の燈火】註釋者曰。この三の星は信仰、希望、愛を表はす、思慮、公義、剛氣、節制の諸德は活動の德にして晝に適し、神學上の三德は默想の德にして夜に適すと

九十一―三【今朝】淨、一の廿二以下參照

九十四―六【我等の敵】默示錄十二の九參照

九十七―九【エーヷ】蛇アダモの妻エーヷを

誘ひて禁斷の木の實を食はしむ(創世記三の一以下)、始祖の罪業は全人類の禍の本なりければ苦きといふ

百〇三—五【天の鷹】天使。ダンテ蛇にのみ心ひかれて天使の飛びはじめし有樣を見ざりしなり

百〇九—十一【魂】コルラード・マラスピーナ(幼)。ギルラフランカの侯爵フエデリーゴの子、千二百九十四年頃死す

百十二—七【汝を】汝を導いて天にむかはしむる神恩の光 汝がこの山の巓に達するまで、汝の意志のはたらきと相結びて、消ゆること なからんことを

【渤槃の巓】美しくして變らざる地上の樂園

【ヷルヂマーグラ】ルーニジアーナ の一部(地、廿四の百四十五—七註參照)。ギルラフランカの城その中央にあり

百十八—廿【老】コルラード・マラスピーナ(老)。侯爵フエデリーゴの父(即前出コルラード・マラスピーナの祖父)、千二百五十年頃死す

【愛】己が宗族の榮達をのみ希へる わが地上の愛

百廿七—九【財布と劍】人に施して惜まず且勇武なりとの家の譽を傷けず

百卅—卅二【習慣と自然】家風と天性

【罪ある首】法王(ボニフアチオ八世か)。政務に干渉して

百卅三—五【牡羊四の】今より後七年の月日過ぎぬまに

牡羊の蔽ふ臥床は白羊宮なり、此時太陽白羊宮にありしがゆゑにかくいへり

百卅六—八【意見】汝のわが一家に對していだく

【人の言より】汝は世の風評以上に力あるもの即自已の經驗によりて 汝の意見に誤なきを知るならむ

千三百〇六年の秋逐客のダンテ、ルーニジアーナにいたりて「マラスピーナ」一家の歡待をうけしを指す

百卅九　若し神の定めたまふこと(ダンテの逐客となりて處々に流寓すべきこと等) かはらずば

第九曲

ダンテ君王の溪に眠りて夢み、眠覺むれば日既に高く身は淨火の門に近し、その傍にはたゞヸルジリオあるのみ、門を守る天使兩詩人のいふところをきゝ扉をひらきて内に入らしむ

一—六　淨火の夜景を叙せるなるべし、されど極めて難解にして意義 明かならざるところ多し、こゝにてはたゞ諸註の中、重なるものゝ一をあぐ(委しくはムーアの「ダンテ研究」第三卷七十四頁以下を見よ)

【チト子の妾】　月のアウローラ(月代) 即月將さに出んとして東方の白むをいへり(ラーナ)

チト子はトロイア王ラオメドンテの子、朝の女神アウローラに慕はれ之を妻として不死の身となれりといふ(神話)。ダンテ此傳說にもとづき日のアウローラをチトネの正妻と見做し月のアウローラをその妾と見做せるか

【友】チト子

【臺】地平線上

【生物】蠍。天蠍宮の星東の空に あらはれしをいふ

七—九【夜は】夜の八時半過。春分の頃の夜の半即午後六時より夜半までを昇(のぼり)とし その他を降(くだり)とすれば昇の二歩を終ふるは 午後八時なり、第三步翼を下に曲ぐるは 八時と九時の間も既に半を過ぎたるなり

十—十二【アダモの】肉體の係累あるにより

【五者】ダンテ、ヸルジリオ、ソルデルロ、ニーノ、コルラード

十三—八【憂】化して燕となれるヒロメラがトラーチア王 テレオの辱をうけし昔の悲を訴ふるなり(淨、十七ノ十九—廿一註參照)

【時】曙(地、廿六の七—十二註參照)

廿二—四【ところ】フリージアのイーダ山。

ガニメーデはトロイア王トロオの子にして世にたぐひなき美男子なり、かつてその朋輩とイーダ山上に狩す、ジオヹ神一羽の鷲をおくりて之をさらはせ天にとゞめて神々に奉仕せしむ（神話）

廿五—七【こゝに】イーダ山に

廿八—卅【火】火炎界。中古の學說に空氣を圍繞する火、空氣と月天の間にあり

卅四—九　キロネはアキルレをはぐゝめるチエンタウロなり（地、十二の七十一七十二參照）アキルレの母テーチトロイアの難をおそれて我子をキロネより奪ひその眠れる間に之をエーゼオ海中の一島シロ（或はスキロ）に移せり（神話）、眠覺めしアキルレのおどろきあやしめるさまスターチオの「アキルレの歌」一の二百四十七以下にいづといふ

【希臘人】ウリツセとヂオメーデ（地、廿六の六十一—三註參照）

四十三—五【慰むる者】ギルジリオ

【日は】四月十一日の午前八時頃

五十二—四【汝の中に】汝の肉體の中に

五十五—七【ルーチア】神恩の光（地、二の九十七—九註參照）

五十八—六十【魂】原文 forme 肉體を形成するものゝ義（地、廿七の七十三參照）

六十一—三【開きたる】岩分るゝとみゆるをいふ（四十九—五十一行並七十三—五行參照）

七十—七十二【技】詩材にふさはしき作詩の技巧

七十六—八【門守】門を守る天使は僧侶を代表す、懺悔を聞きて人を淨めの途に就かしむればなり

八十二—四【目を擧ぐれども】かの白刄を見んとて

八十五—七【導者】天使は兩詩人の淨火にとゞまるべき魂にあらざるを知り、たゞ何の力に導かれてかしこにいたれるやを問へるなり

【禍を】神恩とまことの改悔によりて人の罪淨めらる、その道によらずして罪を淨めんとする者は自ら禍を招くに等し

九十四—百〇二　註釋者曰。淨火門前の三段は改悔の三要素すなはち心の悔、罪の告白、行の贖の象徵なり、第一の段即最下方にあるものは汚なき心に寫して己が姿を見己が眞狀を知るを表示す、第二の段は色の黑きによりて心の暗き影を表示し縱横の龜裂によりて罪の告白能く心の拗執に勝つを表示す、第三の段即最上方にあるものはその赤色によりて、改悔を行に顯はし神意を滿さんとする心の愛燃ゆるばかりなるを表示すと

【ベルソ】地、五の八十八—九十註參照

百〇三—五【金剛石】神意によりて定まれる懺悔の僧の立場の堅固なるを表はす

百〇九—十一【胸を】路加傳十八の十三に稅吏神前に罪を悔いて己が胸をうちしことといづ

百十二—四【七のP】淨火の七界に淨めらるべき七の罪（Peccati）のしるし。たとひ罪の行を赦さるともその行の本なる邪念を心に宿すときは人天堂に入ること能はず

百十五—七　註釋者曰。灰色は懺悔を聞く僧が謙遜の心をもてその任務を果すを表はすと

【二の鑰】天國の鑰（馬太傳十六の十九）

百廿一—六　金の鑰は人の罪を釋くことをうる僧侶の權能の象徵にて銀の鑰は改悔者の眞の狀態を知悉し、その適不適を判ずる僧侶の技能の象徵なり、僧侶もしその一に於て備はらざるところあれば救の門ひらかるゝことなし

【價貴し】僧侶基督の血によりてはじめてかの權能をうけたればなり

【纈を解す】罪ある者の罪と心の狀態とを審議してその罪を釋くべきや否やを定むるなり

百廿七—九【ピエートロ】ピエートロ鑰を基督よりうけてふかして天使に托せるなり（地、十九の九十二參照）

百卅—卅二【後方を】罪に歸るものは神の恩寵を失ふ（路加傳九の六十二及馬太傳十二の四十三—五參照）

百卅六—八【メテルロ】ルーチオ・チエチリオ・メテルロ。羅馬の保民官なり、チエーザレ

（シーザー）がタルペイア岩と稱する岩山（羅馬にあり）より羅馬の寶物を奪ひ去らんとせし時之を守れるメテルロ爭ひ止めしかども及ばず、轟然の響とともに堂宇の藏の戸開かれきといふ

【痔す】寶物を失へるをいふ

百卅九—四十一【最初の響】門内に入りて聞ける最初の響卽歌

【調にまじれる聲】歌謠の抑揚にまじりて歌詞のきこゆるをいふ

【テー・デウム・ラウダームス】*Te Deum laudamus*（神よ、我等汝を讃美す）有名なる羅典聖歌の一

百四十二—五【詞】歌詞。歌詞のあきらかにきこゆることゝ器聲に壓せられてきこえざることゝあるなり

第十曲

詩人等淨火の門より岩間の小徑を登りゆきて山をめぐれる一帶の平地卽淨火の第一圈にいたり山側なる大理石の上に彫り刻まれし謙遜の例を見また石を負ひて傲慢の罪を淨むる一群の靈にあふ

一—三【魂の惡き愛】ダンテ思へらく、善惡の行爲すべて愛より出づ（淨、十七の百〇三—五參照）、愛正しければ善行を生み正しからざれば惡業を生む、ゝかるに人多くは惡に傾むくがゆゑに淨火門内に入りて罪を淨むる者稀なり

四—六【我若し】後を顧みたらんには悔ゆとも及ばざりしなるべし（淨、九の百卅二參照）

七—九【紆行りて】原文、動きて。石の動くをいへるにあらずして路の紆曲するをいへるなり

十—十二　路狹ければ側面の岩の路を歷して行手を妨ぐることなき處をえらぶなり

十三—五【月】月、床に歸るとはその西に沒するをいふ、滿月より五日目の月（地、廿の百廿七參照）にて

その入るは午前九時過なるべし

十六—八【針眼】岩間の狹路

【後方に】山後方にかたよりて前方に平地（卽淨火の圈）を殘せるところ

廿二—四　圈の外側と内側の間卽幅は人の身長の三倍なり

廿五—七【臺】cornice　圓柱の上部の意より轉じて淨火の圈の意に用ゐらる

廿八—卅【垂直にして登るあたはざる】Che, diritta（=essendo diritta quasi a perpendicolo）di salita aveva manco 異本, Che dritto（=possibilita）di, etc. 登るすべなき

卅一—三【ポリクレート】有名なる希臘の彫刻家（前五世紀）

卅四—四十五　七罪に對する七德の諸例の中第一例をすべて聖母の事蹟より引けり、第一圈にては聖母の謙遜を德の第一例とす

【天使】ガブリエーレ（路加傳一の廿六以下）救世主の出現を告げ知らせんため天使ガブリエーレ神より遣はされて聖母マリアの許に來れるさまを表はせり、基督の降誕によりて神人相和し始祖アダモ罪を犯せしよりこの方閉ぢて人の入る能はざりし天開け人はその淚を流して久しく求めしものをえたり

【幸あれ】*Ave*　ガブリエーレがマリアにのべし會釋の詞（路加傳一の廿八）

【女】マリア。尊き愛は人間に對する神の愛

【神の婢を見よ】マリアの天使にいへる詞（路加傳一の卅八）

四十六—八【人の心臟のある方】左方

四十九—五十一【後方】聖母の像よりなは右に當る方卽ヴィルジリオのゐたる方

五十五—六十九　第二の例としてイズラエレ王ダヴィーデの謙遜を擧ぐ

【聖なる匱】神がモーゼに命じて作らせたまひし契約の匱（出埃及記廿五の十以下）、ダヴィーデ之をゼルサレムに移さんとてアビナダブの家より曳出せり（撒母耳後書六の一以下）

【人この事により】ウツザが神の命なきに手を契約の匱に觸れ、神罰をうけて死せること（撒母耳後書六の六―七）を思ひ

【七の組】羅典語譯の聖書に *septem chori* とあるによれり

【一に否と】民の歌をうたふさま眞に迫れば耳は彼等うたはずといへど目は否彼等歌ふといふ

【目と鼻】目は香ありといひ鼻はこれなしといふ

【聖歌の作者】詩篇の詩人、王ダギーデ

【衣ひき褰げ】撒母耳後書六の廿參照

【器】神の匱

【王者に餘り】身もあらはに亂舞せること王者にふさはしき振舞にあらず（足らず）、されどこれ皆謙遜の念より出たる事なればむしろ世の王者にまさる（餘る）

【ミコル】サウルの女にしてダギーデの妃たりし者。王宮の窓より王の群集にまじりて躍り狂ふ姿を見、之を侮どり且悲めること聖書にいづ（撒母耳後書六の十六及廿）

七十三―九十六　第三の例は皇帝トライアーノの物語なり、此物語はヂオネ・カツシオの話說よりいでゝ中古廣く世に行はれきといふ

【グレゴーリオ】傳說に曰。皇帝トライアーノ（五六―一一七年）の死後法王グレゴーリオ第一世その魂の救はれんことを神に祈りたれば皇帝此祈のために地獄の苦を脫して天堂に入るをえたりと。一說には皇帝地獄より再世に歸り洗禮を受くるにいたれりともいふ（天、廿の百〇六―八參照）

【勝利】その祈によりてトライアーノの魂を救ひ出せること即地獄に對する勝利

【鷲】羅馬の軍旗として黃地に縫とれる鷲

【歸るまで】戰終りて

【新しき物】神は時間に超越す、志かして萬物は皆神の顯現なり、故に神には新しき物あることなし

【奇し】かく複雜なる情の變化をあらはすは世の彫刻家の爲しあたはざるところなり

百―百〇二【こなた】左

【民】傲慢の罪を淨むる者。此罪は七大罪の中最重き罪なれば最低き處に淨めらる

百〇三―五　或は「その好む習なる奇（めづら）しき物をみんとて眺むることにのみ凝れるわが目も、たゞちに彼の方にむかへり」

百〇六―八　罪を淨むる者の苦甚大なるを聞きて心臆し、悔改の道を離るゝは非也

百〇九―十一　苦の大なるをのみ思はずして後の福をおもへ、またいかに惡き場合にても最後の審判の日到ればその苛責止むをおもへ

百十五―七【我目も】はじめは人の姿なるや否やを判じえざりしなり

百十八―廿【石】罪の性質に應じて罰を異にすること地獄に於けるに同じ、世に自ら高うせる者今大石を負ふて地にかゞむ

【なやむ】*si picchia*（打たるゝ、自ら打つ）註釋者多くはこれを罪を悔いて己が胸をうつ意に解すれど大石を負ふて低くかゞめる者にふさはしからざるに似たり

百廿四―六【靈體の蝶】*l'angelica farfalla*（天使の如き蝶）人の魂。蟲の羽化して飛ぶごとく、我等の魂肉體をはなれ己が罪をかくさずしてゆいて審判をうくるなり

百廿七―九　世に住む人の完全ならざるをいひてその高慢を誡めしなり

百卅―卅二【肱木】*mensola* 壁より凸出して梁の類を支ふるもの、往々人物の彫像を用ゐこれをしてその上にあるものを支ふるごとく見えしむ

第十一曲

第二圈にいたらんため詩人等道をかの一群の靈に問ひ、その一オムベルト・アルドブランデスキの答をきゝて彼等と共に右に向ふ、グツビオのオデリジまたかの群の中にありダンテを認めて之と語りかつ之にプロヹンツアー

ノ・サルヴァーニの事を告ぐ

一—三　一行より廿四行までは傲慢の罪を淨むる魂の祈にて馬太傳六の九以下及路加傳十一の二以下にみゆる主の祈を敷衍せるもの

【限らるゝ】神の天にいますは空間の制限によりてそのいますところ定まれるがゆゑにあらず、たゞ最初の被造物即ち諸天及天使を愛したまふこと特に深きによりてなり

四—六【息】vapore　神の靈（みたま）のはたらき萬物に及ぶをいふ

七—九【爾國の平和】天上の福

十—十二　人その私心を棄てゝよく神意に服從すること天使のごとくなるべし

【オザンナ】Osanna　神を讃美する語（馬太傳廿一の九）

十三—五【マンナ】manna　糧。昔イズラエレの民が亞剌比亞の曠野にて食せるものにて（出埃及記十六の十三以下）こゝにては神の恩惠を指す

【曠野】マンナに因みて淨火を指せり。神恩によらざれば人、罪を淨むるあたはず

十六—八【功德】我等の功德微少にして罪を贖ふにたらざれば

十九—廿一【敵】惡魔

廿二—四　我等淨火門内にある者は惡の誘惑にあふことなければこの最後の祈は我等のためにあらずして世人のためなり（淨、八の十九—廿一註參照）

廿五—七【旅】淨めの旅

【夢に】人魘（おそ）はれて恰も重荷に壓せらるゝ如く感ずるをいふ

廿八—卅【等しからざる】石の輕重により

【濃霧】誇の氣

【臺】圈（淨、十の廿五—七註參照）

卅一—三【良根】神恩。神は世に住む善人の祈を受納したまふ（淨、四の百卅三—五參照）

【こゝに】世に

卅四—六【諸の星の輪】諸天

卅七—九　以下四十五行までヸルジリオの詞

【正義と慈悲】神の

四十—四十二【階】第一圈と第二圈の間の

【徑】第一圈より第二圈に通ずる狹路

四十三—五【アダモ】淨、九の十—十二參照

五十八—六十三【我】オムベルト・アルドブランデスキ。サンタヒオラの伯爵「アルドブランデスキ」家（淨、六の百〇九—十一註參照）の者、「ギベルリニ」黨に屬し屢シエーナと爭へるため千二百五十九年シエーナ人刺客を遣はして之を殺さしむといふ

【ラチオの者】伊太利人

【古き血】舊家なること

【母の同じ】人皆地（或曰エーヷと）を母とす

六十四—六【カムパニアチーコ】オムブロネの溪なる一丘上の城にて「アルドブランデスキ」家の所有なり、オムベルトこゝに殺さる

七十—七十二【生者】生前傲慢にして罪を淨めざりしかば死後この罪を贖はざるをえず

七十三—五【垂れ】ダンテ自ら省みて傲慢の罪を恐れしなり

七十九—八十一【グッビオ】マルケにあり

【色彩】alluminare（Fr. enluminer）色彩を用ゐて書籍の裝飾等をなす技

【オデリジ】グッビオの色彩畫家、千二百九十九年羅馬に死す

八十二—四【フランコ】ボローニアの色彩畫家、十三世紀の末より世に知らる

【一部】我はたゞ先輩として譽の一部を分つのみ。或曰、オデリジはフランコの師なりきと

八十八—九十【もし罪を】我若し在世の間に悔改むることなかりしならば今猶淨火の門内に入るをえざりしなるべし

九十一—三【衰へる世】先輩を凌駕する人の出でざる世

【その頂の】人の榮の時めく間いつまでか續かむ

九十四—六【チマーブエ】ジョヷンニ・チマーブエ。有名なるヒレンツエの畫家（一二四〇年—一三〇二年頃）

【ジョット】有名なるヒレンツエの畫家。千二

百六十六年ヒレンツェの附近なる一小村に生れ千三百三十七年ヒレンツェに死す、ダンテの親友なりきといふ

九十七―九【一のグイード】グイード・カヴァルカンチ(地、十の五十八―六十註參照)

【他の グイード】グイード・グイニツエルリ。ボローニアの詩人(淨、廿六の九十―一一三註參照)

【巣より逐ふ者】ダンテがかの二詩人を凌駕するを暗示したりとの說あり、されど殊更に或一人を指せるにあらずしてたゞ一般に榮枯盛衰の定めなきをいへりとの說穩當なるに似たり

百〇三―八　たとひ老いて後死すとも未だ千年經ざるまに世に忘れられ踈んぜられて稚き時に死すると異なるなきにいたらむ

【パッポ、ヂンヂ】pappo (=pane), dindi (=denari) 小兒の語、邦語にて飯(まんま)、錢(ぜぜ)といふにあたる。パッポ、ヂンヂを棄つるは人生長して小兒の言語を用ゐざるにいたるをいふ

【いとおそくめぐる天】原文、天にいとおそくめぐる圈。恒星の天(第八天)を指す、當時の天文學によればその一廻轉に三萬六千年を要すといふ

百〇九―十四【ゆく者】プロヴェンツァーノ・サルヴァーニ。シエーナなる「ギベルリニ」黨の首領として其勢力あまねくトスカナに及ぶ、千二百六十年モンタペルチの戰(地、十の八十五―七註參照)の際大にその黨與のために力め、翌六十一年モンタプルチアーノに「ポデスタ」たり、千二百六十九年コルレの戰(淨、十三の百十五―七註參照)に敗れ、虜はれて首斬らる

【亡ぼされし】モンタペルチの戰にヒレンツェ人(「グエルヒ」黨に屬する)の大敗せるをいふ

百十五―七　太陽はその光熱によりて地に草を生ぜしめ後之を枯す、斯の如く時は人を榮えしめ後その榮を奪ふ

百廿四―六【かくのごとく】小股に(百〇九行)、荷重ければなり

【かゝる金錢】かゝる苦によりてその罪を淨む

百廿七―卅二【低き處】門外(淨、四の百廿七以下參照)

【善き祈】善人の祈

【かく來る】死後直ちに門內に來る

百卅三―八　古註曰。ターリアコッツォの戰(地、廿八の十三―八並註參照)にプロヴェンツァーノの一友某コルラヂーノのためにカルロと戰ひ、とらはれて獄に下さる、此時プロヴェンツァーノ、一萬「ヒオリーノ」(金貨)を以てその命を贖ふをうるを聞き、シエーナ市中央の「ピアッツァ」(ピアッツァ・デル・カムポ)に座を設け自ら人の憐を乞ふ、シエーナ人尊大彼がごときもの今身を低うして人の助を求むるを見てその志をあはれみ各分に應じて施與す、獄中の友これによりて救はるゝことをえたりと

【震はしむ】人の憐を乞ふのつらきに身震ふなり

百卅九―四十一【暗き】憐を乞ふくるしさは經驗によらざれば知り難し

【隣人】ヒレンツェ人。汝ヒレンツェ人のために鄉土を逐はれ自ら人の憐を乞ひ自ら身を震はすに及びてはじめてよくわが詞を解せむ

百四十二【幽閉を】彼が門外に長く止まらずして早くこの處に來るをえしはこの愛この謙遜の行爲ありたるによりてなり

第十二曲

ダンテギルジリオの誡に從ひオデリジの魂とわかれて進み路上に刻める慢心の罰の例を見かくて階(きざはし)のほとりにいたればひとりの天使その額上なる七字の一を消し之を勵まして第二圈にむかはしむ

一―三【魂】オデリジの

四―六【人各】人皆いそぎて改悔の途に進むべきをいへり

七―九　我は步を早めんため、自然の要求に從て身を直くせるもわが心は傲慢のおそるべきものなるを知りてもとのごとく低く屈めり

十六―八【平地の墓】tombe terragne 高く築き上げたる墓に對していへり、表を上に向けし大理石の墓石などに生前の姿を刻して死後の記念となすこと中古世に行はるといふ

十九―廿一 死者の追憶を拍車にたとへしなり

廿五―七 傲慢の罰の第一例として魔王ルチーフエロを擧ぐ

【皆く】地、卅四の十六―八參照

【電光】我は電光の如くサタナの天より墜るを見たり（路加傳十の十八）

廿五行より卅六行に亘る四聯は皆 Vedea（我は見たり）に、次の四聯は皆 O（あゝ）に、次の四聯は皆 Mostrava（示せり）にはじまり、其又次の一聯の中第一行は Vedea に第二行は O に第三行は Mostrava にはじまる

廿八―卅 第二の例はブリアレオなり、神話にいづる巨人の一にして巨人等が神々と爭へる時ジオヱの電光の矢に射られて死せるもの（地、卅一の九十七―九並註參照）

卅一―三 第三例。神々と戰ひて死せる巨人等

彫像にはアポルロ、パルラーデ（即女神ミネルヷ）、マルテの三神が其父ジオヱの傍にありてフレグラの戰（地、十四の五十五―六十參照）に死せる巨人等の骸（むくろ）を見る狀をあらはせり

【チムブレオ】アポルロ。トロアデ（トロイア地方の名）のチムブラに此神を祭れる宮あるよりかく呼べり

卅四―六 第四例は聖書よりいづ、巨人ネムブロット（地、卅一の七十六―八註參照）センナールの野にて高塔を築き其頂を天に達せしめんとして神怒に觸る（創世記十一の一以下）

【惑へる】言語亂れて通ぜざれば

【建物】原文、勞苦。バーベレの高塔を指す

卅七―九 第五例は神話にいづるニオベの物語なり、ニオベはタンターロの女、テーベ王アムヒオネの妻となりて七男七女を生みその血統、富貴、美貌及子女の多きに誇りて己をラートナ神にまされりとしテーベ人の此神に供物を捧ぐるを責めしかば、ラートナ其二子アポルロとヂアーナを遣はしてニオベの子女を悉く殺さしむ、ニオベは悲歎のあまり化して石となれり（オヰヂオの「メタモルフオシ」六の百四十六以下參照）

四十―四十二 第六例。イズラエレ王サウル、ヒリステ人と戰ひて利あらず、ギルボア山上に（パレスチーナにあり）自刄して死す（撒母耳前書卅一の一以下）

【雨露】サウルの死を悼めるダギーデの哀歌に曰く。ギルボアの山々よ、願くは汝等の上に露も雨も降らざれ（撒母耳後書一の廿一）

四十三―五 第七例は神話にいづるアラーニエの物語なり（地、十七の十六―廿四註參照）

【截餘】ミネルヷは己が技（わざ）のアラーニエに及ばざるをみて怒り織女の織りたる布帛を斷てり

四十六―八 第八例。ロボアムはイズラエレ王サロモネの子なり、父の死後その民之に苛政の苦を訴ふ、然るにロボアム少年等の言に從ひ民の請を退けしかば民背きて王の稅吏アドラムを殺せり、王即いそぎ車に乘りてゼルサレムに逃ぐ（列王紀略上十二の一以下）

【おびやかす】イズラエレの民を

四十九―五十一 第九例として神話にいづるエリヒレを擧ぐ

彫像にはエリヒレが其子アルメオネに殺さるゝ狀をあらはせり

希臘七王の一なるアンヒラーオ、己がテーベの役に死する（地、廿の卅一―六註參照）をト知しその所在をくらましたりしに妻エリヒレ、ヴルカーノ神の作なる金の頸飾を得んためポリニチエに誘はれて夫の隱家を之に告げたり、アルメオネ即母を殺して父の仇を報ゆ

【不吉なる】之を持つ者必ず禍に遭ふといはるればなり

五十二―四 第十例。センナケリブ、アッシーリアの王なり、倨傲にして眞の神を侮りしが嘗て己の神ニスロクを宮の中にて拜せるとき其

二子アドラムメレクとサレゼル之を殺して逃げ去れり(列王紀略下十九の卅六―七及以賽亞書卅七の卅七―八)

五十五―七　第十一例には波斯亞王チロをあげたり

「マッサゼチ」人の女王タミーリ激戰の後チロを敗り其屍を求めて頭を截り取り之を血をもて滿たせし革嚢の中に入れ、血に渇ける者よ今血に飽けといへりといふ古の史家の紀事によれり

五十八―六十　第十二例。アッシーリアの大將オロフェルネ、ジュデーアのベツーリアといへる町を圍めるとき、寡婦ジュデッタその鄕土を救はんため敵陣に赴むき謀をもてオロフェルネを殺せり、アッシーリア人潰走す(「ジュデッタ」書十一の一以下)

【遺物】首なきオロフェルネの軀

六十一―三　第十三例。トロイア(地、一の七十三―五註及地、卅の十三―五參照)

【イリオン】トロイアの異名。或曰、トロイアは町、イリオンは城の名と

六十四―六【陰と線】線は像の輪廓をいひ、陰は高低をあらはす輪廓內の變化をいふ

【畫筆】stile 鉛錫等にて作れる筆にて最初の輪廓をあらはすに用ゐるもの

六十七―九【面見し】原文、事實を見し。實際にそれ〳〵の事柄を目擊せるをいふ

七十―七十二【エーヴの子等】人類。ダンテは世人が古來慢心の罰せられたる多くの例あるをおもはずして相率ゐて此罪に陷るを嘲けれるなり

七十三―五　思へるよりも時の早く過ぎたるをいふ

【繫はなれぬ】彫像にのみ心奪はれて他の事を思ふの餘地なき(淨、四の一以下參照)

【さらに多く】詩人等の步おそければ

七十九―八十一【第六の侍婢】時を晝の侍女といへり、故に今は晝の第六時の終卽正午なり

九十一―三【今より後】詩の罪除かれたれば(百十八行以下參照)

九十四―六　ダンテの叫か天使の詞かあきらかならず

【報知】天使の言を指す、之を聞く者の罕なるは謙遜の人の少なきなり

【高く】天に昇らんために生れし人類よ、汝等誇の誘にあひ世の榮光をのみ求めて地に墜るは何故ぞ

九十七―九【額を打ち】七のP(淨、九の百十二)の一を消せるなり(百卅三―五行參照)

百―百〇八　第一圈より第二圈に到る徑(みち)の階(きざはし)をヒレンツェ市外の一丘モンテ・アルレ・クローチ(Monte alle Croci)の階と比較せるなり

【ルバコンテ】アルノ河に架せる橋の名、今は改めて「ポンテ・アルレ・グラーチェ」といふ

【邑】ヒレンツェ。非政を嘲けりて反語を用ゐしなり

【寺】「サン・ミニアート・ア・モンテ」(San Miniato a Monte)といふ、モンテ・アルレ・クローチの上にあり

【右にあたり】山門をくぐりて登りゆけばゑばらくにして路二にわかる、こゝにゑるせし階はそのうちの右の路にあり

【文書と樽板】當時ヒレンツェに行はれし二大詐僞をあぐ

千二百九十九年ヒレンツェの「ポデスタ」モンヒオリートなる者不正の行爲ありて免官せられし時その自白の中にメッセル、ニッコラ・アッチャイオリのため虛僞の陳述を人になさしめきとの一事あり、ニッコラ聞きて、その發覺を防がんと欲しメッセル、バルド・ダグリオ子(天、十六の五十五―七參照)と共謀して市の記錄の中より己に不利なる事項を抹殺せり

また此頃鹽の出納役なりし「キアラモンテージ」家の一人、市より鹽を受取る時は普通の量器を用ゐ、之を市民に賣渡す時は樽板一枚を取去りて小さくせるものを用ゐ、以て不正の利を貪れりといふ

【安全なりし世に】かゝる惡事の行はれざりし

昔

【右にも左にも】この階のモンテ・アルレ・クローチの階と異なるところは、その甚狹くして登るとき左右の石身に觸るゝにあり

百〇九—十一【聲】voci 此語も Cantaron（歌へり）も共に複數なれば歌へる者の何なるやにつきては異説多し、但他の多くの場合と同じく之を以てPの一を消せし天使なりとし noci を parole（詞）の義に解し又は複數を單數の意に用ゐしものと解する人あり（ムーア「考例」四百〇六頁參照）

【靈の貧しき者】馬太傳五の三。一の罪淨まれば天使その額より一のPを消しかつ基督山上の垂訓の始なる九福の一句を歌ふを例とす、讀者その句と淨めらるゝ罪と相關聯するを思ふべし

百十五—七【平地】第一圈の

百廿一—三【消ゆるばかりに】人慢心によりて神を離れ、神を離るゝによりて諸惡を行ふ、故に慢心は即諸惡の根源なり（箴言廿一の四參照）慢心滅すれば他の罪亦皆消ゆるに近し

百廿七—卅二 頭に羽毛などのつきたるを知らずして歩む者、人の笑ふをきゝて はじめて異しと思ひ、手をもてさぐり求むる類

百卅三—五【鑰を持つもの】淨火の門を守る天使（淨、九の百十二—四）

第十三曲

詩人等第二圈即嫉妬の罪の淨めらるゝところにいたれば愛の例をあぐる聲きこゆ、また毛の衣を着瞼を縫はれて岩石の邊に座せる多くの魂あり、その一シエーナのサピーア己が境遇をダンテに告ぐ

一—三【截りとられ】山の側面きりひらかれて圓形の路を成すをいふ

四—六【弧線】第二圈は第一圈よりも小さければ圈の弧線の彎曲すること從て急なり

七—九【象も文も】或は、陰も線も。石面に彫像なきをいふ

十—十二【選ぶこと】路を

十三—五【身を】原文、右脇を動の中心として身の左方をめぐらし。日右にありたれば身をめぐらして右にむかへるなり

十六—八【光】比喩の意にては神恩の光

十九—廿一【故ありて】罪のために

廿五—七【愛の食卓】愛は嫉妬と相反す、愛の食卓に招くは愛の例を告げ示して罪を淨むる魂に愛心を養ふを求むるなり

此圈の魂は其瞼を縫はれて（七十一—七十二行）物を視る能はざるがゆゑに彫像によらず聲によりて敎へらる

廿八—卅 聖母マリアの事蹟を第一例とす。カナの婚禮に招かれしとき酒盡きしかば マリア人々を憐みて基督にむかひ、彼等に酒なしといふ、基督即ち水を變じて酒としたまふ（約翰傳二の一以下）

卅一—三 第二例としてピラーデをあぐ。神話に曰く、アガメンノネ（トロイアの役にて名高き希臘軍の總大將）の子オレステフオチーデ王ストロヒオの子ピラーデと水魚の交ありき、アガメンノネを殺せしエージストさらに オレステを殺さんとせしときピラーデ叫びて我こそ オレステなれといひ其衣に代りて死せんとせりと

卅四—六 基督の敎訓を第三例とす（馬太傳五の四十四）

卅七—九【鞭の紐】善に導く方法即敎訓の例

四十—四十二【銜は】嫉妬の罪を避けしむる方法は之と異なる例 即嫉妬の罰の例を示して此罪を恐れしむるにあり

鞭は魂をむちうち勵まして善に向はしむる積極的敎訓をいひ銜は魂を抑制して惡に遠ざからしむる消極的敎訓をいふ、前者には德の例をあげ後者には罪の罰の例をあぐ、淨火の七圈各この二者を備ふ

【赦の徑】第二圈と第三圈の間にある徑、この下にいたれば 天使額上よりP字の一を消去るなり、嫉妬の罰は淨十四の百卅三以下にいづ

四十三—五【かなたを】原文、空氣を透して

四十九—五十一【聖徒よと喚はる】或は、聖

徒をよばゝる。聖母をはじめ諸天使諸聖徒の助を求むる祈の歌（Litanie de' Santi）をうたへるなり

五十八―六十【毛織】cilicio 馬の毛等を結びあはせて造れる粗き衣にて昔隠者之を肌に着けそのたえず身を刺すを忍びて一種の行となせりといふ

六十一―六【赦罪の日】寺院に特赦の式ある日近隣の人々赦罪を乞はんため そこに集まるを例とす、かゝる折を待ちて盲目の乞丐等また寺前に集まり憐れなる言葉をいだし あはれなる姿を示してかの人々に物乞はんとするなり

七十一―七十二 目を大にして他人の境遇をうかゞふは嫉妬の人の常なれば目を縫ひふさぎてこの罪を矯む

【鷹】馴れざる鷹は人を見ればたえず恐れて逃げんとするがゆゑに之を馴さんため始め糸をもてその瞼を縫ひ合はす習ありきといふ

七十九―八十一 路の右方即圏の外側は第一圏に接する斷崖あるところにてその緣平らかなればギルジリオはダンテの墜落を防ぎかつは圏の狀況をまたしく之に見せしめんとて自ら右側を行けるなり

八十五―七【高き光】神

八十八―九十 願くは神恩によりて汝等の心の汚穢洗ひ去られ その記憶だにあとに殘らざるにいたらんことを

【これを】良心を

九十一―三【ラチオ人】伊太利人

【益あらむ】生者に請ひて その者のために祈らしむべければ

九十四―六【眞の都】天の都（以弗所書二の十九參照）

【旅客】天は鄕土、人は旅客なり

九十七―九【かなたに】かの魂に聞えしめんため聲を高くして語れる（百〇三―五行）をいふ

百〇三―五【登らむ】天に

百〇九―十一【サピーア】シエーナの貴婦人、家系不明

【智慧なく】Savia non fui 名の Sapia と savia（賢こき）とを通はして文飾となせるなり

百十二―四【はや降と】われ三十五歳を過ぎしとき（地、一の一―三註參照）

百十五―七【コルレ】エルザの溪の一丘上にある町の名、千二百六十九年シエーナ及其他の「ギベルリニ」黨とヒレンツェ人とこゝに戰ひて敗れシエーナ軍の主將プロヴェンツァーノ・サルヴァーニ（淨、十一の百廿一）虜はれて殺さる

【好みたまへるもの】シエーナ軍の敗北。サピーアは極めて嫉妬深き女なればその同鄕人特には當時權勢並なきプロヴェンツァーノをそねみてその敗戰を希へるなるべしといふ

百廿一―三【メルロ】鳥の名、黑鶫の類 註釋者曰。こは昔の人の話柄に、メルロは雪の頃身を縮めて元氣なけれど空少しく晴るゝをみれば直に勢を得て、冬すでに過ぐ、主よ我また汝を恐れずといふといへるによれるなりと

【恐れず】わが願すでに成就したれば

百廿四―九【ピエートロ・ペッチナーニオ】ピエートロ・ダ・カムピ、幼少の頃よりシエーナに住み 櫛を商へるをもてペッチナーニオ（櫛商）の異名あり、その行極めて清廉にして善行多し、千二百八十九年シエーナに死す、市民公費を以てその墓を建つといふ

【負債は】我はこゝに來りてたとひ一部なりともわが罪を贖ひ終ることあたはず、臨終に悔改めし魂の例に從ひ今猶淨火の門外に止まれるなるべし

百卅三―五 我もいつかこのところに來りて嫉の罪を淨めんために汝等の如く目を縫はるゝことあらむ、されど わがこゝに止まる間は短かゝるべし

百卅六―八【この下なる】第一圏の。ダンテ自から誇の罪をおそるゝこと嫉の罪より甚しきをいへるなり

【かしこの重荷】かしこに罪を淨むる者の背に

する石を我今みづから負ふ心地す

百卅九―四十一【かなたに】原文、下に（即第一圈に）

サピーアはダンテが淨火の各圈をめぐりゆく者なるを知らず、再第一圈に歸りて罪を淨むる者なりとおもへるなり

百四十二―四【選ばれし】選ばれて福を享くべき（淨、三の七十三―五參照）

【動かす】汝の知人に請ひて汝のために祈らしめんとて

百四十八―五十【求むるもの】天上の福

【わが名を立てよ】彼等我を地獄に罰せらるとおもへば實を告げて

百五十一―三【タラモネ】トスカナの南海岸にある一小港。シエーナ人之を以て商業及軍事上の要港となさんと欲し久しく望を屬しゐたるが千三百〇三年にいたりて遂に之を買取り、その地勢惡くして効果少なきにかゝはらず多くの資本と勞力とを之がために費やせるなり

【ヂアーナ】シエーナ市及其附近の地下にありと信ぜられし川の名。シエーナ市水に乏しければ市民費を惜まずして此水を得んとせりといふ

百五十四　註釋者曰。タラモネの築港工事を監督せる海軍の將士等、處の空氣あしきため病みて死せるをいへるなりと、されど異說多くして意義分明ならず

【危險を顧みざるは】異本、失ふところ多きは

第十四曲

かの魂の一グイード・デル・ヅーカ、アルノ沿岸の諸市及ローマニアの腐敗を慨く、また壓ありて嫉妬の罰せられし例を擧ぐ

一―三　グイード（七十九―八十一行註參照）の詞

四―六　リニエーリ（八十八―九十行註參照）の詞

十―十五【一者】グイード

【汝の恩惠】汝が神よりうくる恩惠即生きながら冥界をめぐるをうること

十六―八【小川】アルノ。紆曲してトスカナの中部を流る、長さ百廿哩

【ファルテロナ】アペンニノ山脈中の一高嶺

廿八―卅【負債を償ひて】答へて。問はるれば答ふる義務あるがゆゑにかくいへり、グイードはリニエーリの問に對してその義務を果せるなり

【溪の名】川の名といふに同じ、溪は川に因みてアルノの溪とよばる

卅一―三【ペロロ】シチーリア島東端の岬。シチーリアはもと伊太利本土の一部なりしが地勢の變化によりて之と分離するにいたれりとの說に從ひペロロを斷たれし云々といへるなり（「エーネイデ」三の四百十四以下參照）

【高山】アペンニノ連山

【水豐なる】pregno（孕める）或は支脈多き意に解する人あり

卅四―六　此一聯、海にいたるまでといふに同じ。天太陽の熱によりて海水を蒸發せしむれば、その蒸發せるもの雨となりて川に入り、川まれこれを海に注ぐ

【その中に流るゝもの】原、己と倶に行く物

四十―四十二【溪】アルノの溪即アルノ沿岸の地

【性を變へ】人たるの性を失ひて獸の如くなり

【チルチエ】名高き妖女（地、廿六の八十八―九十三註參照）人を獸に變ぜしむ（「エーネイデ」七の十以下參照）

四十三―五【豚】アルノ上流の地カセンチーノ（地、卅の六十四―六參照）の民を指す

【貧しき】水少なき

四十六―八【小犬】Botoli（小さくして善く吠ゆる犬）アレッツオ人を指す

【頷を曲げ】カセンチーノを南に下れるアルノはアレッツオ市を距る三哩の處にいたり忽ち曲折して西に向ふ

四十九―五十一【狼】フィレンツエ人を指す

五十二―四【狐】ピサ人を指す

五十五―七【聞く者】主としてダンテを指す

【眞の靈の】聖靈の敎に從つて わが豫言するところ

五十八―六十【汝の孫】フルチエーリ・ダ・カールボリ。リニエーリの孫、千三百〇二年 ヒレンツエの「ポデスタ」となりて大に白黨を虐ぐ

六十一―三【賣り】黒黨の賄賂をうけて多くの白黨をその敵の手に渡したればなり

六十四―六【血】市民の

【林】ヒレンツエ市

七十一―七十二【魂】リニエーリ

七十六―八【好まざる】廿―廿一行參照

七十九―八十一【グイード・デル・ヅーカ】ブレッチノロ(百十二―四行註參照)の名族の出、十三世紀の人にて「ギベルリニ」黨に屬す、傳不詳

八十五―七【我自ら】我は己が罪によりて此淨めの罰をうく(加拉太書六の八參照)

【侶を】他人とともに頒つあたはざる 世の福に(淨、十五の四十三以下參照)

八十八―九十【リニエーリ】リニエーリ・ダ・カールボリ。フオルリの名族の出、十三世紀の後半の人にて「グエルヒ」黨に屬す

九十一―三【ポーと山と海とレーノの間】ローマニア。北はポー河、南はアペンニノ山脈、東はアドリアチコ海、西はレーノ河をその堺とす(地、廿七の廿八―卅註參照)

【眞と悦に】精神上及處世上に必要なる文武の德

【その血統】「カールボリ」一家

九十四―六【有毒の雜木】敗德の民

九十七―百十一【リーチオ】リーチオ・ダ・ヴァルボナ

リーチオ、アルリーゴ、ピエートロ、グイード等皆ローマニアの名族の出、十三世紀の人々にて仁俠を以て名高かりきといふ

【庶子】父祖の德を繼ぐ能はざるをいふ

【フアッブロ】フアッブロ・デ・ラムベルタッチ。ボローニアの「ギベルリニ」黨(一二五九年死)

【ベルナルデーノ・ヂ・フオスコ】卑賤より身を起しその德によりて フアーエンツア(ローマニア州ラーモネ河畔の町)第一流の 市民となれるもの

【トスカナ人】ダンテを指す

【グイード・ダ・プラータ】プラータは フアーエンツアの附近にある町

【ウゴリーノ・ダッツオ】トスカナ に名高き「ウバルデーニ」家の者にて長く ローマニアに住めりといふ

【フエデリーゴ・チニオーソ】リミニの人

【トラヱルサーリ、アナスタージ】ともに ラヱンナ第一流の家柄なりしが 千三百年の頃殆んど斷絶の悲境にありきといふ

【處】ローマニア

【愛と義氣】或は戀愛のため 或は義俠のため騎士等が多くの冒險を試み 志たしく苦樂を味ひたりしその昔の日を志のぶなり

百十二―四【ブレッチノロ】(今ベルチノロといふ)フオルリとチエゼナの間の町にて 前出グイード及アルリーゴ・マナルヂの郷里なり

【汝の族と多くの民】族はブレッチノロを治めし「マナルヂ」家を指せるか。 スカルタッチニ曰く、こは千二百九十五年「ギベルリニ」黨がブレッチノロより逐はれしをいふと

百十五―廿【バーニアカヷルロ】ラヱンナの西にある町。十三世紀の頃 此町を治めし「マルギチーニ」伯爵家には男子なかりきといふ

【カストロカーロ】モントネの溪にある町

【コーニオ】イモラ附近の町

不德の子孫仁俠の父祖に代りて君たれば惡しといへり

【パガーニ】フアーエンツアの貴族

【鬼】「パガーニ」家の家長マギナルド・パガーニ・ダ・スシナーナ(地、廿七の四十九―五十一參照)

【去る】千三百〇二年に死す

【微】美名

百廿一―三【ウゴリーノ・デ・フアントリーニ】フアーエンツアの人、德を以て 知らる、千

二百八十二年に死し、その二子また相尋で死して家絶ゆ

百廿七―九　かの魂等足音によりてわれらが右にゆくを知り而して何をもいはざるは即我等が方向を誤らざる證據なり、若し誤らば彼等必ず我等に敎ふべければなり

百卅―卅二【聲】見えざる靈の（淨、十三の廿五―七參照）

百卅三―五　嫉妬の罰の第一例としてカイノをあぐ、カイノは嫉のためにその弟アベーレを殺せし者なり（創世記四の三以下）

【およそ我に】神罰をおそれしカイノの詞（創世記四の十）

百卅九―四十一　罰第二例。アグラウロはアテーネ王チェクロペの女なり、その姉妹エルゼがメルクリオ神に愛せらるゝを嫉み、神罰を蒙りて化石す（オヰディオの「メタモルフォシ」二の七百〇八以下）

百四十二―四【これは】此等の例は人の心を抑制して他人の福を嫉むことなからしむるための善き轡なり

百四十五―七【汝等】世人

【敵】惡魔

【銜】罰の例（淨、十三の四十―二註參照）

【呼】德に誘ふもの即德の例。鳥を呼ぶにたとふ（地、三の百十五―七註參照）

百四十八―五十【美しき物】諸星（地、卅四の百卅六―八參照）

百五十一　此故に神は汝等を罰したまふ

第十五曲

詩人等天使の敎に從つて階を踏み幸福の分與を論じつゝ第三圈即忿怒の罪の淨めらるゝところにいたる、ダンテこゝに異象によりて寛容柔和の例をみ後導者と共にすゝみて遂に一圈の黑煙につゝまる

一―六　今見ゆる太陽と地平線との間は日出時の太陽と第三時（午前九時頃）の終の太陽との間に同じ。即此時は日沒より三時間前（午後三時頃）なり

【球】太陽の天。そのつねに迴轉して止まざること稚兒の戯るゝに似たり

【かしこ】淨火

【夕】Vespero　午後三時より日沒迄の間をいふ

【こゝ】伊太利。ダンテの計算に從へば淨火の午後三時はゼルサレムメの午前三時に當り、聖都の西四十五度の位置にある伊太利の夜半にあたる

十―十二【輝】光輝のひときは强くなりてダンテの目を眩めかせしは（額を蔽す）天使の光日光に加はりたればなり

十六―廿一　ダンテは直接に天使より來る光を被はんとて手を目に翳せるもなほ間接の光（即天使よりいでゝ路にあたり反射してダンテを射る光）に堪ふる能はざりし次第を說きあかさんため光線反射の原理をこゝに敍せるなり

【くだるとおなじ】反射角の投射角と相等しきをいふ、此兩角相等しきがゆゑに反射線と垂線の間は投射線と垂線の間に等し

【垂線】原文、石の墜下（cader della pietra）

廿二―四【目は】光を避けんとてギルジリオの方にむかへるをいふ

卅一―三　罪淸まるに從て光を喜ぶこといよいよ深し

卅七―九【慈悲ある者】（馬太傳五の七）慈悲仁愛は嫉妬に反す

【勝者】嫉の罪に勝つ者

四十三―五【ローマニアの魂】グイード・デル・ヅーカ（淨、十四の八十一―七參照）

四十六―八【最大なる罪】嫉（淨、十四の八十二以下參照）

四十九―五十一【處】地上の幸

五十二―四　汝等天上の幸を愛して心をこれに向けしむれば分の減ずる憂なし

【至高き球】エムピレオの天

五十五―七【我等の所有と稱ふる者】幸を享くる者

【かの僧院に】聖徒の心に燃ゆる愛、僧院は天堂を指す（淨、廿六の百廿七―九註參照）

六十四—六【眞の光より】 われ眞を告ぐれども汝さとらず

六十七—九【幸】 神。神が己を愛する者に臨みたまふこと恰も太陽の光が光澤ある物體に臨むごとし

七十—七十二 神は己を愛する者の愛の熱度に應じて幸を與へたまふ、このゆゑに神を愛することいよ〳〵深ければその者のうくる幸またいよ〳〵大なり

七十三—五 天上の幸を愛するもの愈多ければ神の賜ふ幸從て多く彼等の神を愛する愛また從て深し（五十五—七行參照）、ゑかして彼等がおの〳〵自己の幸を他の者に映すこと鏡に似たり

七十九—八十一【五の傷】 天使が劍を以てダンテの額にゑるせし七のPの中の五（淨、九の百十二—五參照）即悔恨の苦によりて淸まる五の罪

【かの二】詩と嫉の

八十二—四【次の圜】 第三圜、忿怒の罪を淨むるところ

【目の】處のさまを見んとの

八十五—九十三 寛容の德の第一例として聖母マリアの事蹟をあぐ。マリアその子耶蘇を見失ひ夫と倶にこれを尋ね求むること三日、漸くにしてそのゼルサレムメの神殿内にあるを知れるも怒らず罵らず、たゞ言葉を和らげて我子よ云々といへること聖書にみゆ（路加傳二の四十一以下）

【多くの人】耶蘇と問答しゐたる教師等（路加傳二の四十六）

九十四—百〇五 第二例としてアテーネの君ピシストラート（前五二七年頃死）の寛容をあぐ。嘗て一青年路にてピシストラートの女に接吻せしかば母怒りて夫に復讐を求めしかども夫之に應ぜざりきといふこと羅馬古代の文人ヴァーレリオ・マッシモの話說集にいづといふ

【之が名に】アテーネの都ははじめその命名に就てネッツーノ、ミネルヴァ二神の間に激しき爭ありしもミネルヴァ（即アテーナ）の勝となりしためかく名けられたりとの傳說によれり（オヸディオの「メタモルフォシ」六の七十以下參照）

百〇六—十四 己を殺すものゝために神の赦を乞へる最初の殉教者ステフアーノをあげて第三例とす（使徒行傳七の五十四以下）

【民】猶太人

【目を天の】目をひらきて天を望み

百十五—七【わが魂】 わが魂己が外なる實在に歸れるとき、換言すればわが魂夢幻の境界を脫して五官の覺醒に歸れるとき

スカルタッチニ曰。ダンテはこゝに客觀と主觀の別を明かにせるなり、彼がその幻の中に見し物は眞（實物）なれどもそは主の眞即己が心の中にある物にて心の外の眞に非ず、されど人には己の外の存在として物を見るの習あれば己の内のみの現象を己の外の現象と見做し主の實を客の實に變へ易し、此故にダンテはその夢心地なりし間己が見もし聞もせることを己の外にて實際に起れること即客の眞客の實なりと思へるなり、而してかく思へることの誤なるをさとれるはその心外物の感觸に歸れる刹那にあり、されど彼がこの誤を僞ならざる誤といへるは、いまだ斯かるとの自覺なく己が前に現はれしもの（こは存在の象にして實在の象にあらねど）を實際に見たりと思ひたればなり、物の現はれしは眞なれども之をまことに彼に見せしめしものはその肉眼にあらずして其心其魂其靈の眼なり

【僞ならざる】主觀の眞なれば

百廿一—三【レーガ】 二三哩

百卅—卅二【泉】 神

【平和の水】寛容の德

百卅三—五 我は肉眼のみをもて物を見る人と異なりてよく物の內部をみるが故に今かくの如く汝に問へるも汝の足の定まらざりし理由を問へるにあらずしてたゞ汝を勵ませしなり

百卅六—八【怠惰】 怠惰のため眠覺めて後もなほ容易に活動せざるもの

百四十二—四【煙】 忿怒の罪を淨むる烟。烟の目を冒して物を見るあたはざらしむるは怒の

智をくらまして是非を辨ぜしめざるに似たり

第十六曲

黑烟につゝまれて忿怒の罪を淨むる魂の一ロムバルヂアのマルコ、ダンテの問に答へて意志の自由と世の腐敗を論ず

一―三【乏しき】眼界狹き

【星】原文、遊星。すべての天體の光をいふ

十三―五【のみ】Pur これをギルジリオの詞とし、汝たゞ我と離れざるやう心せよと讀む人あり

十六―八【神の羔】基督（約翰傳一の廿九）

十九―廿一【アーグヌス・デイー】*Agnus Dei*（神の羔）名高き祈の歌にてその各節此二語にはじまる

神の羔、世の罪を取去りたまふものよ、我等を憐みたまへ

神の羔、世の罪を取去りたまふものよ、我等を憐みたまへ

神の羔、世の罪を取去りたまふものよ、我等に平安を與へたまへ

廿二―四【怒の結を】怒の罪を淨む

廿五―七【いまだ】猶世に生くる者のごとく【月】calendi（各月の第一日）。永遠の世にては時をかく分つことなし

卅一―三【奇しき事】生者にして冥界に旅すること

卅四―六【行くをうる】罪を淨むる者烟の外に出づる能はず、されどその內にては進むも退くも自由なるに似たり

卅七―九【纒布】肉體

四十―四十二【近代に】使徒パオロ以來（地、二の廿八以下參照）

四十六―八【ロムバルヂアの者】Lombardo或曰。ロムバルドは國を指せるにあらず、マルコがヱネーチアの「ロムバルヂ」家の出なればかくいへるなりと

【マルコ】十三世紀の人、傳不詳

【ひとりだに狙ふ人なき】原文、人みな弓を弛べし

四十九―五十一【高き處】天の王宮

五十二―四【死すべし】その苦に堪へずして

五十五―七　この疑（世の腐敗の原因に關する）はさきにグイード・デル・ヅーカより伊太利の罪惡を聞きしとき（淨、十四の卌九以下）既に起れるものなるが今また汝より人類のおしなべて德に遠ざかることを聞き彼此相對比していよ〳〵世の眞相をたしかめ疑從ていよ〳〵深し

【これと連なる事】わがこの疑に關すること即世の腐敗

【こゝにもかしこにも】マルコの言とグイードの言とを指す。ダンテはマルコの言によりてマルコ自らいへることゝグイードのいへることゝの眞なるをかたく信ずるにいたれるなり

六十一―三【或者】或者は世の墮落を星辰（諸天）の人間に及ぼす影響に歸し、或者は之を人間の惡に傾く性情、その自由の意志の濫用に嫁す

六十四―六【汝まことに】汝の無智は汝が世より來り世に屬する者なるを示す

七十―七十二　善惡の應報は自由の意志を豫想す

七十三―五【天は】星辰の影響は人慾の最初の作用に及べどもその作用の全體に及ぶにあらず（星辰以外の影響あり）

七十六―八【天と戰ふ】星辰の人慾に及ぼす影響と戰ふ。自由の意志もし此戰に勝ちて而して後修養を經れば遂には何物の影響をもうけざるにいたる

七十九―八十一　汝等は神の大能の下に屬してしかして自由を失はず、この大能は星辰の力の左右し能はざる理智の魂を汝等に賦與す

八十二―四【明らかに】原文、眞（まこと）の說明者とならむ。spia は穿鑿者の義より轉じて說明者若くは報告者の意に用ゐられしもの

八十五―九十三　創造の初に於ては人の魂無邪氣にして思慮なく たゞ本能に從つて己を樂ます物にむかふ、かくて世の幸を味ふに及び、之に欺かれて以て眞の幸となし たゞ之をのみ追ひ求む

【未だあらざるさきより】人の魂は そのいまだ造られざるさきに既に神の聖意の中に 存在す、神見て之を善しとしたまふ

【導者か銜】皇帝（及法王）か律法もし その愛欲を正しき道に向はしめずば

九十四―六【眞の都の塔】天の王宮の塔即正義

九十七―九【手をこれにつくる者】律法を施行する者

【牧者】法王

【齢む】モーゼの律法はイズラエレ人が 反芻せず蹄分れざる獸の肉を 食ふことを禁ぜり（利未記十一の三以下）

註釋者曰。反芻は智をあらはし雙蹄は善惡の別をあらはす、即ち法王が聖典の奧に通ずれども善惡の別をあきらかにせず、天上の幸を顧みずして地上の幸をのみ求め、帝王に代りて正義を行ふ能はざるをいふと

百―百〇二【幸】地上の。民その導者に傚ひて地上の慾を追ひ、靈の幸を求むることなし

百〇三―五　かく見來れば世の腐敗の原因は星辰にあらずして人間にあり、人間に ありと雖とは人の性惡しきの謂にあらずして 治者の指導その宜きをえざるの謂なり

百〇六―八【二の日】二の主權即皇帝と法王（地、廿四の六十七―九註參照）

百〇九―十一【一は】然るにその後法王の權は皇帝の權を奪ひ、地上の權は 靈界の權に合せらる

【杖】pastorale 僧官のしるしの杖

百十二―四【恐れざれば】二個の獨立せる主權相扶掖して はじめて治國の道を全うす、しかるに政教一途よりいづれば 互に相顧みて警戒するの要なく 互に相助くるの要なきがゆゑに從てその權を恣にするにいたる

【穗を】二主權混合の結果の いかなるやを思ふべし、すべて草木の善惡は その結ぶ實によりて知らるゝなり（馬太傳七の十六以下參照）

百十五―七　以下實例を擧げて政教混亂の禍を示せり

【國】ロムバルヂア。アヂージェ及ポー の兩河の流るゝ國

【フエデリーゴ】皇帝フエデリーゴ第二世（地、十の百十八―廿註參照）。フエデリーゴが いまだ法王と爭はざりし頃

百十八―廿　己あしきため善人と語りまたは之に近づくことをすら恥づる者 今は恐れずしてかの地を過ぐるを得、かの地に 善人なければなり

百廿一―三【神の己を】かの敗德の地を去りて神の許に歸るをうる日を待佗る三人の翁

百廿四―六【コルラード・ダ・パラッツオ】ブレッシアの貴族

【ゲラルド】ゲラルド・ダ・カーミノ。トレギーゾの人にて長く此町を治めしもの（一三〇六年死）、ダンテ「コンギヸオ」の中に（四、十四の百十四以下）その德を稱せり

【グイード・ダ・カステル】レッジオの人

【ロムバルド】（ロムバルヂアの人）グイードは此異名によりて却てよく知らるとの意、佛蘭西人云々については或はグイードの聞佛蘭西人の間に高く彼等グイードを呼ぶにこの異名を以てせりといひ或は佛蘭西人は伊太利人をおしなべてロムバルドと呼べりともいふ

百廿七―九【荷】政教の

百卅―卅二【レーヸ】イズラエレの民の中なる僧侶の族にて代々産業をうくるをえず（民數紀略十八の廿三）。ダンテはマルコの言を聞きて寺院の徒に俗慾に腐心するの非なるを思ひ、レーヸの族が專心神に事ふるをえんため 産業に與かる能はざりし次第をさとりえたりとの意

百卅三—五【消えにし民】昔の民（文武の德あまねかりし頃の）

百卅六—八　我汝の言を聞き違へたるか或は汝我になほもゲラルドの事をいはしめんとてかくいひて我を試むるか、汝トスカナの者にして少しも彼の事を知らざる筈なし

【トスカナ】ゲラルドの名はトスカナにて最も人に知られきといふ

百卅九—四十一　我若し彼をゲラルドと呼ばずばガイアの父といふの外なし

【ガイア】ゲラルドの女（一三一一年死）、素行修まらざるを以て知らるといふ（但異說あり、されど思ふにこゝにては善き父と惡き子とを對照せるならむ）

百四十二—四【光】天使よりいづる

【彼に見えざるさきに】罪未だ淸まらざるがゆゑに天使の前にいづるをえず

第十七曲

ギルジリオとともに黑烟をいでゝ後ダンテまづ忿怒の罰の例を異象に觀、次で天使の敎に從ひ階を上りて第四圈即懶惰の罪の淨めらるゝ處にいたる、此時日既に暮れてまた進むこと能はざれば導者はこゝにダンテのために人間の愛欲を論じ、淨火の罪の分類を明かにす

一—三【鼹鼠】鼹鼠の眼は薄き膜に被はれて物を見る能はずといへる古說によれり

七—九【第一に】烟をいでゝ第一に

十—十二【雲】黑烟

【水際に死せる】水際即山麓を照らさゞる

十三—五【外部より奪ふ】外物の刺激を人に感ぜしめざる

十六—八　想像の力を刺激してこれを活動せしむるもの官能にあらざるときは即星辰若くは天意なり

【光】力。天より出づる力は或は星辰の影響により（自ら）或は上帝の聖旨（意思）によりて人の想像を刺激す

十九—廿一　怒の罰の第一例、プロニエ

【鳥】鶯

【女】プロニエ。トラーチア王テレオの妻なり、その妹ヒロメラテレオに辱められしとき、仇を報いんため己とテレオの間の子イーチを殺し夫を欺いてこれが肉をくらはしむ、神々即その罪を惡み化して鳥となす（オギヂオの「メタモルフオシ」六の四百十二以下參照）

希臘の物語によればプロニエは鶯にヒロメラは燕に化し、羅典の物語によれば前者は燕に後者は鶯に化す、ダンテは希臘の物語に從へり

廿二—四【わが魂は】心異象にのみ凝りて外部の印象をうけざるをいふ

廿五—卅　第二例、アマーノ。アマーノは波斯王アッスエロの臣なり、君寵淺からず諸民跪きて之を拜す、しかるに猶太人マルドケオなるもの獨り之を敬はざりしかばアマーノ大に怒り

諸州の猶太人を悉く殺さんと謀れり、王妃エステルこの謀を王に告げアマーノ遂に木に懸けて殺さる（以士帖書三章以下）

卅四—九　第三例、アマータ。ラチオ人の王ラチーノの妻なり、エーネアの軍近づくを見て之と戰へるツルノ（女婿となるの約ありし）既に死せりと思ひその女ラギーナがかの漂流の客エーネアの妻とならんことを恐れ怨の餘り縊りて死す（「エーネイデ」十二の五百九十五以下參照）

【處女】ラギーナ

【かの人】ツルノ（地、一の百〇六—八並註參照）

四十—四十二【消えざるさきに】睡未だ全く去らずしばらく覺醒と戰ひ眠れる者をして夢現の間にさまよはしむるをいふ、ダンテの異象の一時に消え失せずしてなほしばらく眼前にちらつきたるにたとへしなり

四十三—五【見慣るゝ光】日光

【もの】天使の光

四十九—五十一【額を合す】物を見るの願切

なる時はまのあたり之を見るにあらざればまづまることとなし

五十二—四【我力】 わが視力

五十八—六十　かの天使の人を愛することは人の己を愛するごとく深し、彼は人に請はるゝを待たずして進んで人を助け導き、人は他人の乏しきをみれば未だ乞はれざるにはやくも助を拒まんとす

六十一—三　夜の間は一歩もさきに進むをえざること前に見ゆ(淨、七の五十二以下參照)

六十七—九【顏を】 天使羽をもて詩人の額上なるP字の一を消せるなり

【平和を愛する】馬太傳五の九。惡き怒云々はその解にて善き怒（義憤）に對す

八十五—七　ギルジリオはダンテの問に答へて懶惰の罪のこの圈に淨めらるゝをつげたり、懶惰の罪は即第一の幸を愛してその熱心足らず（義務に缺く）、あたかも舟人の擢を怠りて徒に時を失ふに似たる罪なればなり

九十一—三【自然の愛】 宇宙萬物の中に自然に備はる愛即本能的の愛欲

【魂より出る愛】自由意思により選びて物を求むる愛即理性的の愛欲

九十四—六【他は】 選擇の愛の誤るさま三あり、(一)人の禍を愛するとき、即誇、嫉、怒(百二十二行以下參照)、(二)第一の幸（神）を愛してその愛足らざるとき、即懶惰(百廿七—卅二行參照)、(三)第二の幸を過度に愛するとき、即、貪慾、多食、邪淫(百卅三行以下參照)

九十七—九【第一の幸】（複數）天上の幸特に上帝

【第二の幸】地上の幸

百〇六—八　愛欲の目的はこれを起すもの（主體）の福にあるがゆゑに苟くも愛欲を起しうるものにして己が禍を求むるはなし

百〇九—十一　何物も神を離れて自ら存在し能はざるがゆゑに從て神を憎む能はず、神をにくむは己をにくむに外ならざればなり

百十二—四　禍を愛する愛かく己にも神にもむかはずばたゞ他人にむかふのみ

【汝等の泥】人間の性情

百十五—七　傲慢

百十八—廿　嫉妬

百廿一—三　忿怒

百廿四—六【下に】 下の三圈に

百廿七—九【一の幸】 神

百卅三—五【また一の幸】 地上の幸

【凡ての幸の】眞の幸福の因たり果たるものはたゞ神のみ

百卅六—八【三に分る】 貪慾、暴食、邪淫の

〰〰〰〰〰〰〰〰

第十八曲

ギルジリオまたダンテのために愛欲と自由意思の關係を論じ、論じ終れば時既に夜半に近し、懶惰の罪を淨むる一群の靈後(うしろ)より來りて彼等を過ぎつゝ熱心の例及懶惰の罰の例を唱ふ、靈遠く去るに及びてダンテ眠る

四—六【渴】 求知の念

十三—五【すべての善惡の】 淨、十七の百〇三—五參照

十六—八【瞽者】 無智の徒。彼等はいかなる愛に於ても愛その者はあしからずとの謬見をいだき(卅四—六行)而して自ら世の指導者たらんとす

十九—廿一　人の魂には物を求むる天授の力あり、誘ふものにあはざる間は此力內に眠れども一たび幸のために目覺むれば直ちに外にあらはれて凡てその幸と認むる物を求めんとす(淨、十六の八十五以下參照)

廿二—四　汝等の智力は外物の印象をとらへ來りてこれを汝等の心に示す

廿五—七　若し心この印象に傾むき之と結合するにいたればこゝに愛生ず、是覺醒の愛即外物の刺激によりて心の中なる自然に物を求むる情とあらたに合する力なり

廿八—卅【ところ】 火炎界(淨、九の廿八—卅註參照)。古、火の上方に向ふを以て火炎界に登らんとするぞ

の本來の性向によるとおもへるなり、火こゝにあれば即ちその處をえ、地上にあるよりも長く保つを得

卅一―三　實在の樂に捉へられし魂はその愛欲の目的に到達せんとの願を靈的作用によりて起しこの願を滿たさゞればやまじ

ダンテは「コンヸヸオ」三、二の十八以下に愛の眞義を論じて、こは魂と愛せらるゝものとの靈的結合に外ならず、魂はたとひその自由なると然らざるとによりて緩急の差ありともその本來の性質にもとづき走りて此結合を求むといへり

卅七―九　凡そ人はその自ら認めて幸となすところのものを求むるが故に目的（客體）常に善しとみゆれど、その實常によきにあらず（淨、十七の九十四以下參照）、また假りによしと見做すも愛の過不足によりて罪を犯すことあるは恰も良き蠟の上にあしき印影を捺すがごとし

四十三―五　若し外物の印象をうけて愛生じ、魂は物を求むるその自然の性に從づて動くの外なしとせばその向ふところ正しとも正しからずとも何ぞ之がために善惡の報をうくるに當らむや

四十九―五十一　物質と類を異にし而してなほ之と相合するすべての靈魂は一種特有の力即自然に物を認め且愛する性向を有す

【靈體】forma sustanzial　主要の本質。人間に於てはその靈魂

五十二―四　此性向魂の中に潛む間は見えずさとられず、そのはたらきによりてはじめてさとられ結果によりてはじめてあらはる

五十五―六十　物を認むる最初の力（理智の基）と物を求むる最初の情（愛欲の基）とは自然に魂に備はるものにてそのいづこより來るやは人知り難し

【最初の願】自然に物を認めて之を愛する情。自由の愛にあらざるがゆゑに毀譽褒貶を受くべきものにあらず

六十一―三　他の諸の愛欲がこの自然の愛と相結び相和するにあたりては即自然の愛が自由の愛にうつるにあたりては善惡をわかちてこれを取捨すべき一種の力（理性）汝等の中にあり

六十七―九　古來哲人が德義を說けるは意思の自由を認めたればなり

七十三―五【ベアトリーチエ】月天に自由の意志を說く（天、五の十九以下）

七十六―八【月】四月十一日と十二日の間の夜半近き月。その一面缺くれども猶小さき星の光を沒するに足る

おくれしは月出のおそきをいへるにあらずして、夜半近きほどおそき時にみえしをいふ、月の出でしは午後十時の頃なり

【釣瓶】secchione　伊太利に用ゐらるゝ金屬製の釣瓶、その形球の上部を切り取れるごとし

七十九―八十一　十一月後半の頃羅馬より見れば日はサールデニアとコルシーカ兩島の間に當る方向（やゝ南にかたよれる西）に沒す

【天に逆らひて】西より東に。即諸天の運行に從つて東より西に運行するのほかその固有の廻轉によりて西より東に逆行するなり（ムーア「ダンテ研究」第三卷六十七頁並脚註同七十三頁以下參照）

八十二―四【マントヷの邑よりも】或はマントヷ領內の何れの村よりもの意と解する人あり

【ピエートラ】古名アンデス、ヸルジリオの生地にしてマントヷ市の附近にあり

【わが負はせし荷】わが彼に負はせし疑の荷

或は、わが負へる荷

八十八―九十【民】懶惰の罪を淨むる

九十一―三【イズメーノ、アーソポ】テーベ附近の河の名。テーベ人等夜燈火をともし、これらの川の邊に群がり走りて此町の守護神なるバーコの助を求めきといふ

百―百〇二　熱心の例。マリア、チェーザレ

【マリア】聖母マリアがその親戚エリザベッタを訪はんとて山地なるジウダの邑にいそぎてゆ

けること路加傳（二の四九）にいづ

【チエーザレ】ジウリオ・チエーザレ（シーザー）。馬耳塞を圍み、プルートをこゝにとゞめて急遽西班牙に赴むき、ポムペオ部下の將アフラニオ等をイレルダ（今のレリダ）に攻む

百〇三—五【恩惠】神恩

百〇九—十一【徑】pertugio（孔又は裂目）掘り穿たれし岩間の徑をいふ、百十四行の buca 之と同じ

百十五—七【我等の】我等の止まらざるは神の正義に從はんためなれば無禮とみゆとも許せとの意

百十八—廿【バルバロッサ】フエデリーゴ第一世（一一五二年より一一九〇年まで皇帝）の異名

【ミラーノ】千百六十二年バルバロッサこの市を破壞す

【院主】註釋者或曰。こは千百八十七年に死せる「サン・ヅエの」僧院の院主ゲラルド二世の事を指すと

百廿一—三【ひとりの者】ヹロナの君アルベルト・デルラ・スカーラ（一三〇一年死）。千二百九十二年其庶子ジュセッペをかの僧院の主となせり

百廿四—六【身全からず】跛者なりきといふ、モーゼの律法に從へば不具者聖職を奉ずるをえず（利未記、廿一の十七以下）

百卅—卅二【噛み】懶惰の罰せられし例をあげてこの罪を責むるをいふ

百卅三—五　罰の第一例、イズラエレ人。水分たれし紅海を渡りて埃及よりのがれいでしイズラエレ人（出埃及記十四の廿一以下）は神の人モーゼの敎を守らざりしためジョルダーノ川の流るゝ地パレスチーナに到らずして死せり（約書亞記五の六）

百卅六—八　罰の第二例、エーネアの侶等。アンキーゼの子エーネアと漂流の苦を最後まで倶にする能はざりしトロイア人は譽を棄てゝシチーリアに殘れり（「エーネーイデ」五の七百以下參照）

第十九曲

ダンテ夢にシレーナを見、さめて後天使に導かれてヸルジリオとともに第五圈に達す、こゝには貪慾の罪を淨むる魂の俯きて地に伏せるあり、その一法王アドリアーノ第五世ダンテとかたる

一—三　明方近き時（地、廿六の七—十二並註參照）

【地球】前日の暑さの空中又は地上に殘れるもの冷やかなる地球のために消ゆ

【土星】古、土星に熱を消す力ありとおもへるによる

【月】月はその光によりて空氣と地球を冷却すとおもへるなり、月の寒さといふは猶夜の寒さといふごとし

四—六【ゼオマンテ等】geomanti 偶然に地上に劃點し、その點にもとづきて線をひき形を作りてトする者

【大吉】maggior fortuna その所謂大吉なるものは劃點の位置殆んど寶瓶宮の後半と雙魚宮の前半の星を連ねし如し。太陽は今白羊宮にあり、而して雙魚寶瓶の二宮はこれに先だつものなればこれらの星の東にあらはるゝは日出前約二時間なり

【ほどなく白む】日光のため。原文、その（大吉の）ために志ばし暗さを保つ

七—九【女】シレーナ（十九—廿一行）。貪婪、暴食、多淫の象徵なり（五十八—六十行）、此等はその實極めて醜きものなれども人、情に動かされ誤り見て美しとす（十—十五行）

十九—廿一【シレーナ】神話に曰。シレーナは伊太利西南の海の一島に住む妖女なり、その美くしき歌をもて航海者の心を迷はし之を引きよせて命を斷つと。海は地中海

廿二—四【わが歌をもて】異本、わが歌まで

【ウリッセ】神話によればウリッセを迷はせしものはチルチエにして（地、廿六の八十八以下）チルチエはシレーナにあらず、オーメロの「オヂッセア」には

ウリッセチルチエの敎に從ひ蠟をもて耳を塞ぎてシレーナの難を免かれしことみゆ、ダンテの據る處あきらかならず

【我と親しみて】一たび罪の快樂に耽る者容易に正道に歸らざるの意を寓す

廿五―七【淑女】註釋者多くは之を道理の表象となす、異說多し

卅一―三【とらへ】淑女かのシレーナをとらへ

卅四―六　この一聯すべてムーアの「ダンテ全集」によれり、異本多し、委くは「神曲用語批判」(三三一四頁三百九十)を見よ

【門】岩間の徑をいふ

卅七―九【新しき日】四月十二日午前の太陽

四十―四十二　ダンテは頭をたれ身をかゞめて歩みゐたるなり

四十九―五十一【哀む者】馬太傳五の四に曰、哀む者は福なり。此圏の靈泣き悲めること前にいづ(淨、十八の九十九)

【女主】所有者

【扇げり】ダンテの額上に殘れるP字の一を消さんため

五十八―六十【上】上の三圏即貪婪、多食、及邪淫の罪を淨むるところ

【年へし】世の始よりありし罪なればなり

【人いかにして】人、道理の光に照らして此等の慾の眞相を觀その誘に勝つをいふ

六十一―三【歩履をはやめ】原、踵に地をうち

【天】原、大なる輪

神は諸天をめぐらしその美を示して汝等を招けば汝等その招(餌)に從つて心を天にむかはしめよ(淨、十四の百四十八以下參照)

六十四―六【隼】鷹匠の

【食物】獲物の一部を鷹に與ふる習なりきといふ

六十七―九【環り】環行すべき處即第五圏

第五圏は貪婪の罪を淨むるところなり、ダンテは七大罪の分類に從ひ主として此罪をあげたれど浪費者も亦此圏に罰せらるゝこと地獄の場合と同じ(淨、廿二の四十九以下參照)

七十三―五【わが魂は】詩篇百十九の廿五。塵は地なり

七十六―八　ギルジリオの詞

【義と望】神の正義に從つて淨めの苦をうくとの觀念及時至れば天に登るをうとの信仰

七十九―八十一　魂(アドリアーノ)の答

【右を】圏を右よりめぐれば兩詩人の左は山腹右は圏の外側なり

八十二―四【かくれたる者】かく我等に答へし靈。靈皆俯むきて伏しゐたれば目にてはそれと知り難かりしも耳にて知りえたりとの意

八十五―七　かの靈と語らんとて目付にて導者に許を請へるに導者もまた目付にて許を與へしなり

九十一―三【物】罪を淨むること。罪の清まるを果實の熟するにたとへしなり

【意】罪を淨むるの願

九十七―九【ピエートロの繼承者】法王(地、二の廿二―四參照)。此法王は名をオットブオノ・デ・ヒエースキといひて「コンチ・ヂ・ラヷーニア」と稱するゼーノヷの貴族の出なり、千二百七十六年七月選ばれて法王となりアドリアーノ第五世と稱し在位三十八日にして死す

百―百〇二【流】ラヷーニア

【セストリとキアーヹリ】東セストリ及キアーヹリはともにゼーノヷの東にある町の名

【稱呼】川の名をとりて「コンチ・ヂ・ラヷーニア」といへり

百〇三―五　われ法王の位にあること僅かに月餘に過ぎざりしかど、よく此任の甚重きを知りえたり

【之を泥に汚さじ】法王の位を辱めじ

百〇六―八【虚僞】世の富貴は眞の幸にあらざること

百〇九―十一　かくの如き榮位をうるも慾心

なほ飽かずまた飽かすべき地位なきを見て我は永遠の生命眞の幸を愛するにいたれり

百十二―四【かの時】法王となれる時

百十五―七【爲すところのこと】精神上に及ぼす惡結果

【苦き】忌むべきさまなる

百廿一―六【働】善行

【正しき王の】神の善しとみたまふまで、罪の全く淸まるまで

百廿七―九【耳を傾け】ダンテを見る能はざれども聲近く聞ゆるによりてその跪けるをさとり

百卅―卅二【汝の分】地、十九の百―百〇二參照

百卅三―五　默示錄十九の十參照

百卅六―八【また嫁せず】或問に答へて甦る者は嫁娶せずといへる基督の言（馬太傳廿二の卅等）。寺院は淑女法王はその夫なり（地、十九の五十五―七、及同百〇六―八註參照）、されどかゝる關係は現世にのみありて後世になし、故に昔法王なりきとて我今何ぞ殊更に敬をうくるに足らむ

百卅九―四十一【ところのもの】即ち神に歸るにあたりて缺くべからざるところのもの（九十一―三）

百四十二―四【アラージャ】アドリアーノ第五世の姪にてルーニジアーナの猛將モロエルロ・マラスピーナ（地、廿四の百四十五―七註參照）の妻となれるもの。古註に曰、ダンテは千三百〇六年「マラスピーナ」家に客たりしとき此女を見かつその多くの善行を知れりと

【わが族】原、我等の家。「ヒエースキ」一家

百四十五　わが近親の中にはアラージャの外に善人なければ汝彼女に請ひてわがために天に祈らしめよ

第二十曲

ダンテ、ヴィルジリオとともに山側に沿ひて進み淸貧と慈善の例を聞く、ウーゴ・カペートの靈第五圈にありてダンテとかたり己が子孫の罪業をのべかつその夜の間に誦すべき貪慾の罰の例を告ぐ、詩人等さらに前進すれば全山こゝに鳴動して頌詠の聲四方に起る

一―三　一の意は法王アドリアーノ第五世となほも語らんと欲するダンテの願、まさる意はダンテに妨げられずして罪を淨めんと欲する法王の願にあたる

四―六【障礙なき】地に伏しゐて路の妨となる魂なき

七―九【緣】第四圈に界する斷崖

十―十二【牝の狼】貪婪（地、一の四十九以下參照）。始祖の昔より世にありし罪（地、一の百十一參照）なれば年へしといふ

十三―五【人或は】地上の事物の變遷するを諸天の運行に基因すとなす（淨、十六の六十一以下參照）

【逐ふ者】獵犬（地、一の百以下參照）

十九―廿四　淸貧仁慈の第一例、聖母マリア

【客舍】厩。聖母基督をこゝに生みて馬槽の中に臥さしむ（路加傳二の四以下）

廿五―七　第二例、カイオ・ファーブリチオ・ルシーニオ。紀元前二百八十二年羅馬の「コンソレ」となり「サンニタ」人と和を議するにあたりてその賄賂を卻く、ファーブリチオ死して餘財なく市民公金を以てその埋葬の費を辨ぜりといふ、ダンテの彼を賞せる詞他の著作にもいづ（「コンヸヸオ」四、五の百〇七以下及「デ・モナルキア」二、五の九十以下參照）

卅一―三　第三例、ニコロ。聖ニコロはミーラ（小亞細亞のリチアにあり）の僧正なり、傳へ曰ふ、嘗て人あり貧困のためにその三人の女を賣らんとす、ニコロ之を聞きてひそかに財囊をその家の窓より投げ入れかの女子等をして汚辱の生涯を免かれしむと

卅七―九【報酬】かの靈のために世の善人の祈を請ふこと

四十―四十二【慰】善人の祈。その之を望まざるは子孫に善人なければなるべし

四十三―五　佛蘭西の「カペーチ」王家（巫

き木）の祖先（根）なるを告げしなり、この「カペーチ」家は千三百年に佛蘭西、奈甫里、西班牙の諸國を治めき

四十六―八 されどヒアンドラ人にして若し充分の力あらば速かに仇をわが子孫にむくいむドゥアイ、リルレ等はヒアンドラの重なる町の名なり、こゝにてはヒアンドラ全體を代表す

千三百〇二年コルトライの戰にヒアンドラ人大に佛軍を敗りて之を國外に逐ひ以て佛王ヒリツポ第四世の奪略に報いたり

四十九―五十一【ウーゴ・カペート】佛蘭西のウーゴ公の子なり、九百八十七年路易第五世の後を承けて佛王となり九百九十六年に死す

【ヒリツポとルイージ】ヒリツポ一世、二世、三世、四世。ルイージ六世、七世、八世、九世（以上千三百年までに佛王となれるもの）

五十二―四【屠戶の子】或は、牛商の子。訛傳に基づく

註釋者のいふごとくダンテはウーゴ・カペートと其父ウーゴとを混じ、當時の俗說に從つて之を牛商の子となせるに似たり

【昔の王達】「カルロ」王家の諸王。その最後の王は路易第五世（九八七年死）なり

【灰色の衣を着る者】僧となれる者。但何人を指せるや明ならず、恐くはダンテの記憶の誤ならむ

路易第五世死して嗣子なく當時「カルロ」家に屬する者とてはたゞその叔父、ロレーナのカルロ公ありしのみ、されどこのカルロはウーゴ・カペートにとらはれて獄に下され九百九十二年に死せり

五十五―七 五十五行より六十行に亘る二聯もウーゴ父子の事蹟の相混じたる結果なるべし

【わが手に】攝政として

五十八―六十【わが子】ウーゴ・カペートの子はロベルト第二世といひて九百九十六年より千〇三十一年まで佛王たり、その戴冠式を行へるは九百八十八年即カペート即位の翌年なり

【寡となれる】路易第五世の死によりて

【かの受膏の族】原、此等の者の聖別せられし骨（即「カペーチ」家よりいでし前記の諸王）

六十一―三【プロヴェンツァ】千二百四十六年カルロ・ダンジオがプロヴェンツァの伯なるライモンド・ベルリンギエーリの女ベアトリーチェを娶れるため此地佛蘭西王家に屬せり

六十四―六【贖のために】暴逆の罪を贖はんために、嘲りの反語

【ポンチエウ】ポンチエウ、ノルマンヂア、グアスコニアはいづれも佛王（特にヒリツポ第四世）の奪へる英國領地

六十七―九【カルロ】カルロ・ダンジオ。千二百六十五年奈甫里王國を征服せんとて伊太利に來れり

【コルラヂーノ】千二百六十八年とらへられて奈甫里に殺さる（三、廿八の十、三一八註參照）、時に年十六

【トムマーゾ】聖トムマーゾ・ダクイーノ。名高き伊太利の聖僧（天、十の九十、七一九註參照）、千二百七十四年リオネの宗教會議に赴かんとて奈甫里を出でしときカルロ・ダンジオ己が非行の法王の前に摘發せられんことを恐れ途にて毒殺せしめきとの說による

七十―七十二 以下九十三行までカペートの豫言

【他のカルロ】カルロ・ヂ・ヴァロア。佛王ヒリツポ第四世の弟なり、法王ボニファチオ第八世に招かれ平和の使命を帶びてヒレンツェに來れるも（一三〇一年）黑黨をたすけて白黨をしへたげたれば却て甚しく市の擾亂を大ならしむ、後又シチーリアを得んとてかの地に赴けるもその志を果さず翌二年手を空うして佛蘭西に歸れり

【己と】己と己が一族の罪惡を

七十三―五【身を固めず】軍を率ゐず

【槍】裏切（うらぎり）。ジウダ此武器を用ゐて基督を賣れり（路加傳廿二の四十七―八參照）

七十六―八【いよ〳〵重し】かゝる罪かゝる恥

を小さしとして その非を悔いざるによりて罪も恥もいよ〳〵重き報を來す

七十九―八十一【カルロ】カルロ・ダンジオの子カルロ第二世（一二四三―一三〇九年）。千二百八十四年アラーゴナ王ピエートロ第三世の將ルッジエロ・ヂ・ラウリアとナーポリ灣に戰ひ虜となりてシチーリアに送らる、されど殺さるゝにいたらず、父の死後その王位を繼ぐ

【己が女】千三百〇五年其女ベアトリーチエをフエルラーラの君なる「エスチ」家のアッツオ八世（淨、五の七十六―八並註參照）に與へて莫大の金を得たりといふ

八十二―四【己が肉】わが肉親の子

八十五―七 以下九十行まではヒリッポ第四世の法王ボニフアチオ第八世をとらへしことを責む、ボニフアチオは聖者にあらずして却て墮地獄の罪人なれども その位貴ければ之を責むる者その道を得ざりしを以てダンテは大罪と認めしなり

ヒリッポ四世ボニフアチオと相敵視すること久し、僧侶課税の爭及其他の衝突あるに及びて兩者の隔離愈甚しく遂に千三百〇三年四月佛王の破門となり佛王は之に對して法王の廢位を圖り同年九月グリエルモ・ヂ・ノガレート及シアルラ・コロンナをして法王をその鄕里アナーニ（即アラーニア）にとらへしむ

【小さく】わが子孫の過去未來に於ける一切の罪業も法王虐待の一事に比ぶれば小さしとみゆべし

【百合の花】佛蘭西王家の旗章

【代理者】法王。法王は地上に於ける基督の代表者なり

八十八―九十【嘲】昔の嘲（馬太傳廿七の卅九以下等）を此時ボニフアチオの身にて再びうけたまふ

【醋と膽】聖書の語（馬太傳廿七の卅四）を借りてボニフアチオの苦をいひあらはせるなり

【生ける盜人】二人の盜人 基督と共に磔殺せられし古事（馬太傳廿七の卅八及四十四）に基づき、かのボニフアチオを嘲りし前記ノガレート及シアルラの二人を指す

此二者は自ら苦をうけしにあらずまた殺されしにも何等の害を被むりしにもあらず、彼と此と異なるところこゝにあり、しかしてこの差別を適確にあらはせるもの即 vivi（生ける）の一語なり、さればこの形容詞は當時の光景に一の新らしき色彩を施すものといふべし（ムーア）

法王は獄にあること三日にして羅馬に歸るをえたれどもかゝる汚辱の痛苦に堪へかね遂に病を得て薨ず（千三百〇三年十月）

九十一―三【第二のピラート】ヒリッポ第四世。基督を敵手に渡せしポンチオ・ピラート（路加傳廿三の廿四―五）に似たれば斯く

【殿の中】ヒリッポ第四世が「テムプラーリ」と稱する騎士の一派（もとサロモネ王の宮殿（テムピオ）ありし處に その本部を置きたるをもて此名あり）を迫害して其富を私 せるをいふ（千三百〇七年以降）。法によらずして といへるは騎士等の正不正を分明に審理せずしての意

九十四―六【うるはしうする】人の怒の如く直に激發することなく、しづかに時の至るを待つをいふ

九十七―九【新婦】處女マリア。聖靈に感じて基督を生めり（馬太傳一の十八）

【わが語り】十九―廿四行

百―百〇二 晝の間は我等祈る毎に恰も祈の後の唱和の如く清貧仁惠の例を誦し夜到れば之に代へて貪慾の罰の例を誦す

百〇三―五 罰の第一例。ピグマリオネはチロ（ヒニーチアにあり）の王なり、その姉妹ヂドネの夫なるシケオの財寶を奪はんため之を殺しかつヂドネを欺きて己が罪を蔽へり（「エーネアの歌」一の三百四十以下參照）

百〇六―八 第二例。ミーダはフリージヤの王なり、己が身に觸るゝもの悉く變じて黄金となるを願ひ、バーコ神に請ひて其許をえたり、

されど食物もまた口に觸るゝに從つてすべて黄金に化するをみ、遂に救をバーコに求む（オヰヂオの「メタモルフオシ」十一の八十五以下參照）

百〇九—十一　第三例。猶太人アーカム、ジエリコの分捕品の中より金銀若干を盜みしかば、ジヨスエ（ヨシユア）人々に命じ石にて之をうちころさしむ（約書亞記七の一以下）

百十二—七　第四例、サヒーラとその夫アナーニア。あひはかりて己が私慾の爲に使徒等を欺かんとし、彼得に責められて仆れ死す（使徒行傳五の一—十）

第五例、エリオドロ。シーリア王セレウコの命をうけてゼルサレムメの殿（みや）の寶物を奪はんとせし時一騎士忽焉としてその前に現はれ、馬蹄にかけて之を逐へり（「マツカベエイ」後書三の七以下）

第六例、ポリネストレ。トラーチアの王なり、トロイア王プリアーモの委托によりて其末の子ポリドロ（地、卅の十八）を養ひゐたるがトロイアの衰運に赴くを見るやポリドロの富を私せんとし、之を殺してその骸（むくろ）をば海に投じぬ、プリアーモの妃エークバ希臘軍にとらへられて此地を過ぐとてはからずも我子の骸を海濱に見出し（地、卅の十六—廿一參照）悲のあまりに復讐を企て、僞り謀りてポリネストレに近づき、その兩眼を抉りて之を殺せり（オヰヂオの「メタモルフオシ」十三の四百廿九以下參照）

第七例、マルコ・リチーニオ・クラツソ（前五三年死）。チエーザレ、ポムペオとともに羅馬の三頭政治を行へるもの、强慾を以て名高し、傳へ曰ふ、クラツソ「パルチ」人に殺されしとき王オローデ其首級を求めて溶かせる黄金を口につぎこみ、汝常に黄金に渇きゐたれば今こそ之を飮めといへりと

百卅—卅二【デロ】　チクラーヂ諸島の一にてエーゼオ海中にあり、神話に曰、この島はもと浮島なりしがラートナこゝにてアポルロ、ヂアーナの二神（即ジオヹとラートナの間の子）を生むにいたれるより爾來一處に固定して再び浮遊することなしと（「メタモルフオシ」六の百八十九以下參照）

【天の二の目】日（アポルロ）と月（ヂアーナ）

百卅六—八【至高處】　基督の降誕にあたりて諸天使のうたへる歌（路加傳二の十四）

百卅九—四十一【牧者】　路加傳二の八以下參照

百四十二—四【嘆】　浄、十九の七十—七十二及廿の十六—八參照

百四十五—五十　鳴動及合唱の原因（浄、廿一の四十以下）を知るの願甚だ切なるをいふ

【疑】原、無知

【解説を】原、知るを

第二十一曲

羅典詩人スターチオの靈罪滌まりて天に登らんとし、兩詩人の後より來りて之に加はり地震と頌詠の由來を說き且その一の己が師事せしヸルジリオなるを知りて大に喜ぶ

一—三【サマーリアの女】　井の傍に坐せる基督サマーリアの女の水を汲まんとて來れるを見、我に飮ませよといふ、女その猶太人なるを知りてあやしむ、基督曰、汝若し我に求めば我活水を汝に與へん、およそ之を飮む者永遠に渇くことなし、女曰、主よ其水を我に與へよ（約翰傳四の六以下）

【水】眞

【渇】求知の願（浄、廿の百四十五以下參照）。ダンテが「コンヸヸオ」の巻頭に引用せるアリストーテレの言に曰、人皆自然に知を求むと

四—六【障】　路に伏せし魂

七—九　基督甦りて後ゼルサレムメとエムマウスの間の路にてその二人の弟子に現はれたまへり（路加傳廿四の十三以下）

十三—五【表示】　答禮の。或曰、cenno は挨拶の詞にて Pace con voi（汝等安かれ）に對し E collo spirito tuo（汝の靈も）と應ふる定例の挨拶をいふと

十六—八　問ふ（地震の原因を）に當りてま

づ對話者の幸を希へる罰（地、二の八十二―四並註參照）

【永遠の流刑】鄕土なる天に歸るを えずして永くリムボに止まること

【眞の法庭】神の正しき審判

十九―廿一　ギルジリオの問はざるさきにその詞をさへぎりていへり

【その段】神の許に通ずる路即淨火

廿二―四【標】額上のＰ字

【善き民と】天上の祝福を受くる者なるを

廿五―七　されど彼猶生くるがゆゑに

【女神】ラケージ。定命を司どる三神（パルケ）の一にて生命（いのち）の絲を紡ぐ者

【クロート】同三神の一、人生るゝ毎にその生命の糸となるべき麻の量を定めて 之を絲車の棒に掛く

廿八―卅【姉妹】同じ造主よりいづれば

【物を見る】肉體の羈絆を脱せざるをもて その理性の目我等の如く明かならず

卅一―三【闊き喉】地獄の最廣き圈即リムボ

卅四―六【濡るゝ】海波に

卅七―九【要にあたれり】原、針の目を透せり

四十―四十二【此山の聖なる律法は】或は、此聖なる山は

四十三―五【その原因と】淨火門内に於ける變異の原因となるべきものは たゞ罪淨まれる魂のみ。換言すれば、天より いでし（即ち神に造られし）魂天に歸ることある時に於てのみ かの地震喊聲の如き變異起る

四十六―八【階】淨火の門の（淨、九の七十六以下參照）

四十九―五十一【タウマンテの女】イリーデ。タウマンテとエレットラの間に生る、虹の 女神なり（神話）。朝は西夕は東にあらはるゝをもて處を變ふるといへり

五十二―四【乾ける氣】アリストーテレの說に曰。地上の變異すべて 地氣より生ず、此氣の濕れるもの雨、雪、雹、露、霜となり、 その乾けるもの風を起し 乾きて强きもの地震を起すと（地、卅三の百〇三―五註參照）

【ピエートロの代理者】門を守る天使（淨、九の百〇三―五並廿七―九參照）

五十五―七【下】淨火門外

【地にかくるゝ】地下にひそむ 乾ける氣の動くによりて地震ふといへる古の學說によれり

五十八―六十【起ち】起つは地上に伏す第五圈の魂につきていひ、進むは 他の諸圈の魂につきていふ

六十一―三【意志】天に登るの願。己が罪淸まる時は魂忽ち此願を起し かつ之を起すをよろこぶ、故に此願の起るは即罪 淸まれる證據なり

【侶を變ふる】罪を淨むる魂を離れて 福を享くる民に到る

六十四―六　罪未だ淸まらざる時に於ても天に登るの願なきにはあらず、されど かゝる時の願は正義に從て 罪を淨めんとする他の願に檢束せらるゝが故に自由の願にあらず

【罪を求めし如く】在世の日は 心の願罪に傾きて意志（眞の幸を求むる願）に さからひ、今は心の願罪を淨むることを求めて 意志（天に昇るの願）にさからふ

六十七―九【我】プブリオ・パピーニオ・スターチオ。有名なる羅典詩人、一世紀の後半の人

【五百年餘】その以前は 第四圈にあり（淨、廿二の九十一―三參照）

【まされる里】原、まされる闕。天

七十六―八【網】罪を淨むる願

【解くる】罪淸まるによりて

【倶に喜ぶ】喊聲をあげて

八十二―七　羅馬皇帝ヱスパシアーノの子チトー（後、位を嗣ぎ七十九年より八十一年まで 皇帝たり）がゼルサレムメを毀てる頃 即基督曆の七十年

【王】神

【傷】基督の。聖都の毀たれし事を 基督の磔殺に對する神罰と見做せるなり

【名】詩人の

【信仰】基督教の

八十八―九十【有聲の靈】歌

【トロサ】佛蘭西の南にある町。註釋者曰。スターチオの生地はトロサにあらずしてナーポリなり、こは此詩人の詩集「サルヱ」に因りて知るをうべし、されど「サルヱ」の發見は十五世紀の事に屬しダンテの時代にては一般にトロサの文人ルーチオ・スターチオ・ウルソロと詩人スターチオとを混じたりと

【ミルト】常綠木の名、之を詩人の冠とすること桂樹(ラウロ)の如し

九十一―三　スターチオの作に「テーベの歌」及「アキルレの歌」あり

【第二の】「アキルレの歌」未だ完結せざるうちに我は死せり

九十四―六【情熱】詩的

【焔】「エーネアの歌」(エーネイデ)

九十七―九【これなくば】この歌なくばわが著作に何等の價値もなかりしなるべし。一ドラムマは一了の八分の一

百―百〇二　ギルジリオは前十九年に死せり

【一年】たとひ今一年淨火にとゞまるとも

百〇六―八【誠實】その人正直なれば正直なるほど哀樂の情を蔽ひ難し

百卅―卅二【ふかするなかれ】されど淨、六の七十五にはギルジリオとソルデルロと相抱けること見ゆ

第二十二曲

詩人等第五圈より階を踏みてのぼる、その道すがらスターチオギルジリオに己が罪と改悔の次第を告げかくて第六圈に到りて右に進めば路の中央に一果樹あり、翠葉の中よりいでゝ節制の例を誦す

一―三【疵】額上のP

四―六【彼は我等に】異本、また義を慕ふ者等(天使等)我等に福なりといひ

【シチウント】*sitiunt*(渴く)。馬太傳に曰く、義に饑ゑ渴く者は福なり(五の六)

此一節羅典の聖經には *Beati qui esuriunt et sitiunt iustitiam* とあり、その中の *esuriunt* を省きて單に *Beati qui sitiunt iustitiam*(義に渴く者は福なり)といへるなり、饑う(*esuriunt*)を省けるは之を渴くとわかちて第六圈の頌詠となさんためなり(淨、廿四の百五十一以下參照)

異本にシチオー(*sitio* 我渴く)とあり、前項異本の文とあはせて委しくはムーアの「用語批判」四百〇五頁以下を見よ

十三―五【ジョヱナーレ】デーチモ・ジウニオ・ジョヱナーレ。有名なる羅典詩人(一三〇年頃死)、その諷刺詩第七篇(八十二行以下)にスターチオの著作を稱讃せる詞いづ

十九―廿一【わが手綱】わが問露骨にして禮を失ふことあらば

卅一―三【圈】第五圈

卅四―六【あまりに】浪費の罪に陷るばかりに

【幾千の月】五百年餘の間(淨、廿一の六十七以下)浪費の罰をうく

卅七―四十二【あゝ黃金の】貪る者も費す者も共に黃金を求めていかなる惡をも行ふをいふ

此句「エーネアの歌」三の五十六―七にいづ、但し sacra(sacer 聖(きよ)き、不淨の)を不淨の意に用ゐること伊語の用例に反するがゆゑに異說多し

【轉ばしつゝ】第四の地獄にて重荷をまろばすこと(地、七の廿五以下參照)

【牴觸】原、試合。貪る者と費す者と相互に打當ること(同上)

四十三―五　汝の言を聞きて浪に費すことの罪なるを知り、これを悔ゆること　わが他の罪の如くなりき

四十六―八【髮を削りて】最後の審判の日浪費の記念に髮を短くして　墓より起き出るをいふ(地、七の五十五―七並註參照)

四十九―五十一　地獄と同じく淨火にても罪の相反するもの（浪費と强慾の如き）同一の場所に罰せらる。緣を涸すは活力を消耗するなり、即悔恨によりて罪を贖ふなり

五十五―七【牧歌】ギルジリオの著作に牧歌十篇（Bucolica）あり

【二重の憂】テーベ王エーヂポとジョカスタの間の二子（エテオクレ、ポリニチエ）。ジョカスタ、エーヂポの己が子なるを知りて縊死す

【酷き】兄弟相殺すにいたれる（地、廿六の四十九―五十四註參照、十四の六十七―七十二註及）。この爭のことスターチオの「テーベの歌」にいづ

五十八―六十　汝が「テーベの歌」に詩神ムーゼの一なるクリオの助を求め且その德をほめたゝへし言葉をおもへば汝はその頃未だ基督の敎を信ぜざりしに似たり（ムーアの「ダンテ研究」第一卷二百四十四頁參照）

六十一―三【日】天の光即神の導

【燭】地の光即人の敎

【漁者】聖彼得（ピエートロ）。基督十二弟子の一、魚を漁り（すなど）また人を漁る（馬太傳四の十八以下等）。之に從つて帆を揚ぐるはその信仰にならひて基督徒となるをいふ

六十四―六　七十三行とその意同じ

【パルナーゾ】フオチーデ（希臘の）の山、詩神等の住むところ

七十―七十二【世改まり】第四牧歌（五―七）にいづ、中古世に行はれし說に從ひ、この歌をもて救世主（新しき族）降臨の豫言と見做せるなり

【人の古】第四牧歌にはサツルノの王國とあり、世再び罪の汚なき黃金時代にかへるをいふ

七十三―五【彩色】明細にかたること

七十六―八【眞の信仰】基督敎の信仰

【永久の國の使者等】天國の使者即使徒等

八十二―四【ドミチアーノ】ヱスパシアーノの第二子、兄チト（淨、廿一の八十二）の後を承けて八十一年より九十六年まで皇帝たり

八十八―九十【わが詩に】我未だ「テーベの歌」第九卷を終へざるさきに

【テーベの流】「テーベの歌」第九卷に王アドラストが希臘人をみちびいてテーベ附近の二水イズメーノとアーソポに到れることとみゆ

九十一―三【微温】怠慢の罪

九十四―九【幸】基督敎の信仰

【テレンチオ】プブリオ・テレンチオ・アフロ、羅典詩人にて喜劇の作者なり（前一五九年死）

【年へし】異本、友

【チエチリオ】チエチリオ・スターチオ、羅典詩人（前一六八年頃死）

【プラウト】マルコ・アツチオ・プラウト、羅典詩人（前一八四年死）。チエチリオと同じく喜劇の作者なり

【ヴァルロ】プブリオ・テレンチオ・ヴァルロネ・アタチーノ、羅典詩人（前三七年頃死）

【何の地方】地獄の第何圈

百―百〇二【ペルシオ】アウロ・ペルシオ・フラツコ、羅典諷刺詩人（三四―六二年）

【希臘人】オーメロ（地、四の八十八以下參照）、詩人中の詩人

百〇三―五【第一の輪】地獄の第一圈即リムボ

【乳母等】ムーゼ

【山】パルナーゾ

百〇六―八【エウリピデ】名高き希臘詩人、悲劇の作者（前四八〇―四〇六年）

【アンチフオンテ】古の希臘詩人、悲劇の作者（生死の年不詳）

【シモニーデ】希臘敍情詩人（前五五六―四六八年頃）

【アガートネ】希臘悲劇詩人（前四四八―四〇一年頃）

【桂樹】淨、廿一の八十八―九十註參照

百〇九―十一【アンチゴネ】テーベ王エーヂポとジョカスタの間の女

【デイヒレ】アドラスト王の女にしてチデオ（地、卅二の百卅）の妻なり

【アルジア】デイヒレの姉妹にしてポリニチエの妻なり

【イズメーネ】アンチゴネの妹、その生涯を不

幸の中に終へたるもの

百十二—四【女】イシヒレ（地、十八の九十一—三參照）。海賊のため ネメア王リクルゴに賣られてその婢となりゐたりしとき テーベを攻むる諸王にランジアの泉（ネメアの近傍なる）を敎ふ（淨、廿六の九十四以下參照）

【チレシアの女】マント（地、廿の五十二以下）。但しマントは第八の地獄 第四嚢にあり、もし「淨火」の此部分を「地獄」のかの部分より後の筆とせば、この錯誤は全く不思議といふの外なし

【テーチ】アキルレの母、海の女神

【ディダーミア】アキルレ の戀人（地、廿六の六十一—三註參照）

百十八—廿 時は日出後四時過即午前十時過なり

【侍婢】時（淨、十二の七十九—八十一並註參照）

【轅】日の車の。第五の侍女 轅の尖を上にむくるは第五時未だその半に達せざるなり

百廿一—三【緣】道の外側

百廿四—六【魂】スターチオ

百卅六—八【方】左方、岩壁に塞がる

百卅九—四十一【汝等は】食慾の罪を淨むる魂等は かの果實を採ること能はず（淨、廿四の百〇三以下參照）

百四十二—四 節制の第一例。カナの婚筵に招かれしマリア酒盡きたるを見て 基督に告ぐ（約翰傳二の一以下）。淨、十三の廿八—卅には 之を慈愛の例としてあげたり

【今汝等の】汝等のために罪の赦を神に乞ふ

百四十五—七 第二例。昔の羅馬の婦人は酒を用ゐざりきといふ

第三例。豫言者ダニエーレがバビロニア王ナブコドノゾルの與ふる食物と 酒を拒めること（但以理書一の三以下）

百四十八—五十 第四例。黄金時代の自然生活（「メタモルフォシ」一の八十九以下參照）

【ネッタレ】神話の神々の飲料

百五十一—三 第五例。洗禮者 約翰（馬太傳三の四）

百五十四【聖史】馬太傳十一の十一に曰く、女の生める者の中に洗禮者 約翰より大なる者起れることなし

第二十三曲

詩人等第六圈にて、食慾の罪を淨むる一群の靈にあふ、その一フォレーゼ・ドナーチダンテをみとめて之と語り、かつ大にヒレンツェの婦人を罵る

一—三 靡葉の中よりいでしをあやしみてこれに目をこらせしダンテの姿は 恰も鳥を捕ふる者の獲物を求めて 木の間をうかゞひ見るごとし

四—六【時】淨火歷程のために定め與へられし時間

十—十二【主よわが唇を】主よわが唇をひらきたまへ、さらばわが口汝の讚美を あらはさむ（詩篇五十一の十五）

第五十一篇は詩篇中改悔の七篇と稱せらるゝものゝ一にて羅典の聖經にては Miserere mei（我を憐みたまへ）にはじまる（淨、五の廿二—四參照）。こゝにその第十五節をえらべるは昔口をもて罪を犯せるに因みてなり

【喜とともに】その信仰をよろこび、その悲哀に同情をよせしなり

十三—五【その負債の】その罪を淨むるならむ

十九—廿一【もだし】はや木と水を離れたれば（六十七行以下參照）

廿五—七【エリシトネ】神話。テッサリアの人、斧をチェーレレの森に入れしため この神の罰をうけて飽くなきの饑になやまされ 遂に己が身を啖ふ（オヸデオの「メタモルフォシ」八の七百卅八以下參照）

廿八—卅【マリア】ゼルサレムメ包圍の際（七〇年）饑餓に迫りて己が子を喰へりといふ女の名

【民】饑に苦める猶太人

卅一—三【OMO】（人）、人の顏に人の字あらはるとの說をなす者あればなり、此說に從へば眼は左右のOにあたり 鼻と眉のあたりは中央のMにあたる、肉痩するに從て Mいよ〳〵いちじるし